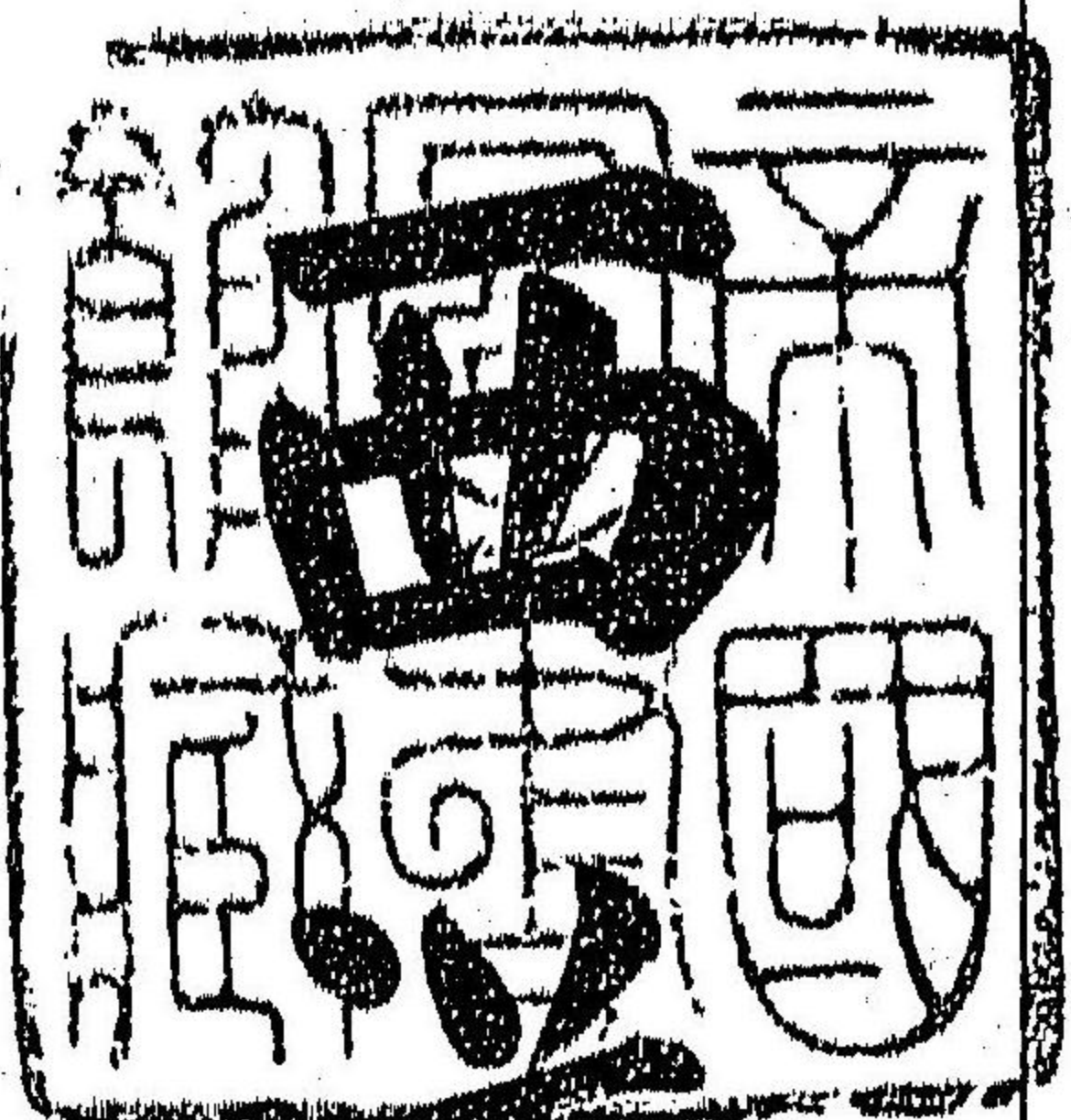


中島半次郎述



西洋教育史



早稻田大學出版部藏版

西洋教育史目次

總論 教育史とは何ぞや

- 第一節、教育史の定義
- 第二節、教育史に記載すべき事項
- 第三節、教育史の種類
- 第四節、教育史研究の利益
- 第五節、教育史の講述の順序

上世の教育

第一章 希臘

- 第一節、希臘の風土及び人種
- 第二節、希臘の宗教文學
- 第三節、希臘治世の年代
- 第四節、スパルタの教育
- 第五節、スパルタ教育の長短
- 第六節、ピタゴラス
- 第七節、アゼンヌ教育の總說
- 第八節、アゼンヌの立法者
- 第九節、アゼンヌ教育の時期
- 第十節、アゼンヌ初めの間の教育
- 第十一節、アゼンヌ後の時期の教育

育 第十二節 ソクラテス 第十三節 プレトール 第十四節 ア
リストートル 第十五節 希臘の末路と諸學派の勃興 第十六
節 アレキザンドリヤに於ける教育 第十七節 アゼンスの教育に
對する批評

第二章 羅馬……………八九

第一節 羅馬の風土人種等 第二節 羅馬治世の年代 第三節 羅
馬人の特性 第四節 共和時代前半の教育 第五節 共和時代後
半の教育 第六節 帝政時代の教育 第七節 希臘の影響 第
八節 修辭學派 第九節 ストア學派 第十節 帝王の教育獎勵
第十一節 人類思想の發達 第十二節 羅馬帝國の滅亡 第十
三節 羅馬の教育に對する批評

第三章 基督教と教育……………一二九

第一節 基督教と教育 第二節 ユデア人の特性 第三節 基督
第四節 此教義と教育思想の變動 第五節 基督教羅馬に入る
第六節 アレキサンドリヤに於ける基督教 第七節 異教徒の教
育に對する衝突 第八節 基督教的文學の成立 第九節 中世紀
への移り行き 第十節 基督教的教育に對する批評

中世の教育

第四章 五世紀より十二世紀まで……………一五三

第一節 中世紀の年代 第二節 教育の舞臺の一變 第三節 異教
徒の撲滅 第四節 新種族の特質 第五節 新種族の受取れる遺
産 第六節 宗教學校 第七節 シーレマン帝 第八節 亞刺比
亞人の影響 第九節 國民の教育獎勵 第十節 十一世紀末の進
歩

第五章 十二世紀より文藝復興時代に至るまで……………一六九

第一節 煩瑣學派 第二節 武士教育 第三節 庶民教育 第四

節、學科研究の氣運 第五節、大學の起源 第六節、女子教育
第七節、宗教的の復活 第八節、中世紀の教育に對する批評

四

西洋教育史

總論 教育史とは何ぞや

中島半次郎講述

第一節 教育史の定義 教育史とは今日の如き教育が如何にして成立せしか、其變遷發達を明にするものといふ。

我國に於ても歐米諸國に於ても、今日教育は社會上の一大事實として成立し、益々其發達を企圖せられつゝあり。これ否むべからざる一大事實なり。教育史は乃ち此現存の事實を踏臺とし、振り返りて其變遷發達を尋ね、以て此現存の事實の成立せし因由を明にせんとするものなり。従つて教育史に於ては、第一に今日の教育に影響を與へざりし國は記載せず。古來東西に國を立てたる者其數に於て何を限らん。然れども教育史は總ての國の教育の變遷發達を記載せんとはせず、今日の教育を爲すに力ありたる國々のみを捉へ來りて之を記載す。東洋にしては

支那、印度、日本、西洋は以ては希臘、羅馬及び歐米諸國は此記載の範圍内に入るべし。第二に教育史は、それ等の教育の沿革を叙ぶるにも、今日の教育に影響を及ぼさざりし時代の事は記載せず。それ等の國にありて教育は餘程の昔より行はれたりしならんも、逸たる太古の事は尋ねず、教育史は其過去の範圍を今日の教育に影響を及ぼしたる點に限る。此點よりすれば、東洋の支那にありては、今より凡そ四千年前、西洋の希臘にありては、今より凡そ三千年前の事より記載し始むべし。右の定義に於て殊に今日の教育と言ひたるは此故なり。而してそれ等の年代より今日までの事を記載するに、其變遷發達を明にすと、變遷及び發達の二語を使ひたるは聊か故あり。變遷を明にすとは單に教育の成行ける様を他くまでも事實に訴へて明にするもの、發達を明にすとは其教育の成行ける事實につきて、史家一身の獨斷的批評にあらざり、其事實よりして自ら歸納せらるべき言ひ換ふれば、其事實の間に含まれ居たる前後の關係につきて内發的批評(immanent criticism)を加へ、以て其の發達の跡を尋ぬるものをいふ。即ち教育史は、單に教育沿革の事實を記載するのみにあらず、其事實に基づきて其發達の跡をも觀じ、遂に今日の教育に之を適合

せんと務む。實に教育史の研究は死せる過去の記載にあらずして生ける現在の説明なり。過去に訴へて生ける現在を説明し、進んで未來にまで其光明を投げんとするものなり。第二節 教育史に記載すべき事項 教育史に記載すべき事項は、教育といふ事柄の性質を明にするに依りて自ら定まるべし。英のジョン・スチヤート・ミン(John Stuart Mill, 1806—1873)は、教育を以て今の時代の者が後の時代の者に對し、今日まで得たる文明を傳へ、更に之を進歩せしむる爲めに施す所の陶冶をいふとし、獨のシラエム・ハッセル(Schleiermacher, 1768—1834)は、古き時代が若き時代に對し、道徳的影響を興ふる爲めに施す事業なりとせり。今此定義を採用し來りて、教育の事業を更に細かく考ふれば、前時代の者が後時代の者に文明若しくは道徳的影響を興ふるには、第一には其國の風土、其國の國體、其國民の特質、又は其時代の社會的生活に伴ひて其文明なり、道徳的影響を興へんとす。教育は此國家社會の營む一事業なるが故に、教育の變遷發達を明にするには、先づ其風土、國體、國民の特質、又は時代の政治的、法律的、宗教的、道徳的、科學的、文學的、生活など、一言に言はば、其時代の開化の事實を調

べざるべからず。第二に其國家社會に於て教育を營むには、或は施政者が法令を以て教育の制度を立て、之を奨励し、或は私人が奮つて此事業に當るを以て、教育史は此制度の變遷發達を調べざるべからず。第三にはかくして法令に依りて學校成り、個人は又家庭教育の力の足らざる所を補はんが爲めに、學校に其兒を送るを以て、此學校の狀況即ち管理、衛生、教授、訓練の模様より、教師が如何なる待遇を受けしかの如き事實、或は又兒童が學校に入る前に受くる家庭教育の有様は如何なりしかの事實を調べざるべからず。第四には其如き實際の教育を、心ある哲學者、教育家は、一種の理想、一個の學說を立て、之を改め行くを以て、教育史は其學說の發達、又其學說が如何程當時教育の實際を改善したるかを記載せざるべからず。而して第五に此の事業を進むるは、施政者、哲學者、教育家等の力に依るを以て、教育史はそれ等の人が一身を教育の犠牲に供して、之が進歩を計りたる傳記、或は其熱血を注ぎて書ける著書などを記載せざるべからず。即ち教育史は今日の教育を爲すに與りて力ありたる國々に於て、其次代の者を如何なる理想の人と爲さんとしたるかを明にするを主とし、今舉げたる五つの方面より之を説明し行かざるべ

からず。第一は之を教育史の社會的生活と關係の方面、第二は教育史の制度の方面、第三は實際の方面、第四は學說の方面、第五は事實家の方面と言ふべく、かくして教育史は一面、現實の開化史と關し、他面、理想の哲學史と手を携へ、教育に注意を向くる國君、施政者、哲學者、教育家の手を借りて、遂に今日の教育と發達せしものゆゑ、教育史は開化史と哲學史との間を縫ひ、以上五つの事項を洩れなく記載せざるべからず。

世の教育史と稱するもの、或は第三の實際史に精しくして、此實際を改め行く第四の學說の變遷を重く見ざるものあり。或は第四の學說變遷發達を記するを主として、第一の其時代との關係、第三の其の實際、第五の之に力を盡したる人々の傳を等閑に附せるあり。或は又第五の教育家の事業を記するを主として、第一の其社會的生活との關係の如きを疎略にせるあり。而して最も多きは第四を主とする教育學史なり。教育學史は即ち教育史にあらず、教育史はすべて是等の事項を總括して最も完全に之を記載したるものならざるべからず。

第三節 教育史の種類 完全なる教育史は唯一種なりといへど、其記載する場所

につきて、之を東洋と西洋との二つ、或は一般の歴史に世界史と國史とある如く、世界教育史と各國教育史とに分つことを得べく、又其記載する事柄につきて言へば、教育が社會的生活と關係して發達したる歴史、教育制度史、教育實際史、教育學說史、及び教育改革家史の五つあるを得べし。或は又教育事業の中一つ、例へば教授を題目として教授史、訓練を題目として訓練史もあることを得べし。本講義は旨と西洋教育史の大體に涉りて講ずべし。

第四節 教育史研究の利益 教育史は、以上言ふ如きものなるが故、之を研究するに依りて、教育と國家社會との親密なる關係、宏大なる教育制度、種々なる教育史上の計畫、深遠なる教育の理想を了解し、同時に教育界の偉人に逢ひて其機むなき精神に接することを得べく、かくて今日の教育が如何にして成立したるかを知ると共に、又未來に掛けて如何に之を改善し行くべきかの方針を明にすることを得べし。教育史は世界各國に涉りて、過去四千年來の經驗を示すを以て、之を研究するに依りて、獨斷に陥り、又は或一派の説を妄信する如き偏見を去ることを得べく、或は過去を尊重する歴史心と共に、又未來を改めんとする哲學心を起すことを得べし。

し。要するに教育史の研究は、教育者に對する實物教授とも言ふべく、之に依りて教育上の夥しき考案を、具體的形狀を以て示し、著明なる人、又は顯著なる時代に依りて之を説明す。教育史に通ぜば既に教育事業の大體に通ぜりといふことを得べし。殊に教育史を研究するに依りて吾等の得る所は、吾等が教育上に盡し、効績は一の史的潮流の中に其生命を托し、假令我身は死すとも、永久に其の光を發して、國家人民の發達を助くとの信念を高むると是なり。これ今日の教育は、實に吾等の祖先が努力に努力を重ね、苦心に苦心を積み、作り爲したる潮流に外ならぬ事實を認むるに依りて、知らず、此信念を高めしむ。

第五節 教育史講述の順序 ことに西洋教育史を講ずるに當り、之を大體、上世、中世、近世の三つとし、更に左の如き順序に分つ。

上世の教育

第一章 希臘

第二章 羅馬

第三章 基督教と教育

中世の教育

第四章 五世紀より十二世紀まで

第五章 十二世紀より文藝復興時代まで

近世の教育

第六章 文藝復興時代及び宗教改革時代

第七章 十七世紀

第八章 十八世紀

第九章 十九世紀

歸結

第十章 教育史の概見

教育史の概見 教育の歴史は、人類の歴史と密接な関係にある。原始時代から中世まで、教育は宗教と密接に結びついてきた。中世の教育は、修道院を中心とした宗教教育であり、知識の伝達よりも信仰の育成に重点が置かれた。近世になると、宗教改革の影響で、教育は世俗化し、国家による義務教育が導入されるようになった。このように、教育の歴史は、社会の発展と密接に結びついてきた。

第三編 上世の教育

第一章 希臘

第一節 希臘の風土及び人種 希臘は地中海に於ける一半島ヘラスに國を建てたるものにして、此ヘラスは土地豊饒、氣候溫和、何れの地よりするも海岸を距ること四十哩に出でず。外に對しては自らエジプト、フォエシヤ、ペルシヤなど、交通して貿易を爲し、又其開化を取り入るゝに適し、内には山岳到る處に聳えて數多の小地方に分れ、互に競争する便宜を有せり。紀元前凡そ千百年頃には、二十餘の都府言ひ換ふれば國あり、其力強きもの之が覇權を握れり。中に強大なる二都府即ち國あり、スパルタ及びアゼンスといふ。スパルタはドリヤン種族が建てしもの、アゼンスはアイオニヤン種族が建てしものにして、此二國多くは希臘の覇權を握れり。従つて希臘の教育といへば、此スパルタ、アゼンス二國の教育を指すものにして、就中アゼンスを以て希臘の花と爲す。スパルタはドリヤン種族の性質より、武を以て勝り、保守的、社會的、專制的の傾を有し、アゼンスはアイオニヤン種族の性質より、

文を以て秀て、進歩的、個人的、民主的の傾を有し、是等の傾教育にも現はれて爾々反對の觀を爲せり。

第二節 希臘の宗教文學 希臘には夙に一種の宗教あり、多神教なり。其神の重なるもの、あらゆる神の父ジウピターを始め十二座あり。時等の神、各其眷族を有して、種々の人間の如き動作を爲すとの傳説早くより傳はれり。希臘の神話、是なり。此神話の中に、希臘建國の精神も籠り、希臘建國の狀態も含まれ居れるを、ホメロス（紀元前千年頃の人とも又八百五十年頃の人ともいふ）ヘシオド（紀元前八百年頃の人）の二人之を其筆に寫して所謂希臘の文學は生ぜり。此文學はスパルタとアゼンズとを問はず、共に之を家庭の物語、又は學校の教科用に用ひたり。而して又是等の神々を祭る爲め、オリムピヤの祭を始め四個の國祭あり。此國祭には、希臘全國の國民並びに其殖民地のものども集り來り、相共に神の威徳を頌し、文武の演技を爲して盛んに之を祝し、暗々に希臘全體の統一を爲し、希臘の社會教育を爲せり。

第三節 希臘治世の年代 希臘の治世は、紀元前殆んど千年間を占め、此間を第一

期千百年より五百年まで、第二期五百年より三百三十八年まで、第三期三百三十八年より百四十六年羅馬に滅さるまでの三つに分つ。スパルタの教育の盛んなりしは此第一期の後半より第二期全體、アゼンズの教育の盛んなりしは第二期の第三期全體にして、荷アゼンズの文明と教育とは、希臘の滅ぶると共に滅びず、始めはホメロンの領後には羅馬領たりしエジプトのアレキサンダーの時に其餘光を殘し、轉じて羅馬並びに中世紀の文明を醸し成し、之を以て、右の年代に更にアレキサンダーの榮えたりし紀元後凡三百年までを加ふべし。

第四節 スパルタの教育 スパルタはドリヤン種族の一部が希臘北部の山間より侵入し來りて南部ペロポネサスに入り、其居民を征服し、其上に立ちて專制の權を振ひしものにして、是等を士族といふ。其數九千戸ありて、家族共凡そ三萬人あり、從來の士民は之をペリオン即ち平民と稱し、少くは自由を許されたるも、政治上の權利は有せず、而して其下にスパルタ人より征服せられて擔せられたるものハ一階級あり、之をヘラツ即ち奴隸といふ。スパルタは斯くの如き國體にて、外には之と競争する敵あり、中には動もすれば反抗せんとする平民奴

隸の二階級、しかも此二階級の者の數は右の士族に十倍せしを以て、自ら士族間の一致團結必要となり、教育の方針も亦此士族間の團結を鞏固にして、スバルタの威を揚ぐる子弟を作ることに向けたり。而して此國家の必要に應じ、スバルタの將來をも考へて其憲法を立てたる者をライカルクスと爲す。(紀元前八百五十年頃のライカルクスは、紀元前八百二十年に當時能く治まりたるの稱ありしや、一島島の施政を参照して憲法を立て、此憲法に於て、土地を平均に分配して貧富の懸隔を拒ぎ、嚴重に奢侈を禁じ、懦弱を賊め、公共的精神を養ふ精神あり、士族の男子は必ず公共の食卓に就くべく、家に在りて任意の食事を爲すことを禁じ、教育につきてはスバルタの士族は男女に拘はらず、すべて教育を受くべく、其教育の目的は、第一に体力を強健にし、第二に國家に對する愛國心を養はしむる如くすべしと規定し、又健全なる小供を得んと、の精神より、男女結婚するには必ず國家の承認を経べし、其間に生れたる子の健康は又國家の檢閲を受けざるべからざることを規定せり。此憲法に依り、スバルタの教育は其基礎を得たり。それ以前にありては、教育と云はば、槍を投ぐること、家長に従順なるべきこと、及び神を敬すべきことを教へたるに過ぎざりき。

へたるに過ぎざりき。憲法既に成れり。生るゝ兒女は必ず公共會議の席に連れ行きて國家の檢閲を受けしめざるべからず。此際其兒若し虛弱なるか又は片輪なる時には之をタイクタル山の谷に棄てしむ。さりながら、燒野の雉子夜、の鶴、親は恩愛の羈絆に牽かれ、竊に平民又は奴隸に囑して之を拾はしめ、其子として育てしめたるもありきといふ。其強壯なるものは之を母の手にて養育す。母の手にて養育するは七歳までにして、之を母の子と稱す。後に國家の子となるに對するなり。母の子の間は、体力を強めしめ、長者を敬せしめ、又古英雄の傳、希臘の神話を知らしむるを主とし、此時より、危衣、鹿食に慣れしめ、後には獨にて寝ねしむ。七歳より母の手を離れて、國家の子となり、國費を以て立てられたる共同教育場に入れらる。兒童は多くの仲間の人として、幾多の小班に分れ、それ、國家より任置せる兒童訓練者に屬して、教授及び監督を受く。共同教育場の長は之をペイトムスと言へり。共同教育場の設備は極めて質素にして、食物も亦簡單に衣は薄く、臥床は兒童自らがキムクス河に行き、其河の岸に生ふる、藁の穂を取り來りたるものを入れて作る。

沐浴は此河に於てし、温浴を爲すとは稀なり。十二歳に至れば訓練一層嚴重となり、下衣を着ることを許されず、飢渴を忍び寒暑に慣れ、如何なる困難にも堪ふる習慣は益々嚴重に養成せらる。若しそれ過あらんか、鞭直ちに之に臨む。此時泣くは卑怯とせらるゝを以て、中には血出づるも聲を出さずを愧ぢ、遂に死に就きしものありきといふ。此教育場に入りてより直ちに教へらるゝものは、士族の行儀心得、古英雄の傳、希臘の神話を始めとし、當時の武藝に及ぶ。武藝は始め十二歳までは其年に應じたる簡單なるものなりといへど、十二歳より飛躍、競争、角力、圓盤投、槍投の五藝を學ばざるべからず。時には之に舞踏、乘馬、游泳、狩の如きも加はる。武藝と共に音楽を教へらる。但し此音楽は愛國心を高め、勇壯の氣を鼓舞し、神の榮光を讚美する爲めに教へらるゝものにして、美的修養を興ふといふが如き考より教へらるゝにはあらず。學問としては、讀み書きの初歩及び簡單なる算術を教へらる讀み物としては、ホーマー、ヘシオドの詩、ライカルガ本の憲法、イソップ物語、イソップは紀元前六百年頃の人と傳へらるの類にして、多くは是等を誦讀しき。蓋しスバルタにありては、智力の修練はこれ以上に出づる必要なしと思惟せられき而して

スバルタの教育にありて最も奇とすべきは、竊盜を許し他人の物殊に其食を竊むを獎勵せしこと是なり。但し之は之を以て己の欲を充すを主とするにあらず、全く機敏熟練を獎勵し以て戰器に習はしめんとするにあるを以て、若し露顯する時は次に一府巧みにすべき爲めの誠めとして、嚴しく鞭たる。傳へいふ一少年、他の狐を奪ひて之を上衣の下に隠せり、狐は苦しさに堪へず、其口を以て少年の腹を咬み手を以て其腹を裂きたるも、少年は其の露顯するを以て恥辱と爲し、傷の爲め仆るゝに至るまで平然として堪へ忍びきと。斯くの如き教育に加ふるに、食事には老人長者も一緒に食卓に就くを以て、少年は是等の人の談話に依りて自ら士族の嗜みを知り、國の事務に通じ、又言語應對の實例を見て、何時とはなしに之を學ぶ。老人は又時としては、處世上軍事上の問題を出し、少年をして能く思慮したる簡潔にして力ある言葉を以て答へしむ。簡潔にして力ある言葉を使ふことはスバルタ人の最も重んぜし所なり。此間に長者を尊敬し、同輩に交はり、又幼者に對する作法心得を學びたるは言ふまでもなし。かくて此共同教育の結果として、体力練られ、自ら威嚴備はり、處世上の判斷に富み、私心に驅らるゝことなく、共同一致の精

神何時とはなしに養成せられ、而して再武にして何時にても己れの身を以て國家の急に赴く素養を爲す。かかる教育を受けて十八歳に至れば、*エフェボイ*と呼ばれ、兵籍に入り、共同教育場を轉じて兵營に入り、専門の戦術に習ひ、又野外演習に従ふ。かく練習すること十二年、即ち三十歳に至りて始めて十分の士族となり、家に歸りて結婚し、それらの國務に參與す。この時、*エフェボイ*の國務に參與する者は、*スバルタ*に於ては女子の教育も怠られざりき。これ、*ネオカルガス*の憲法に規定する所にして健全にして且つ強壯なる國民を作らんとする要求より出て來れるなり。こゝを以て、*スバルタ*の女兒は男兒の如く共同教育場に入れらるゝことなく、平生母の傍にありて、宗教を學び、神話を聞き、又家政の事を習ふとはいへど、亦体操場に出て、体力を練り、女兒の訓練者より女子たる者の心得を學び、女子も亦國家の運命を荷ふとの意識と情熱とを有しき。もとより女子の体操場は男子のとは區別せられき。かくて、*スバルタ*の婦人は其子の初陣に臨み、勝つて歸らずば楯に乗つて歸れとの壯辭を以て之を送り、平生其子や其夫の討死に逢ひて動せざる如き素養を爲しき。しかも優美といふことも怠られたるにあらず。アゼンヌ人も

*スバルタ*の婦人の能く發達し強壯にしてしかも優美なるには感服したり。

第五節 *スバルタ*教育の長短 以上の如き教育の結果として、*スバルタ*人が体力強健、忍耐力強く、愛國心に富み、一死國に盡したるは當然の結果といふべく、第一期の後半より第二期の前半に至るまでに、*スバルタ*が殊に威を希臘に振ひたるも怪むに足らず。唯それ、*スバルタ*の教育は戰士を作るにありて人を作るにあらず、*スバルタ*人の殘酷にして無慈悲なるは一の蔽の如くなりき。既に第二期の終りに、アゼンヌのアルストロルが書きしもの、中には、*スバルタ*人が激しき操練に身を捧げたる間は、すべての他の者に勝りたりしも、今は操練若しくは戰に於てすら劣れり、蓋し彼等が祖先は身に之を行ひ、其子孫は唯之を學びたるに過ぎざればなりと言へり。實に、*スバルタ*人は唯強がらんことを求めき、而して強くなれば、而して之が最後なりき。*スバルタ*の教育は人の体力、意力を練るとに重きを置き、其知を啓き、情を練ることは等閑に附せり。知を啓き、情を練る如きは却りて戰士を作る所以にあらずとせり。こゝに於て、戰士として見れば勝りたらんも、人として見れば、一方向きの人を作らざりき。彼等は人間といふものを解せず、人間の全體を練る

ことを教育の要義とは考へざりき。をもく深く性に觸れざる教育は之を初歩のものとするべく斯くの如き教育は外強きが如くにして實は内弱からざるを得ず。而して又之を社會的方面より見れば、スパルタの教育は一切國家主義にして、毫も個人主義を容れず、國家の力を以てすべての國民を同一の模範に鑄込み之を國家の用に供することをのみ計り、個人性の發達と個人の自由とを許さざりき。斯くて國民は己れの利害、己れの自由は一切棄て、而して一に國家の利害に殉せざるべからざる如く餘儀なくせられたり。即ちこゝに個人性は滅し、個人の自我は死せるものにして、斯くの如き人は公共的精神に依りて動きはしつゝも、其内には却りて堅實の生命を有せず、内に堅實の生命を有せざる國民より成る國家は、其國永久には強からず。個人の利害を國家の利害と一致し、個人の發達と國家の發達と相待つ時に、個人は其自由を實現し、國家は亦自ら強くなることを得。スパルタの教育が此個人性の要求を一切排斥したるは失敗なり。而して又スパルタは其國家の生命を一に戰に置き、戰士を作るを以て國家教育の唯一の目的とせしは是亦失敗なり。國家は戰に依りてのみ立ち得べきものにあらず、國家は政治、法律、道

徳、宗教及び軍事の基礎の上に立つのみならず、亦文學、美術、實業、經濟の基礎の上に立ち、これ等各方面に當る人を作らざるべからず。然るにスパルタの教育は唯一方向きの人を作り、教育の恵を受くる者を士族にのみ限れり。これスパルタは唯強くならんが爲めに教育せり、而して強くなれり、而してそれが最後なりきと評せらるゝ所以、又教育史上格別の影響を後世に與へざりし所以なり。唯これスパルタが平民と奴隸とは排斥したるも、士族は男女に拘はらず、老少を論ぜず、すべて之に國民的意識を有せしめんとしたりしは卓見といふべし。

第六節 ビタゴラス スバルタ教育の此缺點を幾何かは意識し、スパルタ教育の精神を自己の考に依りて精鍊し、人間の完全を望みて一種理想的の教育を施したる人をビタゴラスと爲す。ビタゴラスはスパルタ人にあらず、又其教育を爲し、所はスパルタに於てせしにあらずといへど、其精神は之をスパルタより取り、而して氏が影響はスパルタ其他希臘の各地方に及び、アピニスのアレト一の如きも氏が影響を受けたれば、氏を以てスパルタの教育精神を代表せし教育家と見るも不可なる所なし。

氏が生れし年は明ならざるも、紀元前五百四十年頃より五百年頃にかけて勢力ありき。希臘殖民地の一なるサモス島に生れぬ。アイオニヤン種族なり。早く埃及に遊び又スパルタに來り、ライカルガスの法律を研究して大に其精神に服し、自ら一の教育理想を立て又自己の理想に成れる新社會を組織し見んとその社會改革の考を有し、希臘領南方伊太利のクロトナに一の學校を開き、一の盟社を組織して其徒を教育せり。氏に一種の哲學あり、謂へらく萬物の本に一大中央火あり、此中央火より光明、溫氣、生命出て、數の比例に依りて、それが天地人生と現はれたり。故に此宇宙は全く調和に依りて成れるものにて、此宇宙は一大音樂を爲しつゝ、中央火を中心として廻轉しつゝあり。萬物既に調和を以て成る。人間社會亦調和を本として立たざるべからず。身軀と精神とは調和せざるべからず、父と子、治者と被治者、人と神とは亦調和せざるべからず。即ち教育の如き、身軀と精神、人と人、或は人と神との調和を計り、圓滿なる發達を遂げしむるを目的とすべくしかするには、一方に知見を開かしめ、他方に克己、節制、從順、敬虔の諸徳を養はしめざるべからずと。斯くて氏の學校にありては、學科としては、數學、物理學、地理學、哲學及び醫學を

教へて知見を開かしめ、又身軀をも練らしめ、生徒はすべて之を共同の寄宿舎に入れ、共同の費用を以て之を維持し、朝晝夜の三回に必ず神に祈禱を捧げて唯一の神を念ぜり。氏が言ふことは、絶對の權利を有し、學徒は一切之を疑ふべからずとせられ、訓練すべて嚴肅にして、校風肅然として起れり。而して此學校の者は、常に同學の關係に依りて結合するのみならず、互に氏の教を奉じ、身を以て社會を率ゐんと、この盟を立て、一種の盟社を結びしが、氏が設計するすべての事が、スパルタ風にして、此地方人の民主的の氣風と合はず、又此學派の清淨嚴肅の學風が、當時の俗風と衝突し、遂に此學校は此地方人の爲めに燒討ちにせられき。氏が此際遁れ出てたるか、或は火中に葬られたるか、明ならず。氏は平生調和を唱へて自らは衝突に終り、而して其學說の根本思想とせし火の爲めに燒討ちにせられたるは、奇縁といふべきか。此後氏の學徒は四方に散じてそれ／＼氏の教を説き、希臘一般の教育の上に少からぬ影響を與へ、幾多の名士、其影響の下に出てたり。

第七節 アゼンス教育の總說 希臘に於ては、スパルタの競争相手と爲りしものをアゼンスと爲す。アゼンスはアイオニヤン種族が、ヘラスの最も目欲しき地ア

ヅチカに建てたる都にして、是迄になき文明を開き、爲めにアゼンスは獨り希臘の花たりしのみならず、又歐洲文明の源となれり。アゼンスの文明は幾何かはエジプト、フオエニシヤなどに負ふ所あるも、もとより自發的のものにして、アゼンスありて始めて世界に文明を來せり。従つてアゼンスの教育は亦教育史上に重要な位置を占む。アゼンスの教育の精神及び材料は、希臘滅びて、第一に羅馬を感化し、第二に基督教と結びりて中世紀の歐洲人を感化し、第三に近世の始めに文藝復興となりて現はれ、爾來今日に至るまで絶えず歐米人を感化せり。希臘の教育と言へば、スパルタは差し置きて先づアゼンスを意味す。

第八節 アゼンスの立法者 アゼンスも始めの間はスパルタ同様君主專制國にして、紀元前六百二十年、ドラコが制定したる法律は大に人民の權利を抑へ、小罪も大罪と同様に死刑に所すといふが如き方なりしより、爲めにドラコノ法律は墨を以て書かれたるにあらず血を以て書かれたりとまで言はしめし程なりしが、希臘の最賢人と言はるソロン(紀元前六三八―五五八)其弊を認め、紀元前五百九十四年にアゼンスの憲法を改正して民主政治とし、以てアゼンスは隆盛の基を開けり。

ソロンは此憲法に於て大に人民の自由と權利とを伸ばす方針を取り、教育に於ては父母は其子を教育すべき義務ありと規定し、又教育に於ては體育のみを重んぜず、大に精神の教育にも注意すべきことを規定し、アゼンスの北西にアカデミー東にキノサルセスと名づくる二個の國立體操場を建てたり。アゼンスに於て父母が進んで其子の教育に注意し、又文學大に榮えて精神の修養の頗る高尚の點に達したるもの、此憲法に負ふ所多し。而してアゼンスにてはスパルタの如く教育の惠を單に士族のみに限らず、平民の學に就かんとする者を拒まざりしが如き、此民主的精神に依れり。實にアゼンスにては二萬の士族の用を足す爲めに四十萬人の平民を奴隸とありき。奴隸のみは全く教育の惠に與らざりき。ソロンはスパルタのライカルガエにして、其立法の精神は自ら其種族の性質を代表せり。

第九節 アゼンス教育の時期 アゼンスの教育の盛んなりしは、先に第三節に言ひたる如く、第二期より第三期に涉れる間なるが、スパルタと違ひ、此間に變動と發達とあり。そは右の第二期の後半、ペルシヤが大舉して希臘を攻めし時に當り、ペルシヤ戦争は紀元前四百九十年より四百七十九年に涉れり。アゼンスは陣頭を立

學せしむ。此時に及びては、最早乳母の手を離れ、教僕(Pedagogue)に伴はる。教僕には多く老たる信用ある奴隸を用ひたり。彼は奴隸にしてもとよぶ物を教ふる任は帯はずといへど、其兒の躰方につきては、十分の責任を負ひ、それに相當する權力をも附せられき。此時通學する學校はパレストラ(Palaestra)即ち兒童の躰操學校と、デクスカレネオン(Didaskaleion)即ち音樂學校となり。朝早く一定の場所に集まり軍隊的の歩調を以て列を爲して躰操學校に行く。學校に到着するや、先づ教師に禮し、此學校に祀れる武勇の神ヘルメスに禮し、然る後躰操を始む。躰操の目的は、體力を調和的に發達せしめ、意志の命令に服従せしむるにあり。藝はスパルタと均しく競走、高飛び、圓盤投、槍投及び角力の五つにして、前の二つは足の練習、次の二つは手と目との練習、而して最後の者は全身と氣象との練習也。時には之に舞踏、游泳を交へ、又躰操の間には遊戯を挟みて共同心を養はしむるを計れり。正午に至り、教僕が齎し來りし簡單なる食事を取り、終りて再び列を爲して音樂學校に行く。此處にても亦教師に禮せし後、此處に祀りある美の神ミューズと、智慧の神アポローとに讚美歌を捧げ、然る後課業に就く。課業は唱歌、箏の奏し方及び讀み

書きなり。第一に唱歌始まる。唱歌の中には神の榮光を讚美せるものもあり、強き關子の道德的感情を高むるもの、又優美なる美的感情を起すものもあり、唱歌終りて箏の奏し方に移る。終りて又字の教授來る。各兒童は石版と石筆とを持ち、石版には昨日習へる所の字書きあり。兒童は代る／＼教師の前に行き、之に句讀を附して貫ひ、然る後讀み方始まる。教師の第一の骨折は、先づ淀みなく之を讀ましむるにありて、淀みなく讀み得るに至れば、其文意に應じたる朗讀を爲さしむ。終りて之を解釋し、又文法を説き、之を語記せしむ。然る後石版に習字せしむ。習字の場合には教師の言ふ所を書き取らしむるを以て、同時に書取をも見らるべく、かくして習字せる者、翌日の讀書の材料となる。之にて課業を終り、他の兒童と共に、教僕の監督の下に遊戯、戯れ、且の將に暮れんとする頃、教僕に伴はれて家に歸る。其課目甚だ備はらざるが如くなるも、彼等が讀むものは、ホーマー、ヘシオッドの詩にして、之に依り希臘建國の精神に接し、美を味ふ力を得、文法を解し、道德的感情、宗教的感情を養ひ、又ソロンの法律を讀みて、法律思想、國民思想を養ひ、地理の觀念も亦讀書の間に養へり。而して士族として立つべき道德的習慣の如きは、此兩種の學

校に於ける共同生活、又時々の集會の間に自ら養成せられき。かくて十二歳に及ぶ。十二歳よりは一層進みたる教育を受く。五藝は前よりも複雑となり、練習の時間も長くなり、音楽及び讀み書きも一層高尚なる所に進む。此の時に及びては、算術も教へられ、又天文学の初歩をも教へらる。兒童の競争心を鼓舞するとは、此時に至りて最も烈しく、体操學校に於けるヘルメス、音樂學校に於けるミューズ及びアポロの祭の時には文武の競技あり、勝ちたるものは花束を以て頭を飾られ、殊更に其神々の恩寵を受くるものとせられき。かくて十六歳に及ぶ。此間の体操學校は後の國立体操場と違ひ私立なりしも、設備は相當に整ひしが、音樂學校はもとより私立にして、多くは小さく且つ不潔に中には建物を有せず、天幕を張りて教授し、甚しきは街頭青天の下、石に踞し、兒童を身邊に集めて教授し、雨降れば課業を休みたるものありきといふ。

十六歳にして一通りの學校生活を終り、一層其教育を全うし、士族としての準備を爲すため、ギムナジウム(Gymnasium)即ち國立体操場に通ふ。十六歳以前の教育は平民も受けたるものありしも、此國立体操場の教育を受くる者は全く士族に限れり。國立体操場は、シロシニつを建て、後ペリクルスの時に、ライジウムと名づくる者一箇を加へたり。之はすべて國家の費用を以て建設し、アッホバガスと呼ぶ高等法院にて之を總轄す。体操場の長はギムナジアルクと言ひ、毎年一回士族より互選せり。教師をギムナステスと言ひ、其外に風儀取締と衛生係とありき。体操場には、すべて庭園、廊廓、大廣間ありて諸神諸勇士の像を以て美しく裝飾し、殊に後には出來たるライジウムには、鬱蒼たる並木のある庭園を有したり。此所には、單に体操を練習するのみならず、同時に社交の中心と爲し、一人前の士族となりし後といへど、絶えず此所に出入して、体操を練り、社交を爲せり。十六歳にして此所に入るや、最早教僕に伴はれず、行動全く自由なり。しかも一日の大部分は此所に費し、体操を練り、同年輩のもの若しくは老人と樂しき散歩を爲す。此時智力の修練なきは奇なるが如くなるも、此所に集會する人をより、實地的の教育を受くるを以て之を充せり。實地的の教育に依りて、政治學も心得、國の行政事務にも通じ、士族たる覺悟をも養へり。かくて十八歳に及ぶ。十八歳にして、彼等の父は、彼は正しき家柄の

子なることを宣言し、兵籍に編入せられ士族の纏ふ上衣を着、アルゴンと呼ぶ國の元老に導かれて、此町の大部分を見下すアグラウロスの神殿に至り、神の前にて、國家より賜はる槍と楯とを與へられ、シロンが定めたりと傳へらるゝ次の盟を爲す。「我は此神聖なる武器を辱しめざるべし、猶又我階級の者を辱しめざるべし、我は一人にても、多人數にても神の爲めに戦ふべし、我は我祖國を祖先より譲り渡されたる時よりも一層大なる一層善きものとして後に傳ふべし、我は施政者に従順なるべし、一切の法律を守り若し之を破るが如きものあらば、一人にても多人數にても之を拒くべし、我は又我祖國の宗教を守るべし、神々照覽あれと。之にて士族の資格は得しといへど、猶二年間は町外れの野營に入りて野外演習に従事し、戦に慣れ、地理に熟し、又地方の巡察官として法律の施行、行政の事務を取り、二十歳にして全くの士族となり、町に住み、すべての士族たる義務を盡す。十六歳より十八歳までの彼等の學校は國家なり、課程は國家の事務なりき。此の學校は、士族の女子の教育は、スバルタと違ひ注意せられざりき。これ女子の學問するは、其淑徳と優美とを損ふ如く思惟せられたればなり。」

要するにアゼンス初めの間の教育は、身体は躰操學校にて之を練り、精神は音樂學校若しくは社交の上にて之を練り、かくて心身のいとも美はしく調和的に發達し而して十分に愛國心に富める人、言ひ換ふれば善美兼ね備へたる強き士族を作らんとし、アゼンス風の特色を有しつゝ、又スバルタと同じき所ありき。アゼンス風といふは、美的の人を作らんとしたる謂ひ、スバルタと同じき所ありといふは、餘程個人の自由を重んじ、個人主義を許せるに拘はらず、國家の爲めに何時にても一命を抛つが如き人を作らんとしたるをいふ。ペルシヤ戦争に於て、アゼンスが陣頭に立ち見事なる勝利を得たるものかゝる教育の結果なり。しかも此ペルシヤ戦争に勝ちてペリクルス時代となるや、全然アゼンスの特色を現はしてスバルタ風を脱し、是までアゼンス人の意識の底に流れたりし個人主義は、漸々其頭を擡げ來り、民心變動し、教育従つて變ぜり。之よりアゼンス後の時期の教育に入る。

第十一節 アゼンス後の時期の教育 アゼンスがペルシヤ戦争に光榮ある勝利を得しより、ペリクルス時代は來り、アゼンスの富は増し、文學は發達し、劇曲家としては、エスキラス、ソフォクレース、エウリッパイドスなど、相次ぎて出て、花やかなる交際社

會は開かるゝに至れり。此時に當り、時人の最も名譽とする所は、公共生活の舞臺に立つにありて、之れが爲め、政治、法律、軍事、外交、文學、美術、科學、哲學、宗教、道德の知識を要し、又政治上の舞臺に立つに要する辯舌をも練らざるべからず。此必要に應じて起りたるもの即ち詭辯學派なり。詭辯學派は、時の人に、是等諸種の知識を授け、立身出世の道を教へたり、傳ふる所に依れば、此派の首領プロクローヌ(凡を四八〇―四一一)は、徳行の教師として知られ、ゴルギヤス(四四〇年頃の人)は、修辭學及び政治學の教師として知られ、猶他に文法、戰術、天文學、數學などを教ふるものありたり。但し、彼等が起りしは、右の時世の必要に促されたる所あるも、亦一面は當時の民心の傾向を代表せるなり。當時に至りては、前の期の如く、唯國家の爲に一命を抛ち、譯もなく國家の法律命令に服従するとを爲さず、多少之につきて其理由を問はんとするに至り、又一つには多少の餘裕生じて各種の事を知らんとする知識欲起り來りたるより、彼は此批評心、哲學心を代表し、此動搖せる時世の見と對して生れ出で、國家、社會、道德、宗教に對する疑問を解釋する任に當れり。彼等は國立体操場の一部を借りて其講義を開くあり、或は町の辻に講筵を設くるあり、恰も能く時流

に投ぜし事として、彼等の周りには幾多の青年群集せり。斯くて彼等はアゼンスに於ける専門教育に力を盡せり。彼等が教育の上に變動を與へたるは、専門教育の方面にして、普通教育には殆んど手を着けざりき。普通教育はペリクルス時代となりても格別の變りなかりしも、アゼンスの文學學問進みたることとして、圖畫、幾何學、地理學及び文法が各々一科として音樂學校に教へらるゝに至れり。専門教育に至りては大に面目を變じ、前の期までは専門教育とは、國立体操場に出で、武藝を練り、又實際の交際に於て國家社會に關する知識を得たるに過ぎざりしが、今は一方に國立体操場に入しつゝ、詭辯學派に就きて各種の知識を授かるに至り、詭辯學派の施す専門の學術教授と、國立体操場の教育とは相對立するに至れり。詭辯學派がアゼンスの教育に變動を與へたるは、之に止まらず、彼等は教育を一種の職業としたり。彼等はアゼンスを中心とし、希臘全國に涉り歩き、月謝を取りつゝ、各種の知識を教授したり。これアゼンス人に取りては思ひ設けざりし所なり。アゼンス人の特質として、教育は修養の爲めに受くべきもの、之を施す者も、亦修養を與ふといふ積りよりすべしと思惟したり。此故にアゼンス人は、修養の爲

めに教育を受くる者と、糊口の爲めに教育を受くる者とを嚴重に區別し、前者は士族の教育を受くべき精神にして、後者は平民の學ぶ精神なりとし、所謂學問の自由を唱へて文雅教育の眞義を發揮せり。學問既に士族に取りて糊口の資にあらず、又實利の爲めにあらざるを以て、アゼンス人は体操にても音樂にても、其達人藝人たらんが爲めに學ぶにあらず、依りて以て品性の修養に資すれば足れりとし、學問を實利に關係せしむることを非常に攻撃し、教師は生徒に對し、報酬を要求することなかりき。然るに詭辯學派は今此傾向に反對したるを以て、彼等は一方には重寶がられつゝも他方には攻撃せられき。殊に彼等が當時に與へたる影響の主なるものは、當時アゼンス人の心に覺め來つゝありし個人主義を惡しく導きたることなり。プロクゴラスは先づ吾人が外物を知るといふも、それは唯外物が吾人の知覺に觸れたる時の状態に外ならず、吾人の感官の状態若し變ずれば、知覺は從つて變ぜざるべからず、故に吾人の知識と稱するものは、唯外物が吾人の感官に影響する時の關係の上に存し、万古不易の眞理といふが如きものなしとて、茲に人は万物の標準なりとの説を唱へたり。しかも氏は之を自然界の範圍に限りしが、ゴルギ

ヤスに至りては何事も分らずと唱へ、更に其末流に至りては、之を人事界に持ち來りて、人事界にも定法なしと唱へ、或は天則と人則との區別を立て、天則は變ぜざるも、人則例へば法律道德の如きは、人の隨意に定めたるものなるがゆゑ、之を變ふるも妨げず、是等は強者の定むる所、強者は何を爲すも妨げず、個々人は須らく其時々々の欲望を充すことを計るべしと主張し、惡しき個人主義を唱へたり。しかも其説き方人の虛榮心に訴へ、奇抜の所あるより、血氣にはやる青年は、詭辯學派の所に群がり、却りて體操の修業を怠り、爲めに身軀を弱くするに至れり。果して四百三十一年より廿七年間續けるペロポネサスの戰、之はスパルタ始め其他希臘の諸國が、アゼンスの全盛を嫉み、同盟してアゼンスを攻めたる戰に於ては、アゼンスは遂に敗北し、其日の出の勢を殺がれたり。之には詭辯學派其責の幾分を免るゝと能はず。蓋し詭辯學派とは、もと知者の義にして、始めの程は何も破壊を事とし、詭辯を弄せしにあらずといへど、次第に知識道德の事に對して破壊的の見解を取り、之を詭辯に上せて説明し、後には眞の詭辯學派を意味するに至れり。斯て彼等はアゼンス當時の時世の子として生れ出で、却つて大にアゼンスの腐敗を助けた

り。こゝに於て此説の誤れるを正し、此類廢を支ふる者なかるべからず。ソクラテス、プレトーは茲に起てり。但し斯く言へば詭辯學派は正に希臘教育史上の罪人の如くなるも、彼等が世に與へたる効績も亦没すべからず。彼等は希臘人殊にアゼンヌ人の心を人間社會の研究に向けたり、彼等は政治、法律、宗教、道德、文學、語學、軍事、經濟の知識を一般に廣げ、且つ之を一科の學問とする道を開けり。文法、修辭學の如きは、最も彼等の力に依りて發達せり。彼等は當時の專門教育を振ひ起せり。彼等は又教育を一種専門の職業とする道を開けり。ソクラテス、プレトーの起れる又、彼等の刺激與りて力あり。

此は人々の教育するべきべきを論ずるの問答を以て自ら思案の對するべきを論ずる
 第十節 希臘の教育 其三

第十二節 ソクラテスと詭辯學派は前言へる如く知識の方面より見れば懷疑説に陥り、道德の方面より見れば個人主義、利慾主義に流れたるが如く、然るにソクラテスはアゼンヌ人の足を浮き立たしめたり。此時に當り、人の知識は普遍なる定義に達し得べきもの、道德も亦一を以て貫く所あるを唱へて、大夏將に仆れんとするを支へたる者をソクラテスと爲す。ソクラテスは紀元前四百六十九年、アゼンヌに生れぬ。士族の階級の家には生れたりしも、家貧にして、父は彫刻に従ひ、母は産婆を業とせり。父母は氏に一通りの教育を受けしめたりと傳ふれど、氏か早く父の業を継ぐ爲めに彫刻を學びしを見ても、其十分ならざりしは明なり。然るにアゼンヌの富豪クリト、氏は此苦境より救ひて學問せしめしかば、氏は當時の專門教育を受くることを得、詭辯學派の者につぎても知識を研けり。先賢の書を読みしが中に、ホーラーの詩は殊に氏が愛讀せし所なりきといふ。氏が前半の生活につぎては、詳に傳はらず。其教育に立

ち降るに立りしは、四十歳の頃、アルハインの神殿の宣託を受けたる時にあり。曰く「ソクラテスは人の中の最も賢き者なり」と。氏は此宣託を受けて不思議に感じ、若し己れ人の中にて最も賢き者ならば、今アゼンネの町にて賢人と言はるゝ人に劣ることあるべからずと思ひ、名高き人々の許に行きて問答を試むるに、能く氏の相手となり得るものなく、平生物識を以て任ぜるもの、實は何物をも知らぬ似而非者なることを發見せり。氏屢々繰り返して言へり、余は余が何物をも知らぬといふことを知る外には何物をも知らず、さりながら多くの人は此事すらも知ぬる者少しと。氏はかくて世人が案外無知なることを發見し、さらば己れ之を教育し遣らんと、之より三十年一日の如く、教育を以て己が任と爲し、朝より夕に至るまで、國立体操場や市場にさまよひて、見る人毎に論談を試みて之を教育し、就中青年を愛し自ら青年の戀人と稱せり。氏が容貌は醜く、して奇僻に富み常に跣足にして弊衣を纏ひ、汗へ渡る強き調子の言葉もて人々と問答を試み、其天才の嘲弄に掛る時は何人も之に敵し得るものなかりき。

氏が人を教育するや、先づ始むるに問答法を以てし、自ら愚者の位置に立ち、次第々々に問答して之を追窮する結果、遂に向うの人を無知と悟らしめ、さて無知と悟らば、それより共に真正の知識に達せんとて之を導けり。故に氏の問答法には二重の方面あり。其一面は氏が其天才の嘲弄的辯舌を以て向うの人を辯難攻撃し、遂に今まで知れりと思ひしことも、實は知らざりしとなりと自白せしむ。此點より言へば氏の教授法は破壊的消極的にして之を名づけて、ソクラテスの反問法といふ。然れども氏はかく破壊し了るものにあらず、更に一步を進めて他方面に向ひ、是まで知れりと思ひしことも、實は知らざりしことなれば、是より共に真正の知識に達せんとて、種々の事例を引き來りて、次第に其心を引き出し導き立て、自ら其事に關する一の纏りたる概念、言ひ換ふれば定義に達せしむ。之を名づけて産婆術(Maieutics)といふ。此點より言へば氏の方法は構成的積極的なり。蓋し氏の意に謂へらく、余は知識を與ふるにあらず、知識を産ましむる産婆なり、産むべき力はもとより向うの人に備はる、教師は唯之を産ましむる助を爲すに過ぎずと。これに實に教授の秘訣を捉へたるものにて、氏を開發主義の祖先とするも此故なり。而して氏が斯く知識を産ましむるには、種々の事例より歸納して、其纏まりたる知

諷即ち定義は達せしめしを以て氏は教授上歸納的論理法を執りたる者の先驅と見做さる。氏の論理法は、（註）「（註）」
 氏が弊衣徒跣三十年二日の如く右の問答法を以てアセシス人を教育したるは、（註）は其抱く一種の道德意見より出て、（註）は其力もてアセシスの腐敗を救ひ、アセシスを新なる基礎の上は建設せんとの愛國の精神より出てたり。茲は先づ其道德意見を率ぬべし。（註）
 氏の道德意見は當時の詭辯學派に對する立場より見來らざるべからず。既に言へる如く詭辯學派は知識に對しては懷疑的となり社會道德の事に對しては破壞的となれり。ソクラテスは此思潮に反抗し吾人の知識は歸納的に研究し行けば客觀的の確實性を有せる真理を捉ふることを得るものにして社會道德の事亦敢て強者が據に定めしものにあらず其間には一貫せる所の條理あり即ち道德は（註）を以て其場所ありとの立場より、一面詭辯學派の新知見を以て世に立たんとする精神を汲みながら、之とは頗る異なる立場を取れり。但し氏は非常に道德的意識の強かりし人ゆゑ自然界を説く知識の方面には力を費さず主として道德的

知識を明確にすることに力を注げり。此事は氏が弟子ゼノファンがソクラテスは多くの哲學者の如く世界の成り立ち及び其成り立ちの法則の如きことは思考せず却つて其如き思考を爲す人が人事につきて如何程無知なるかを示さんと賦みたりと言へるにも徴すべし。氏は自らの知識の能く明ならぬを意識し常に研究的態度を取り、アポロの神殿に掲げられし格言汝自らを知れを學問研究の第一歩とせり。人も我も能く考ふれば知識言ひ換ふれば明白なる意識なくして事を處する故事々物々失敗と誤謬とに終る。其適々成立することあるは僥倖のみ。故に吾人は須らく明白なる知識を有し世の俗説の如何に拘はらず自身の悟れる所に依りて行爲せざるべからず。自身に悟れる所の知識に依り身を處するに至り始めて眞の徳行を爲すことを得べし。勇の勇たる所義の義たる所を明知せずば如何て勇を奮ひ義を行ふことを得んや。この故に徳行の本は先づ知見を開くにあり。徳の何たるかを明知するにあり。知見判斷なき行爲は盲目の行爲にして畢竟善惡の行は知見の明なると明ならぬとに本づく。人の惡を爲すは誤りたる判斷よりするが故にして人誰か知りつゝ自ら惡を爲す者あらんや其知りつゝ

悪を爲すといふもの、實は猶其知見の明ならぬ所あるに依る、眞に徳を知らば直ちに徳を行はざるを得ず、この故に氏は徳は知なりといへり。従つて知見は唯に徳を修むるに必要なるのみならず、知見あらば誰しも徳を行はざるものなく、知見明ならば徳行自ら治まる。此故に徳は教ふべく又學び得べきものなり、言ひ換ふれば人を導きて徳に進ましむることを得べし、教育之に於てか必要あり、教育の効力は無知にして悪を爲さんとするものを轉じて明知にして徳ある者と爲す點に存ず。然らば其如き徳を修むるは何の爲めなりや、至善に達せんが爲めなり、至善は吾人に取りて最上の善きもの之に達するが即ち人生の目的なり。而して徳とは此至善に達するの謂なり。人は其知見を明にして諸の徳を修め、以て此至善の域に至らざるべからず。教育の目的も亦此域に人を導くにあり。氏は此至善に達する爲めに修むべき諸の徳を如何やうに組織して説きたりしか、或は其組織なかりしかは明ならざるも、至善に達する爲めの徳として、克己節制、忍耐、友愛、正直、正義等の諸徳は、非常なる熱心を以て之を人に推奨したり。而して其至善の内容につきて、氏は如何に考へ居りしか、明に傳はり居らずと言へど、門弟の記する所を參

照すれば、氏は少しも外物に役せられず、又情欲に驅られず、克己節制の徳に依りて、心の極めて和平なる、恰も光風霽月の如き神々しき境地を意味したるが如く、又之を幸福或は實利と同一視せしが如し。自己に利なるものと不利なるものとを識別して常に利なるものを取るは、之亦慎慮といふ一の徳にして、一時の情欲に動かされず、常に己れに善きものを取らば至善に達することを得べく、従つて至善は幸福或は實利を兼ね、徳の修まれると其人の幸福なるとは、決して離れたるものにあらず、徳修まりて不幸なる者あることなく、至善の境に行けば、利自ら之に伴ふと考へしが如し。かゝる境に至れる人、即ち眞の人にして、氏は實に自ら斯くの如き人なりしなり。斯くの如き人にして、他の人をも亦此所に導かんとしたるもの、氏が教育に熱心せし動機の一なり。

次に氏が教育に熱心せし他の動機は、右言へる如き知見ある人を作りて以て、アゼンスを今一度新なる基礎の上に建設せんとの底意より出でたり。氏は此希望を言ひ現はして曰く、知者とは明白なる判断か、完全なる記憶力を有し、有用の知識を有する人の謂にして、人若し其知れる所を能く體認し、人間につきての諸の知識を活

用するに至らば斯くの如き人は、嘗に其身に幸福を享けて能く一家を治むることを得るのみならず、又他人をして幸福ならしめ、随ひて一國を隆盛ならしむと。氏は實に斯くの如き人を作りて以てアゼンスを再興せんと志したるなり。かくて氏は一の學校は持たざりしも、到る所逢ふ人々を教育して、アゼンスを救はんとせしが、歲月を重ねるに従ひ、氏の人物を慕ひ、其教を信ずるもの多くなり、自ら一の學風を作るに至れり。これもとより氏が好みてかゝる學風を起し、にはあらず、徳の自ら人を化せしなり。然るに紀元前三百九十九年、氏年七十歳、心身壯健、人を救へて倦まざる時に當り、かねて氏と快よからざる保守主義の首領アリストフ、アネースの一派の年少詩人メリトス、訴狀を具して氏を訴へたり。曰く、ソクラテスは第一に國教を信せず、第二に新なる神を唱へ出せり、第三に青年を腐敗せしむ、宜しく國法に照すべしと。

此三個條の告訴は唯氏を罪に落す口實となりたるのみにて、其原因は氏がアリストフ、アネース、メリトス一派の保守主義に抗し、其一派のものよりは、寧ろ詭辯學派一流の者と誤解せられたるに出で、又氏が當時アゼンスの政治が專横に流れ、其選舉法は公平ならず、聞々悪しき士族が國政に與るを以て、氏は貴族主義を取りたるにはあらずとも、常に其政治を批難したると、又一つには例の反問法を以て、遠慮なく人を苦めたる眞意が能く人に分らて、氏を慕ふ者の外は、却つて嫌惡の念を抱きたる等の諸の事情より出でしが如し。現にメリトスを助けて氏を訴へたるアネースなる人は、平生詭辯學派を仇敵の如く思ひ居りたる者にて、其詭辯學派を惡むの餘波、ソクラテスをも亦其一流と解して、訴訟を成立せしむることに盡力せり。ソクラテスの死は一は詭辯學派の罪を自身に負ひしものなり。

但し此口實となりたる三個條が、當時の人に承認せらるゝに至りたる故なきにもあらず。ソクラテスは第一に希臘の人が多くの神々を唯外形に聘せ、一に己が利益心に驅られて崇拜するとは、反し、一の全知全能なる神が此世を支配し、其神は亦自身の心の奥に宿りて、萬事を指揮し給ふと信ぜり。氏は屢々希臘の神々を崇拜することの至當なるを説き、其死する際にも、猶エスキュラピウスの神に其御願を果すべき遺言を爲し、程なれど、當時の人より見ては、形の上に於て、國教を信ぜざる如く見えたる點もありしなるべし。而して其新なる神を唱へ出したるといふは、

氏が常にデイモンが心の奥深く宿りて、萬事を指揮し給ふと唱へたるを指し、も
 のにして、是亦當時の人には奇妙に聞えしならん。而して又氏が當時の青年を教
 育せし方法は、一度其信ずる所を破壊して、更に新らしき道理發見の途に上らしむ
 るにあるを以て、其徒の中には、疎放に流れ、破壊的傾向を帯びたる者も無かりしに
 あらず。其教へ方、如何にも青年を亂暴に導く如く取られたるも、全く跡方なきに
 あらず。氏は敢て希臘の神々を崇拜せざりしにあらず、又敢て青年を腐敗せしめ
 しにあらざるも、偉人の心事は、俗流之を解すること能はず、滔々俗流を以て満ち居
 るアゼンスの政府は、遂に氏を審問に附せり。……
 氏は法廷に出て、己が所信を述べ、告訴の無法なることを示して、毫も憐を請ふの
 意なく、友人の切に心配して辯護せんといふ者ありしも、真理は最後の勝利者にし
 て、一時の辯護は畢竟天意を無みするに過ぎず、萬事一切天意に任すべきのみとて
 己を屈せず、爲めに始めは氏を左したる罪に落さんとの心なかりし裁判官も、投票
 の際同情を寄せず、其結果遂に氏を死刑に宣告するに至れり。氏が死刑に宣告せ
 られたる日、會々殖民地より貢の船入り來りて、テオリヤの國祭始まり、其當座は死

刑を執行せざる習はしなりしかば、氏は此間を親戚故舊と共に談笑の間に過し、舉
 動毫も平日と異ならざりき。死刑の日、クリトトト早く入り來り、逃獄を勸む。氏之
 を退ぞけて曰く、余が罪狀假令冤なるも、國法を蔑如することあるべからず、國民と
 しては何處までも國法に従はざるべからずとて、こゝに義務論を爲せり、其夕愈々
 毒を飲むべき時に當りても、顔色變せず、フィードトト始め、其他の門弟に對し、精神不滅
 論を爲し、門弟の流涕哭泣する間に、クリトトトに向ひ、會てメスキラピウスの神に病
 氣の平愈を祈り、病愈えなば、鶏を捧ぐべき御願を掛け、之を果さざりしゆえ、之を捧
 げ呉れよと遺言し、從容毒を仰ぎて死せり。

ソクラテスの弟子として聞えたる人少からず。第一はユークリッドにして、メガラ
 學派を立てたる人、第二はアンチヌセネオスにして、犬儒學派を開きたる人、第三は
 アリスチッポスにして、キレトネ學派を立てたる人、是等は何れもソクラテスの説き
 し一面を捉へて一派を開きたる者なり。此外ゼノフォンあり、ソクラテスに親炙し、
 其死後其の冤罪を解く爲めに、メモラピリヤを著はせり。ゼノフォンは最も能くソ
 クラテスの行狀を傳へたりと唱へらる。ソクラテスの全體を捉へて一大哲學系

統を立て、一生涯を教育に委ねたるものをプラトーンと爲す。蓋しプラトーンはソクラテスより出て、而してソクラテスを補ひたり。ソクラテスは先きにも言ひし如く、詭辯學派に對し、道德の普遍なるものなることを唱ふるに急にして、自然に關する知識の普遍なることを證明する暇なかりき。プラトーンは即ち自然に關する知識の普遍なることをも唱へ、天地人生に關する一切の事を一大系統に細めて説明せり。ソクラテスは人生を見て、天地を見ず、プラトーンは其兩面を見たり。ソクラテスは系統的に説かず、プラトーンは之を系統的に説き、理想論の祖となり、詭辯學派に反抗して、すべて十分に之に答へんとしたり。ソクラテスが主として倫理問題に注ぎたる思想をプラトーンは繼承して、天地人生のすべてを解釋せんと試みたり。但しプラトーンにはソクラテスの影響の外、從來希臘諸學者の諸の思想の影響もありて、見事なる希臘思想の花を開きたるが、しかも其最も強き影響を與へたるものはソクラテスなり。

希臘 其四

第十三節 プラトーン プラトーンは紀元前四百二十九年アゼンスに生れぬ。此年はペリクルスが死せし年にして、ペロポネサスの戰の第二年に當れり。本名はアリстокレーズといひ、プラトーンは其綽名なり。氏が額の廣かりしより、体操教師、廣濶を意味するプラトスといふ言葉を取り來りて、氏をプラトーンと呼びしより、此名却つて本名の如くなれり。家はソロンの血統を引き、且つ富有にてもありしかば、父母は出來得る限りの完全なる教育を與へたり。氏は体操も學び、音樂も學び、詩歌、修辭學、數學、幾何學の如き皆通ぜざる所なし。早くヘラクライトスの萬物皆流轉すとの哲學思想に就て研究を向け、又當時詭辯學派が唱へし疑懷説に襲はれたり。二十歳にしてソクラテスの門に入るに至り、大に哲學に興味を感じ、遂に一身を之に委ぬるに至れり。氏が一族は皆當時勢力ある位置に立ちしかば、政治上の位置を占むることは容易なりしも、其方には振り向かて、哲學と教育との爲めに一身を捧げたり。ソクラテスに従ふこと十年、其刑に就きしより、ソクラテス

の門弟其師の狂死を憤り、不穩の舉動を爲すとの風説ありしより、その嫌疑を避け、メガラに遊びて同門のユークリッドを訪ひ、キレローネに遊び、又さきにピタゴラスが學校を開きたりし南方伊太利即ちマダナ、グレシヤに遊びてピタゴラス學徒の猶殘れるものを訪ひ、更にエジプト、シ、リ、リなどにも遊び、四十歳前後にしてアゼンヌに歸れり。アゼンヌ好學の青年、氏の名を聞きて教を乞ふ者群集したりければ、氏は父より譲られたるアゼンヌ町端れの別荘の、國立体操場アカデミーに隣れるを幸ひ、此アカデミーに講筵を開き、此所に其徒に教授すること、書を著はすこと、を務とし、其書三十五冊ありて今に残れり。氏が此學校にて教授せしものは、其ダイヤレクチック即ち知識論及び形而上學を始めとし、自然科學、心理學、國家學、倫理學等にして、其門に題して幾何學を學びたる者にあらざれば門に入ることを許さずと言へり。こゝにて氏は一切政治上の係累を避け、唯二度ほどシ、リ、リの施政を助けんが爲め旅行したる外は、外に出でず、靜に青年を教育するを以て樂とせり。其從學者の中には男裝したる婦人も交りきと傳ふ。かくて紀元前三百四十八年、八十一の高齡を以て或宴會の席にて眠れるが如くに逝きぬ。遺骸はアカデミー

より程遠からぬケラミクスの墓地に葬られぬ。氏容貌重々しく、額は廣くして皺多く、肩は聳え、微笑はすれど大笑したることなく、ブレトの如く苦しとは當時の諺の如くなりき。氏はソクラテスと同じく時人に誤解せられしも、其崇拜者よりは、神の如き人と言はれたり。曾て一人の氏に氏の事を悪しざまに言ふ者ありと告げたる者ありし時は、氏は言ひき、關することなかれ、余は當に世人が其如きことを信用することなからん如き高尚の行を爲すべきのみと以て其君子の人たりし一斑を覗ふべし。

氏はソクラテスの如く街道或は公衆會合の場所にて哲學を説くことをせず、全く哲學志望者のみを集め、公衆よりは引き離れて、其篤志者にのみ講説する態度を取れり。蓋し哲學が系統的となるに従ひて、其通俗の性質を脱して専門的となり、之が爲めには豫備の知識を要するに至り、全く學校の仕事となれり。其門に題して幾何學を學びたる者にあらざれば教を施さずと言ひし如き、以て其専門的となれるを見るべし。而して世の改善指導に對しても、氏はソクラテスと違ひ、ソクラテスの如く世の逆捲く波の中に投じて之を返さんとはせず、寧ろ一時世よりは引き

離れて青年を教育し、其青年を通じてアゼンヌを改善せんと企てたり。氏が如何なる意見を抱きて其徒を教へしかを茲に尋ぬべし。

前にも言ひし如く、氏は知識に對してはそれが普遍なること、道德に對しては道德の一に貫ける所あるを説き、以て眞向に詭辯學派に抗せしものなるが、氏の教育意見も亦此知識道德に關する意見を離れては解すべからず。氏は此現象界の變化雜多なる中に、變らぬ所一なる所あるを見出すを眞の知識とし、之を理念(Idee)之を觀念と譯しては氏の意に當らずと名づけたり。此理念は物の變らぬ所一なる所のものにして、變化雜多を一に括れる所の總體の念なり、普遍の概念なり、理想的の概念なり、模範となる念なり、氏は此念は、かく物の物たる所として説くと共に、之は客觀的に存在せるものなりとて、此變化雜多なる現象の世界を離れて、別に常住にして變化なく、圓滿俱足なる理念の世界あり、此理念の世界が眞實にあるものにして、此現象界は唯此眞實なる理念の世界の影に過ぎず、此現象界のものは、此理念を雛型と仰ぎ、其理念の光を得て存在するものに過ぎず、人の精神の如きも、其理念の世界の雛型たる精神を分け前へして出て來りたるものにて、曾て一度は理念の世界

に住したりしを以て、肉體を得て此現象界に來りても、猶昔の光り輝ける理念を追懐して其光を追はんとす、此理念界の故郷を追懐する心が即ち知慧を愛し、道を愛する哲學心なりといふが如く説き、知識の普遍なるを説くに止まらず、其知識の大原は客觀界に存在せることを説けり。而して此理念の世界は現象界にありとあらゆる物の雛型を以て組み立てられ居るが、之を總括りせる最高の理念は即ち至善の理念なり。至善の理念が此理念の世界を統一せり。氏は此至善の理念を神とも名づけたり。(ソクラテスの意見が如何に茲に組立てられたるかを見よ)。人若し感覺の欺く所とならず、全然肉體の支配を脱し、理性の光に照らさるゝ時は、目のあたり此理念の世界に入りて至善の理念に接するを得べく、かくの如き人は即ち哲人にして、人の最も高尚なる道德的境涯に入れるものなり。かゝる考よりして氏は詭辯學派やキレーネ學派の如き快樂説を取るものに反對し、罪惡の本として威性を排斥し、これを消し、知見を閉き、理性に導かれざるべからずとす。(これ亦ソクラテスの思想を承けたる所なり)。氏は人の精神作用を、理性、情、及び欲より成ると見るを以て、之より其道德意見を立て、理性の徳は明智、情の徳は勇氣、欲の徳は

節制とし、是等の諸徳を統一し、各々其宜しきを得しむる徳を正義とし、此四徳を備へたるもの即ち至善に達すべし。一個人斯くして完全なりとすれば、個人の集合体なる國家も亦斯くして完全ならざるべからず、否一個人は一個人にてはなかなか完全となり得ず、國家の一分子として始めて完全になり得べし、國家なくんば道徳も十分に施さるべからず、故に國家の目的は道徳を全うするにありて、其道徳を全うするには、國家に明智、勇氣、節制の徳を行ふ階級なかるべからず。明智の徳を行ふ階級は施政者なり、勇氣の徳を行ふ階級は軍人なり、節制の徳を行ふ階級は實業者なり、かく三階級の者が各々其職務に盡し、其徳を守りて國家に盡すに至り、國家は茲に正義の徳を實現することとなり、始めて國家存立の目的を達し、同時に其屬する國民の目的をも達せしむることとなる。

是丈を豫備として氏の教育意見に入るべし。氏の教育意見を書きしものに、「共和國」と「法律論」とあり。「共和國」は早き作にして、「法律論」は晩年の作なれば、前者は想像最も旺に後者は頗る實際に近くなれり。而して十分に氏の意見を見るべきは前者なり。此書後にしてはルーソウの「エミール」と共に、教育意見中の最も光彩ある

ものと稱せらる。此書は氏が理想通りの國家を描きしものにて、此理想通りの國家を作るには、其國民の教育に待たざるべからざるを以て、此國家論は同時に教育論を含めり。問ふ氏は如何なる國家をか作らんとせる。

氏は國家を個人の大きくなれる一個の生物と見たり。従つて個人に理性、情及び欲ある如く、國家も亦三つの働を爲す者より組織せられざるべからず。知見ありて國家を導くべきものは施政者の階級なり、力ありて國家を守るべきものは軍人の階級なり、而して第一第二の階級の者が生活し行く如き材料、即ち國家經濟の基礎を立て、國家の欲を充す者は實業者の階級なり。此三階級のもの、各其職掌を盡すに依りて、國家は始めて正義を伸ばす機關となり、又之を組織する各個人をして有徳なる生活を爲さしむることを得。故に又是等三階級の者は、それ々其職掌を果すだけの道徳を守らざるべからず。第一の階級の者は節制、勇氣の徳に加ふるに明智の徳を守るべく、第二の階級のものには節制に加ふるに勇氣の徳を守るべく、第三の階級の者は節制の徳を守るべし。かくして第一の階級の者は、明智、勇氣、節制の徳を備へて自ら正義の徳を有し、かゝる人國命を執りて、國家始めて其目的

を遂することを得。即ち氏の共和國を治むる者は、普通の政事家にあらずして、是等の四徳を備へ、目のあたり至善の理念を觀ずる哲人ならざるべからず。此國家は財産は共有なり、結婚も各自の自由になすべからず、必ず國家が其配偶を選ばせざるべからず。而して男女同等の職務に服し、施政者の妻は施政の事に明にして夫を助けざるべからず、軍人の妻は軍事に明にして自らも戦に出でざるべからず、實業者の妻も亦其夫と協力せざるべからず。而して教育も亦國家が國家の費用を以て、國家の教育場に於て、國家の乳母、國家の教育者の手にて營まざるべからず。フレートーは教育に依りて此理想の國家成り、一個人は亦其野蠻の性を脱して至善なる神を觀ずることを得るに至るを以て、教育を以て、最も神聖なる事業とし、教育より神聖なるもの亦世にあることなしと言へり。此國家に於て子供生るゝや、直ちに國家より其身軀の健全につきての檢閲を施す。其兒不幸にして虛弱なるか又は片輪なる時には、之を保護し養育せざらしむ。其健全なるものは、之を國家の養育場に入る。此養育場に於ては、務めて其子をして母を見知ることなからしむ。母を見知れば家を思つて國を愛せざるが如き結

果に陥るを恐れてなり。此所にては始めの間は國家の乳母をして、身軀を最も強壯に最も美はしく育つべきやう注意せしむ。生れて暫くの間は、其身軀は恰も蠟の如き柔弱なるものなれば、生初三年間は殊に注意すべく、三歳に近づく頃より、務めて新鮮の大氣中に運動せしめ、時々抱きかゝへて恰も船に乗れるが如き状態にあらしむべし。此三歳までの間に、精神の發育にも注意せざるべからず。兒女は此頃にて諸の印象を受取ることなかく、鋭きものなれば、決して悪しき事柄を見聞せしむべからず。訓練につきては寛嚴宜しきを得ざるべからず。寛にすれば氣儘になりて怒り易く、嚴にすれば畏縮して奴隸的の恐怖を抱き易し。要するに此時期は快活にして身軀精神共にのびくゝと發育せしむべし。三歳より六歳までは兒女に許すに遊戯を以てすべし。遊戯は兒女の自然に好む所にして、之に依りて以て其子の傾向を察することを得べし。即ち將來の建築家は木片を弄び、將來の畫家は繪を描くを以て、其將來の生活を導くに大なる助を得。殊に兒女は遊戯に依りて自ら學習に慣れ、之に面白味を感ずるに至り、又遊戯に於て、戦争や地理に關する智識を得、猶又細工するに依りて目と手との感覺を練るの

みならず、人柄の如きも遊戯の間に自ら之を形ち作ることを得。即ち規則正しき遊戯を爲さしむれば、兒女は自ら將來規則正しき人となる。此故に遊戯は務めて之を獎勵すると共に、又能く遊戯の種類に注意して悪しき遊戯を爲さしめざるべく、悪しき遊戯を爲したる後、之を罰する如きは、抑々教育者の不注意なり。罰の如きは兒女が長者を輕蔑し又は命令を犯したる時にのみ之を課すべく、要は楽しく且つ正しく生活せしむべし。此時の訓練としては、教育者の威嚴と模範とに依りて之を爲すべく、靡恥及び名譽の感情は成るべく、幼少の時より之を重んぜしむべし。猶此時期の兒女には有益なる話を爲して其好みに訴へ暗々に歴史上の考や社會に關する智見を與ふべく、又田舎や神社に遊ばしむべし。滿六歳となれば、男女兒各々其教育所を異にす。先づ男兒より言へば男兒は年齡十歳に至るまでは、主として体操を教授す。体操は角力及び舞蹈の二つにして、共に戰鬪的練習と結合すべきものとす。十歳に至れば音樂的教授の基礎として、讀み方書き方を教授し、音樂其者は十四歳より十六歳の間に教授す。氏は當時の人と同じく、体操と音樂とを重なる科とし、而して其体操を課するは、精神に力と完美

とを與ふるにありとして曰く、身軀の修練に對しては若き者は、先づ精神の力を高むることを目指すべし。若し茲に人あり、單に軀力を練ることのみ心を注ぎて、毫も音樂的の修練を爲さざらんか、恰も野獸の如く無學と疎暴とに流れ、優美と儀容とに缺くる所あるべしと。されば氏の共和國にありては、軀力の弱き者は殆ど之が生存を許さずといへど、他方に又音樂的の教育を以て人間を高尙にせざるべからずとせり。音樂につきては、氏は最も重きを置き、人の精神は美を通じて善に上るとの考を持して曰く、音樂の節調と調和とは、深く精神の底に徹して、之を感化すること最も深し。人之に依りて正當に教育せらるゝ時は、只管美なるものを賞翫するに至るべく、かくして永く此美なるものを賞翫するに至れば、自ら之に薰染して有徳の人となるべしと。希臘人の善美混同の思想は、氏に於て最も明に之を伺ふことを得べし。氏既にかく音樂に重きを置く所より、之に合する歌の詮索を嚴重にし、不健全なる詩を作る詩人は之を國外に放逐すべしとせり。此六歳より十六歳までの期に在りては、國家の教育者は、能く兒童の人と爲りと才能とを觀察し、人柄高からず、且つ才能なしと見る場合には、之を退ぞけて教育を受けしめず、此

國家の第三の階級を組織せしむる注意を爲さざるべからず。其發達の望ある者は、十六歳より猶進んで教育を受けしむ。氏は數學、天文學を學ばしむ。氏は數學、天文學は軍事の教育にも大關係ありとし、數學をあらゆる學問の中にて重なるものとして謂へらく、數學は人を導きて事物の本體に達せしむ、即ち感覺的の諸現象より出立して眞と善との理想に達せしむと。氏は猶其中の幾何學を重んじて曰く、幾何學は永劫なる存在を自覺せしむる最良方便なり、而して又科學的頭腦を作る必修科なりと。天文學につきては天體の運動を論じ、最も精密なる數學的關係を以て天體の運動を究むるがゆゑ、獨り戰術航海術及び農業に關するのみならず、又時間の觀念を與へ、人の精神を誘導して超自然の理想に達せしむるものなりとせり。かくて二十歳まで教育し、軍人は軍務に服せしめ、茲に此國家第二の階級形ち作らる。氏の考に依れば、軍人の階級の者の子が軍人となるにはあらず、第三の階級の者の子といへど、軍人たるに適すれば之を軍人の階級に上し、第一の階級の者の子といへど、施政者たるに適する資格なき時は、之を軍人の階級若しくは實業者の階級に下さんとするに

あり。其施政者たるに適する者は猶教育を續けしむ。施政者たるべきものには、二十歳より更に十年間哲學を修むる豫備として、一層深く從來の學科を學習せしめ、更に五年間専ら哲學を納めしむ。蓋し哲學者は天地人生一切の事を究めて、身親しく理念の界に遊び、直接に至善の理想に接し、人を哲人とならしむる學なり。かくて五年間、斯學を研究し、三十五歳に至らば、世間に出てて事務を練習し、五十歳に至りて始めて國家の施政者とならしめ、茲に此國家第一の階級は形ち作らる。蓋し施政者は一國の運命を左右すべき責任を負へるものなるを以て、國步艱難の際に處し、激浪の中に翻弄せられず、以て能く國家の目的たる正義を伸ばすべき人なるを以て、其教育は殊に慎重を要するなり。かゝる人國政を執るに至り、衆民互に融和して、以て正義言ひ換ふれば善を實現す。氏いふ哲人にあらざれば眞に國家を治むること能はず、哲人王位にありて國家始めて其目的を達すべしと。

以上の教育に於て、第三の階級を組織すべきものには節制の徳、第二の階級を組織すべきものには之に加ふるに勇氣の徳、第一の階級の者には更に加ふるに明智の

徳を以てし、而して第一の階級の者は自ら節制、勇氣、明智及び正義の四徳を備へて、以て國命を執り、國家の依りて立つ目的たる正義を實現すべきやうの注意を爲すべきは言ふ迄もなし。

六歳以上の女子の學ぶべき學科も、其主なるものは体操と音樂とにして、体操は身体を強壯にし、音樂は感情を養ひ、殊に婦徳を養成すべき價值あるものとせり。此二科に加ふるに、將來軍人の妻となるべき者には、軍事上の智識及び德行、又將來施政者の妻となるべきものには、其子女を教育し、其國民を保護し、又其夫を助くる上より、科學哲學をも學ばしめ、其階級相當の徳を守らしめざるべからずとせり。

かくて男女兒各々成人して結婚するに當りては、國家之に干涉す。氏いふ「精神身体共に善美に教育せられ、年齢恰好の男女にあらざれば結婚を許すべからず、これ其良子女を擧ること能はざればなり」と。

今一つの教育意見を書ける「法律論」は、晩年の作なるだけ、餘程實際に近くなれり。七歳までは家庭にて教育するを許し、又兒童に歌はしむる卑俗の歌を作る詩人を、「共和國にては國外に放逐すべし」とまで言へるを、法律論にては唯國家の監督の下

にあらしむれば可なりと言ひ、此書の中に、氏が名高き教育の定義を下せり。曰く「善良なる教育とは、身体と精神とに出來得るだけの美妙と完全とを附與するにあり」と。要するに此書は其名よりして知らるゝが如く、法律が國家社會の成立に必要なることを説きたる實地的の意見にして、之に反し、共和國は全然道德を以て之を治めんことを企圖したるなり。十分に氏の教育意見を見るべきは、共和國なりとす。

「共和國は一見すれば、全くプレトリーの想像より出でし如くなるも、しかも一面は之に依りて當時の時勢を救はんとし、他面には希臘人の教育理想を最も極端に描き出したるものなり。當時の時勢を救はんとしたりといふは、當時一般にアゼンス人の家庭は、兒童の教育に骨折らず、女子は教育を受けずとも可とせられ、而して詭辯學派が流し、個人主義の害毒は國家の權威を失はしめ、共和政に當る者は、多くは無學にして欲深く、明智あり正義あるもの殆んど無かりしを以て、氏はすべて是等を救はんとしたるなり。氏が其アカデミーにて教へたる精神も、全く明智あり正義心ある施政者を作らんとしたるなり。しかも當時の頽勢なか／＼に氏の力

にて支へられず、氏の死後十年にして、一時希臘はマセドン王フィリップに屈服せられぬ。而して他方に希臘人の教育理想を最も極端に描き出したるといふは、心身の最も圓滿に發達せる善美兼ね備へたる人を作らんとしたるにありて、これ希臘人の理想を明瞭に描き出せるものに外ならず。

氏の死後、アカデミーは、其弟子クセノクラテス之を教へたりけるが、其弟子として、嶄然頭角を顯はしたりしは、アリストートルなり。氏が影響は直ちにアリストートルに傳はり、又アカデミー派、新プレトール派を起し、而して猶中世紀にも近世にも偉大なる影響を及ぼせるは、今後十分に認め得べし。

希臘 其五

第十四節 アリストートル
アリストートルは、紀元前三百八十四年希臘殖民地スレーヌ地方のスタギラに生れぬ。父をニコマクスと言ひ、マセドン宮廷の侍醫にして、醫學及び自然科学に關して著書もありき。アリストートルが精密なる科學的精神を有して、百科の學を創立せしは、遺傳の力もあるべく察せらる。早く兩親を失ひしかば、父の友プロクセヌスに看習せられたりしが、此人も亦死せしかば、アゼンスを見んと、の念に驅られ、十八歳にしてアゼンスに來れり。アゼンスに來り、師とすべき人を求むるに、プレトールを措きては之と目指すべき人なし。即ち其門に入りて教を乞へるに、直ちに嶄然頭角を現はし、プレトールをして、アリストートルは我學校の精神なりと呼ばしめぬ。

プレトールに師事すると殆んど二十年、學成りて名聲頗る高く、四十歳の時、マセドン王フィリップに召され、其太子アレキサンダーの教育を托せられたり。此時フィリップ自ら書を裁し、アリストートルに致して曰く、余に一子あり、余は之を神に謝せざる

べからず、而も單に一子を興へられたるか故にあらず、御身の生存中に興へられたるを以てなり。御身は余が子を教育してマセドン王位の承繼者たるに恥ぢざらしめよ。」と、此時アレキサンダーは十三歳なりしが、是より此名高き教師は此名高き弟子に、修辭學、文學、哲學、政治學などを教へ、其東方遠征に上るまで止まざりき。氏はマセドン宮廷に用なき身となりしかば、再びアゼンスに來り、こゝに國立体操場ライジウムに學校を開けり。此學校は、其生徒の數に於ても勢力に於ても、優に他を凌駕せり。氏は午前に成熟せる學生に哲學を講じ、午後には多數の聽衆を相手に修辭學、哲學、政治學、倫理學等を平易に講述し、かくする傍に、其學生を指導して共に材料を集め、それ〴〵獨立の研究に従事せしめき。氏が學問の該博なりしは、一は其天才に依るも、一は亦かゝる研究法の賜なりといふべし。氏が此ライジウムにて講義する時は、篤志の門弟を従へ、此學校の續きの並木の間に逍遙しながら講義したりしを以て、世に氏の學派を「逍遙學派」(peripatetic school)と呼べり。氏が午前と午後とに講義したりしより、其著述も亦一般人の爲めにせしものと殊に専門に研究する人の爲めにせしものとの二種に分れたるが、今残れるは其第二種のもの

なり。中につき教育に關係あるは、倫理學と政治學との二書にして、氏は殊に「教育につき」と題する書を著はしたる由傳へらるれど、今残り居らず。

氏が此教育に従事し居る中、希臘はマセドン王フィリップの威力に屈從せざるべからざるに至り、希臘人はマセドン人に恨を懷きたるが、フィリップ死しアレキサンダー亦急死したりしより、其恨はマセドン宮廷に縁故深かりし氏に及び、表面は敬神の念を欠けりとアゼンス人に訴へられ、將に死に處せられんとせしかば、アゼンスを遁れて、ユーボア島のカルキスといふ町に至り、三百廿二年の夏、胃病の爲に歿せり。

氏が性行につきては傳ふるもの一ならず、或は其師プレトールと争ひ、又其弟子アレキサンダーと不和になりし等の事より、氏を非常の俗物なるかの如く傳ふるものあれど、プレトールと争ひたるは學說の相違より出てしが如く、又アレキサンダーと不和になりしは、氏が切カリヌセテスを手打ちにせられたるより起りしことなれば、之を以て直ちに氏の人物を判定すべからず。唯氏が人と爲り、非常に活動的人なりしを以て、自ら人と衝突し易く、之をソクラテス、プレトールの二氏に比すれば、其人品の點に於ては及ばざる所ありしが如し。氏が偉大なることは、實にあらゆ

る學問の父となりし點にありて、其知識の宏大なることは唯近世獨逸のライプニツが類を同じくするのみ。

氏が學問研究法はプレトリーと違ひ、科學的にして歸納法に依れり。プレトリーは天より地を見下さんとし、氏は地より上りて天に達せんとする傾あり。此傾氏が哲學全體にも、亦其教育論の上にも現はる。一例を舉ぐれば、氏の國の政體を説くに當り、二百五十ヶ國の政體を調べしが如何に實際を踏臺として其普遍の道理を發見せんと力めたるかを知るに足る。

氏はプレトリーと均しく、知識には普遍の所あり、又法律道德の如きも一定せる所ありと唱へて、詭辯學派に反對せる所は同一にして、正に其師プレトリーの精神を繼げるも、其説き方は大に異なり。氏は事物の通性を見出すを以て眞の知識と爲せども、其通性たる、事物を一貫せる所の性質にして、もとより個々物を離れたるものにあらず、プレトリーの言ふが如く、個々の事物を離れて通性が別に存在せるにはあらずと説く。従つてプレトリーが此現象の世界を離れて別に理想の世界あり、此現象界は、其理想界の唯影たるに過ぎずと説くを空想として攻撃し、現象と實在、材料と

形式とを離さず、現象を貫きて實在あり、材料を形式が形ち作る、而して其形式の終極、即ち宇宙の第一原因を、氏は神と名づけたり。萬物は此圓滿なる神を極致とし、之に向ひて進み行く、こゝに天地成り萬物生ず。最下等なる生物は植物にして、植物にも靈魂あるが、其靈魂の働は唯營養と繁殖とを營むに過ぎず。其上の生物は動物なり。動物にも亦靈魂ありて、感覺と共に欲望の作用を有す。其最高等なる生物は人間にして、人間は動物の有する能力の外、更に理性を備ふ。即ち人は萬物發達の頂點にして、其心の働は最も複雑なり。心の根本作用は感覺にして、其感覺に依りて觀念發達し來る。氏は其感覺の中樞を心臟にありと考へたり。此觀念と共に欲望あり、欲望は常に快不快の感と伴ふ。而して猶人心には此觀念及び欲望を統ぶるに理性あり、理性、觀念に臨みて知識となり、理性、欲望に望みて意志となる。故に吾人の倫理的活動は、人性の圓滿なる活動、即ち理性に従ひて其知識と意志とが制御せられ居る所に存するものにして、之を徳と呼ぶ。徳は吾人の活動を離れて存するものにあらずして、此徳には必ず幸福伴ふ。而してかく善を全うし其福をも併せ得る境涯を名づけてオイダイモニヤといふ。ソクラテスが至善に

は徳と幸福と附屬するを要すとし、又プラトールが一意理性に支配せらるゝを徳と呼びて幸福を刳ね除けたる思想が、如何にアリストートルに調和せられしかを見よ。かく吾人の行爲を理性が支配するには中庸を得るを要するが、此中庸を得んには、知見明ならざるべからず、知見のみにては足らず、此知見に従ひ、行ひて過らざる意志の修練を、習慣を重ねざるべからず。知見明にして合理的活動を爲し、而して習慣性となりて茲に品性を爲し、而して幸福全し、之を人間生活の最も高尚なるものとす。此人間は孤獨に存立すべきものにあらず、人は政治的生物なり、人は家族村落都府國家を爲すべき性質を有し、其如き國家社會を爲すことに依りて其幸福は全うせらる。國家なくんば個人々々の幸福は全からるべからず。即ち國家の目的は、其國民を統一して其各自の幸福を全うせしめ、同時に國家を自身の幸福をも全うするにあり。従つて國家は其國民を教育して有徳の者と爲さざるべからず。

氏が所謂國家は、治者の階級と被治者の階級との二つより成り、其治者の階級更に國家の政を定むるものと其定めたる政治を施行するものと二つに分る。被治者

の階級とは、農夫、漁夫、工人、商人などをいふ。之を治むる者は、才智道德に於て、萬人に勝れる、所謂幸福を具有せる神人 (Divine man) ならざるべからず。此國家の目的は、さきに言へる如く國民を教育して之を有徳のものたらしめんと、唯一の目的を有するが故、國民の教育は又各人同一ならざるべからず。現今アゼンス人が爲す如く個々人の好みに一任すべからず、教育は萬人同一なるべし。國家は個人よりは先きなり。但し此國家が教育すべきは、治者の階級即ち士族に限り、被治者の階級の者には唯實踐的の義務を知らしむれば足れり。是等士族たるもの、教育を受くる精神は、古よりアゼンス人が一般に考へたる如く、又プラトールが主張せし如く、修養の爲めのみなるべきか、修養の爲めと言はゞ教育は道樂の爲めとなりて有用の爲めといふことは排斥せざるべからず、氏は此點に於て教育は道樂の爲めと有用の爲めと兩方の目的より受けざるべからず、但し其輕重を言はゞ前者を重しとすべしと言へり。

此士族教育の時期は之を四つに分つ。第一期は幼兒期、生れてより七歳までにし、始めは主として身體に注意し、後には心に注意すべし。第二期は兒童期、七歳よ

り十六歳までにして、心身共に均しく注意すべし。第三期は青年期、十六歳より三十一歳までにして、一層進みたる教育を與ふべき時なり。第四期は成人期にして、是迄學びたることを實際に關係して研究せしむべき時なり。

先づ第一期より言へば、國家は兒童の生るゝ前に其教育的の注意を及ぼすべし。即ち男女の結婚に付きては、身年不相應の者の結婚を許すべからず。男子は卅七歳、女子十八歳を以て至當とす。孕胎の間は、淡泊なる食物を取らしめ、適度の運動を爲さしめ、又感情的の激昂を避けしむべし。妊婦に對しては、國家より法律を出し、毎日必ず神社に詣うて、善き子を授けらるゝ祈禱を爲さしむべし。かくて生れたる子、片輪なる時は之を殺すべし。其健全なる者は之を養育すべきが、之に供給する養分は、其後の健康に大關係あるを以て十分に注意し、又幼兒相當の運動を爲さしむるとは怠るべからず。幼兒は又熱高きゆゑ、寒冷に慣らすべし。二歳より五歳にかけては、懶惰に其身を慣らさざるやう、絶えず身體を働かしめざるべからず。しかするには、遊戯に注意せざるべからず。遊戯は卑しきもの、過度に心身を働かすもの、又女々しきものを避けしむべし。小供に聞かじむる談話又は昔

話は、國家の普通教育監督者が認可したるものならざるべからず。蓋し遊戯談話は、將來の學習將來の職業の本となればなり。普通教育監督者は、一般に幼兒の娛樂に關して深き注意を爲すべし。奴隸と遊ばしむべからず。これ幼兒は其見聞する所を直ちに眞似るものなればなり。すべて卑しき事柄、又は幼兒を懦弱に誘ふ如き事柄は見聞せしむべからず。演劇を觀しめ、又は宴會場に連れ行くべからず。圖書も教育的の注意なきものは見すべからず。此時期の小供は動もすれば虚言を吐くことあり、深く戒むべし。之と共に、又恥を顧みざるが如き事を爲さしむべからず。かく注意して五歳までは、強ひて何も教ふべからず、それ却つて其心身の發達を損ふべければなり。五歳より七歳にかけては、後に學校教育を受くる時の準備として、少しづゝ各種の事を教ふべし。しかも嚴格に課程科目を立つる必要なし。かくて七歳に至れば、學校に入しむ。要するに此幼兒期は、家庭教育の時期なり。氏はスバルタにて爲し、又ブレットが唱へし如く、人の子の生るゝや、直ちに之を共同の教育所に入るべしとは言はず、國家は個人よりは先きなれども、之を子供の生立つ順序より言へば、家庭は國家に先き立つものにして、家庭親愛の

情は教育の本たるべく、之を引き離して共同の教育場に入るべし、恰も蜜の一滴を多量の水に投ずると均しく其甘味を失ふ如く考へたり。但し此間國家が注意せざるにあらず、國家は間接に普通教育監督者の手に依りて之を監督す。

第二期七歳より十六歳、第三期十六歳より二十一歳までは、家庭を離れ、公立學校の教育を受くる時なり。兒童は今や國家の建てたる學校に入り、國民となり士族となる準備を爲さざるべからず。此所にて體育、知育、徳育を受けざるべからず。體育は植物的生活を爲す身體を練る所以、知育は動物的生活として有する感覺を練りて之を人間の生活の特色たる理性に照らさしめ、以て知識を開かしむる所以、而して教育は動物的生活をして有する欲望及び感情を、人間の生活の特色たる理性に制御せしめ、以て合理的活動を爲さしむる所以、かくして始めて國家を組織する所の士族成るべし。先づ體育より言へば、この爲めに体操を教へざるべからず。但し之を教ふる趣旨は、當時の如く之を戰の準備、又は單に強くならしめん目的よりすべきにあらず、偏に身體を美的に發達せしめ、引き立て精神の發達を助けしむる目的よりせざるべからず。かく身體を美的に發達せしむるには、却りて劇しき操

練を避けしめざるべからず。そはオリムピヤの競争の記録を見れば、小供の時に大人の時にも、一人にて通じて勝てる人は極めて稀にして、小供の時に勝ちしものは大人となりて勝たず、大人の時に勝ちしものは小供の時は勝ち居らず、小供にして勝てる者は、小供としては不相應の劇しき操練を爲して力を疲らし、大人となりては力續かず、大人として力強き人は、小供の時、餘り劇しき操練を爲さず、順次に其發達を爲し、大人となりて十分に強くなりし人なり。此故に、體操を爲さしむるに、十六歳までは輕き操練を爲さしむるを可とす。而して又體操は精神の發達を助くるが爲め、言ひ換ふれば精神の發達も身體能く發達するにあらずば十分ならざるが爲めに學ばしむるものなれば、絶えず體育と精神教育との調和を計り、體育の爲めに精神教育の疎そかになるが如きことあらんを避けざるべからず。知育としては讀み書き、圖畫、音樂及び哲學を學ばしむべし。讀み書きは日常に必要なが爲めにのみ之を課するにあらず、之に依りて大に知識を開發し、精神を高尙にせんが爲めなり。其讀み書きの材料として、氏はプレトリーの如く、詩人の詩を嚴しく詮索すべしとせず。プレトリーは詩は人の卑しき情を刺激すとの故に、非常に其

材料に制限を加ふべしと言ひしが、氏は其情を刺激することに依りて、却りて精神を高尙にすと考へたり。謂へらく詩殊に悲劇は、之を讀み之を觀る人の恐怖の情と愛憐の情とを刺激して其心を洗ふ。悲劇の主人公が避け難き不幸に陥るを見て、一たびは恐怖の情を起し、一たびは之に同情を起し、之と同一體となりて己を忘れ、己の心を洗ひ、而して其跡に遺るものは爽やかなる心地のみ。此所に至り是等の情は、理性を妨ぐるものとならずして、却りて理性の爲めに道を開くものとなるべしと。氏は此讀み書きに併せて、文法及び修辭學を加へ、十六歳よりは是等を修めしむべしとせり。猶氏はプレートと違ひ、讀み書きの材料として歴史を重んじ歴史は心の修養に對して特別の價值あるものとせり。圖書につきては、氏は趣味を養成し、美術に對する判斷力を養ひ、又形之美を理解せしむるに適するものとして之を教ふべしとせり。音樂につきては、氏は心に熱を興へ、快不快の感情を刺激し、依りて以て大に心を練るものとし、其快の感情を興ふるものは高尙のもの、不快の感情を興ふるものは卑俗のもの、而して其高尙と卑俗との依りて分るゝ所は、其音樂に合はする歌の想に關し、又其音譜及び調音の如何に關すとて、音樂に合はす

る歌は倫理的の歌にして、之に伴ふ音譜及び調音は、スバルタ式を宜しとし、猶各の樂器に付きて其教育的價值を論ぜり。要するに氏は音樂につき、第一高尙なる感じを起さしむる爲め、第二心を洗はしむるが爲め、第三心を寛和せしむるが爲めに學ばしむべしとせり。哲學につきては、事物の眞偽を見分けしめ、理性の光を發せしむる爲めに之を學ばしむべしとせり。此外十六歳より二十一歳までの間に、數學、幾何學、天文學を學はしむべしと言へるも、氏はプレートPlatoの如くには是等の學科を重んぜず。これ道德的價值の少き故なりとの考より出づ。德育につきては、氏は一方に習慣を能く導き、他方に教訓を以てし、遂に其神にも似たる品性を爲さしむべしとせり。習慣に於て其人の心情が善に傾くにあらずば、教訓は善き結果を收むることを得ず。習慣は第二の天性なり、こゝを以て絶えず中庸の徳を守りて良習慣を養はしめ、それと共に理性の命ずる正義、友愛の徳を教へ、習慣と教訓と相合して茲に神人を作らんとすべし。かくの如き人、個人として見れば美的に發達せる人、而して士族として見れば能く國家に盡す所の人たるべし。

第四期成人期に至りては、進んで國家の務に當り、以て其教育を完成せざるべから

ず。彼は是まで神人たるべき教育を受けられども、未だ神人とはなり得ず。是より國家の務に當り、經驗を重ね、修養を積まざるべからず。經驗を重ね、修養を積むには、始めは活動的、實踐的、施行的の務に當り、文官又は武人として國政を執り、國政の議定せられたるものに從つて働かざるべからず。即ち氏の理想的國家の治者の階級の第二の位置に立たざるべからず。此時研究すべきは倫理學と政治學との二つにして、之を實踐的研究せざるべからず。而して此時守るべき道德は、主として克己と勇氣なり。かくて經驗を重ね、修養を積まば、此度は熟慮的、理論的、立法的の事務に當り、議院に入り、國政を議定し、法律を發布せざるべからず。即ち氏の理想の國家の治者の第一の階級に立たざるべからず。此時研究すべきは純理哲學、即ち神を理解し、冥想することにして、主として守るべき徳は友愛と正義なり。此所に至り、彼は有限の世界より無限の世界に入り、目のあたり神と接し、神人となり、而して能く國家民人を導く。蓋しさきに活動的に働けるは、後に神を觀じ、神の意を世界に現はさんが爲めの準備にして、其神の意を此世に行ふに至り、人としての運命を遂げたるものとす。

一、この教育意見なり。此意見はもとより氏一己の理想より出でしものなるも、當時のアゼンスの社會、廣く言へば希臘を眼中に置き、之を改善せんとしたる反抗の點もあり、又其師プレトリーの考を繼げる所もあり。而して此意見は當時に如何なる影響を有したりやと言ふに、氏はさきにも言ひし如く、殖民地生れなるが上、希臘人の敵視せしマセドン宮廷に關係深かりし故を以て、アゼンスにては客分と見られ居りたりしより、ソクラテス、プレトリーが其意見を以てアゼンスを改善せんと力めたる程の力は有するに至らざりき。殊に氏の眼はアゼンス、進んでは希臘と言ふが如き狭き範圍に限られず、殆んど世界を眼中に置き、其教を布きたり。而して此氏が世界的活動を實地に行ひたるものは、其弟子、アレキサンドル大王なり。氏の意見は大王に依りて其花を開けり。

大王を以て軍隊の力にて世界を征服したるものと言はゞ、アリストートルは精神の力を以て世界を征服したるものといふことを得べし。大王の力は實にアリストートル教育の結果に出でたることは、大王自ら認めて公言せし所なり。大王の性質、武に走りたる所ありしも、亦た能く美術文學を解し、天文地理の研究に心を傾

け、其他國を征服するや、其文化を保護し、之に希臘語を語らしめき。希臘の文明が世界に擴がりたるは實に大王の力なり。大王の力に依りて、東西の交通は自在になり、文明を以て誇れる希臘人或はマセドニヤ人と、野蠻と見られたる他邦人との畛域は取り去られ、殊に大王の部下トレミーの手に依り、希臘の文化は長く埃及のアレキサンドリアに移し植ゑられたり。

アリストールの意見は、かく大王の手に實現せられたるが、其學統は逍遙學派として存在し、猶此の勢力が、後世の學術並びに教育の上に、如何に影響するかは、今後述べる行く所にて明なるべし。

希臘 其六

第十五節 希臘の末路と諸學派の勃興 歷山大王の死後、希臘は同盟を作りて一時マセドンの羈絆を脱したるも、其同盟の間に屢々不和起りて希臘全躰の統一行はれず、かく希臘の國民が、已に政治上の自由を失ひ、公共生活の上に希望を失ひたるより、各人は自然に内に省みて安心の地を求めんとし、國家に屬する國民といふ考に重きを置かず、唯一個人の人として其身の處し方を考ふるに至り、茲に従來のアカデミー學派、逍遙學派の外に、色々の學派起りて時人に安心の道を示せり。其重なるものを修辭學派、ストア學派、エピキユラス學派及び懷疑學派と爲す。

修辭學派はソクラテスの弟子たりしイソクラテス(紀元前四三六—三三八)の創めし所、其主とする所は、深遠なる知識を授くるにあらず、寧ろ常識を興へ、此常識を口に筆に美的に人に發表する道を教へ、以て各自交際の上に相互の満足を得しめんとするにありて、他の三つの哲學的學派に比すれば、遙に世俗的の所あるも、實際上の勢力は却りて之を凌ぎたり。而して此學派の勢力は、轉じて羅馬に入りて羅馬

の修辭學の發達を助けたり。ストア學派はゼノソ(紀元前三四〇—二七〇)が創めし所氏は純粹の希臘人にあらざりしも、アゼンスにて學び時人がストア即ち彩色したる堂と呼びし所の學校を開きて時人を教育せり。此學派は、大儒學派の系統を引き、大に人間の理性と意志とを重んじ、徳行を人間唯一の貴ときものと主張するにあり。此學派も羅馬に入り、羅馬人の性質に投じて、教育上の一大勢力となるに至りたるが、委しくは羅馬の章に言ふべし。エピキュラス學派は、エピキュラス(紀元前三四二—二七〇)が創めし所氏はアゼンスの人にして、アゼンスに學校を開きて其徒を教育せり。此學派は、キレーネ學派の系統を引き、人間の感情の満足即ち幸福を得るを以て人間の目的とし、徳行も畢竟幸福を得る方便に外ならずと見たり。此學派も羅馬に入りて羅馬人を教育したれど、ストア學派ほどの勢力は得ざりき。懷疑學派は、アリストートルと同時なりしピルロー(紀元前三六〇—二七〇)が創めし所、天地人生一切の事を分らずとし、人は天地人生の事に無頓着となりて、却りて心の平靜なるを得と考へたり。此學派は正に詭辯學派の系統を引けるものなり。かく希臘の末路にありては、公共生活は破れ、哲學者教育家は各々其見る所を異に

して時人を教育し、國家社會全體の統一といふものなく、遂に紀元前百四十六年希臘は羅馬の爲めに滅ぼされ、アケイヤといふ名の下に羅馬領の一となれり。但し希臘の土地、人民、學術、教育は國家の運命と共に滅びたるにあらず、羅馬の代となりては、アゼンスは、次に述ぶるアレキザンドリヤと共に、羅馬の學校町(University-town)となれり。

第十六節 アンキザンドリヤに於ける教育 希臘滅びて希臘の學術教育は死せず、アゼンスは羅馬領となりても、學校町として榮え、大に羅馬の教育に影響せしと對し、埃及のアレキザンドリヤは、又希臘の學術教育を移し植ゑ、希臘が滅びたる後、其學術教育を此所に保存し、是亦大に羅馬の教育に影響せり。

其起りを尋ぬるに、歴山大王は、先きに殆んど世界を統一せしが、其死後、其領地は、其將官等の分け取りする所となり、其將官の一人トレミー一世(紀元前二百八十三年に死せり)は、埃及を領することとなり、其埃及の首府アレキザンドリヤに、希臘の文化を移し植ゑ、大に希臘風の學術教育を獎勵したり。トレミー二世(紀元前二八五—二四七)に至り、前王の遺業たりし博物館を擴張し、此中に圖書館を置き、館中には

五十万冊の書を蔵めき。而して又此博物館の中には講堂あり、哲學者科學者を優遇して講義を開かしめ、自ら一の官立大學の姿を爲せり。

此地は東洋西洋交通の中心に當り、ユデヤ人、フォエニシヤ人、亞刺比亞人等集まり居たりしより、希臘の學術教育は是等東洋人の思想と合して世界的となり、かくて紀元前三十年に、此地羅馬領となるや、羅馬人は此府を學校町として、漫遊する者留學する者踵を接し、希臘思想と羅馬思想と相混合せる一種の文化を生じ、此時に至りては、此地最高の教育としては、必ず文法、論理學、修辭學、數學、幾何學、天文學、音樂の七科を學ばざるべからざることとなれり、之を七個の自由藝術と言ひ、此中前の三つを三科(Trivium)後の四つを四術(Quadrivium)と稱せり。其後基督教此地に入るに及び、此教義、此地の學術殊に希臘哲學と衝突し、茲に神學の研究起り、而して基督教徒が呼びて異教徒と爲す者を基督教に導き入るゝが爲め、問答學校と稱する宗教學校を開くに至り、遂に基督教と七個の自由藝術とは結び付きて、一種の基督教的文學を生じ、此基督教的文學、西羅馬の滅ぶると共に今の歐洲に流れ入り、歐洲中世紀の教育を爲すに至れり。

第十七節 アゼンスの教育に對する批評 アゼンスは希臘の花にして、希臘が後世に及ぼしたる影響も、主としてアゼンスより出てたれば、アゼンス教育の批評は、やがて希臘教育全體の批評とも見るべし。

先づアゼンス人は如何なる人を作ることを目的としたるかといふに、心身の共に調和的に發達したる美的の人を作らんとしたり。此理想は、ソクラテスの賢人、プラトンの哲人、アリストートルの神人に於て最も明に言ひ現はされたり。アゼンス人は一般人と學者とを問はず、均しく善に達するには美の道を通らざるべからずと考へ、人を作るの本は、美的教育を施すにありとせり。故に教育史上、アゼンスの教育廣くは希臘の教育は、美的の教育(Aesthetic education)と言はる。此美的の教育は、身軀を健全に發達せしめ、高尚なる音樂、文學、修辭學、或は宗教を以て卑しき感情を制し、而して數學、幾何學、天文學、倫理學、政治學、哲學の如きを以て其知力を開き、其理性を明にし、此理性の導く所に感情と欲望とを調和的に従はしむるに依りて成ると考へたり。これ一種の教育理想にして、之を希臘主義(Hellenism)とも呼び、此主義は、是より絶えず教育史の上にて力あるものとなる。唯これこれ理想なり、其

感情教育は動もすれば感覺的傾向に流れ易く、其知力教育は動もすれば實行の之に伴はざる唯理一片の弊に陥り易し。かくして美的の生活は破れざるを得ず。之を救ふの道、意力を強固にして感性の理性を暗まさんとするを拒ぎ、他方に其理性の命ずる所を實行に現はさしむるにありといへど、此くの如きはアゼンス人の能くせざりし所にして、其對手たりしスバルタ人、又希臘を滅ぼし、羅馬人の能くせし所なり。佛のモンテーインが、アゼンス人は言の民、スバルタ人は行の民、アゼンスの町にては修辭家、畫家、音樂家の如き言葉の代表者に逢ひ、スバルタの町にては立法家、行政家、軍人の如き行爲の代表者に逢ふと評せしは、蓋し此點を言へるなり。餘ずる所、アゼンス人は理想の民にして實行の民にあらざりき。而してアゼンス人の教育目的を社會的方面より見れば、アゼンス人は右の如き美的の教育を受けたる人にして、能く其國家の國民たることを得るものにして、此國民を作るは國家生存の必要、又國家存立の目的より出づと考へ、國家主義を以て教育を營み、一方には個人主義を排斥し、他方には世界主義を認めざりき。アゼンスは個人主義を許したりとは言へ、そはスバルタなど、比較して言ふことにして、大體は國家主義な

りき。之に對し、詭辯學派第一に個人主義の要求を叫び、マセドンより征服せられ公共生活破れてより、愈々個人主義は其頭を擡げ來り、此時に起りたる學派の如きは、唯個々人の安心をのみ説くに至り、希臘の國家的生活は茲に全く破滅しぬ、而して他方に、アゼンス人は、世界主義の教育には思ひ到らず、希臘殊にアゼンス人は、一躰に他國人を野蠻人として輕蔑し、獨り自ら高くして之と對峙し、希臘國內にありては、又アゼンス人はスバルタ人に、スバルタ人はアゼンス人に對して、獨り其國を強くするが如き國民を養成せんとし、内外に對しての偏狹なる此國家主義は、遂に世界の進運と戻りて、却りて其國家を滅ぼさしむるに至りぬ。

アゼンス人が其理想とする人を作る爲めに執りたる教育の方法は、教授に就きて言へばソクラテスの産婆術、プラトリーの對話の如き、慥に一種の教授法と見るべきも、一般の學校にての教へ方は、主として記憶に訴へたり。訓練の方法は能く行はれ、体操學校、音樂學校の共同教育に依りて自ら其國民を作り、其國民となる場合に、國家の元老若しくは先輩が之を迎へしが如きは、能く訓練の要を得たり。教育の學説は、アゼンスに於てなかくに發達したり。コムペーレ評していふ、ソ

クラテス、プレト、アリストートルの意見に於て、吾等は教育に就きての考を纏めんとしたる初めての企を見る。吾等はアピセンヌにて教育學を心理學、倫理學及び政治學に基づけて論究せる萌芽を見ると。唯それ萌芽にして、其基礎學たる心理學、倫理、政治の諸學が猶精密ならざる所ありしより、従つて教育學も缺點多く、殊に此時代の學説は、其人の哲學が本となり居れるを以て、科學的根據の薄弱なる所あるは免るべからざる所なり。

教育の制度につきて言へば、國立操鉢場の教育だけは政府の手にて營み、之をアリオバガスにて統べしも、之は今日の文部省といふが如きものにあらず、其教育を受くる者は、スバルタの如くは之を嚴重に、士族にのみ限らざりしも、猶高等の教育を受くる者は、士族に限られ、而してスバルタと迷ひ、女子教育の制度の設けられざりしは缺點と見るべし。

第二章 羅馬

第一節 羅馬の風土人種等 羅馬は地中海に突出せる一大半島、伊太利の多瑙河に河畔に根據を占めたる都府にして、アトリヤン種族の一支族、伊太利種族の經營に懸り、遂に世界を一統し、所謂拉丁文明を世界に擴げたり。此拉丁文明は大に希臘文明の影響ありきといへど、又羅馬の特色なきにあらず。羅馬は實に希臘文明を己れに消化して、之を世界に擴ぐる媒介者となりたるなり。従つて羅馬の教育は教育史上亦重大なる位置を占む。

第二節 羅馬治世の年代 羅馬は紀元前七百五十三年に國を立て、それより中世紀の始めまで勢力を振ひたるが、此間を分ちて三期とす。第一期は建國より五百年〇九年までにして、此間は王政の時代、第二期は五百〇九年より二十七年までにして、共和政の時代、第三期は紀元前二十七年より中世紀までにして、帝政の時代なり。此中第一期には教育史上格別注意すべきことなく、第二期には其種族の性質、又其國を建つる必要上より、尙武的の教育を盛んにし、殊に希臘征服の餘威を以て

益々スバルタ風の教育を盛んにし、第三期には希臘の文明を輸入し、アゼンス風の文明彬々たる教育を布き、所謂拉丁文明の光を發したる時なり。教育史も亦此年代に従ひて、先づ第二期の共和政時代より講じ行くべし。

第三節 羅馬人の特性 羅馬の教育を解せんには、豫め羅馬人の性質を理解し置かざるべからず。古代羅馬人は、實に堅固なる品性を有し、容易に物に動かされず、或點に於ては殘忍と思はるゝ、また武に走りき。一視同仁の眼を以て世に立つといふが如き同情なく、アゼンス人の如く優美にして文雅の嗜もなかりき。しかも亦武を尙ぶ國民の常として、信義を重んじ、廉耻を尙び、己が所信を實行するに強かりき。其性質アゼンス風ならずしてスバルタ風に、理想的ならずして實際的に、文學的ならずして軍事的に、空想の民たらずして政治法律の民たりき。兵馬の民にしてかねて又法律の民たりしことは、本部伊太利種族が、始め五六千人の團結より起りて伊太利全部はもとより、漸次に亞細亞、亞弗利加、希臘、其他北部歐洲の蠻族を征服し、希臘といへど見ることも能はざる一大帝國を立て、天下の大道皆羅馬に通ずるとして、嚴然世界に君臨したりし事實を以て之を見ることを得べし。之を以て實行

的の國民、又政治法律の國民といふも不可なることなし。實に歐洲今日の政治法律は、其則を羅馬に取れる所多し。羅馬人の此特質は、其教育史上より見れば、第二期共和政時代に現はれたるはもとより、第三期帝政時代にアゼンスの文化を採用せし後といへど、常に現はれ來り、所謂希臘文明と拉丁文明とは大に其趣を異にし、教育も亦全く其觀を異にするは、以下述べ行く所にて明なるべし。

第四節 共和政時代前半の教育 羅馬に於ては、其共和政時代の半頃までは、學校といふものなく、従ひて教師もなかりき。此頃の教師は、即ち父母と周囲の境遇とのみにして、教育は全く躰育と德育、言ひ換ふれば軍隊的訓練と宗教的訓練とありしのみ。一方には躰操を勵み、他方には男女の神々の名を含める讚美歌を歌ひ、併せて羅馬法十二律を誦んずるが其課程なりき。かくして初めの羅馬人は、最も勇敢に最も堅固に訓練せられたる國民たる資格を具して、愛國の念に深からむ人を作らんと力めき。羅馬は實に公民的徳義、軍隊的徳義を養成する一大學校にして、かのアゼンスに於けりしが如く、心身の圓滿なる發達を遂ぐる爲めに教育を施すといふが如き考は有せず、偏に實際の目的の爲めに人を作りて、其理想的方面には

注意せず其目的全く公民を作らんと志したり。而してかゝる教育を爲すに與りて力ありたるものは、第一家庭の規律、第二親の感化力、第三宗教の力なりき。此三つ相依りて共和政時代の教育を爲し、爲めに學校も教師も要せざりき。此時代、此時代の羅馬に於て、小供の生るゝや、其父之を抱き上げて其子たることを認め併せて其教育に對し、始終責任を負ふべきことを示す。かくて男兒生れて九日、目女兒は其八日目に命名式を舉行し、親戚故舊を會して宴を張る。然る後其教育は母の任となる。羅馬にありては父の權力絶大にして、子は之に盲従すべきものとせられ、他方に母は家庭の中心となりて真心より兒女を教育し、寛嚴其宜しきを得て家庭教育を施せり。母は最も注意して其兒女を外部の惡しき風儀に感染せしむることを拒ぎ、質素節約及び適度の徳を養ひ、かねて長者を敬し、神を敬し、國法に従ふべきことを教ふ。家庭の教育は嚴格にして、以上の徳を養ふには、常に言葉を以てするのみならず、亦實際の手本を以てし、兒童の居る所には、苟も邪惡なることは一切之を口にすべからずとせられたり。父は其子を伴はずしては決して家の外にありて飲食することなし。家庭團樂の時の話頭に上るものは、先祖の戰場に

於ける武勇談、或は其平生の嗜の深かりしことにて、是等は暗々に兒女の名譽心を高め、愛國者にならんとの念を起さしめき。而して亦宴會の席上にては、常に大人が其祖先の名譽ある事蹟を演説するのみならず、之を音樂に併せて奏し、或は之を詩に吟じて自ら少年の心を感奮せしめたり。宴會散ずれば、年長者は少年に扶けられて家に歸る例にして、此間に何時とはなしに秩序を習へり。此外猶父は其子を伴ひて議院に出席し、目のあたり國の事務を見習はしめ、或は兵營に連れ行きて軍隊の實際を觀察せしめたり。實に古代羅馬人は、子と呼びて最も麗はしき寶とし、之が教育には深く心を留めき。

羅馬の宗教は亦大に教育の上に力ありたり。羅馬の宗教は、希臘と均しく多神教なりしも、其神々は希臘の神々の放肆なる傾あるに反し、多く權利の神、正義の神なりき。これ自ら羅馬人の性質を代表せるなり。何れの國にも見る如く、農夫又は軍人は大に信仰深きものにて、農と武とを以て本とせる羅馬の國民は、なか／＼に宗教心深かりき。羅馬人は其子の始め乳離れするや、一人の女神は之に食ふことを教へ、他の女神は之に飲むことを教へ、少しく後に至れば、四人の女神が其兩手を兩

足とを取りて歩行を教ふとの古代よりの傳説を信じ、行住坐臥、神明を敬すべきことを教へられ、絶えず宗教の空氣を呼吸して、惡しき方向に向はざるやう教育せられたり。後の帝政時代に基督教起るに至り、羅馬は遂に基督教國となりしが如き、此宗教的信仰の深かりしこと、其素因を爲せり。

之に加へて羅馬法十二律を暗んぜしむることも亦此期の教育の重なる仕事なりき。羅馬法が成文律となりしは紀元前凡そ四百五十年の事と傳へらる。此羅馬法は家庭に於て夙に親より教へられ、又羅馬政廳の前には銅標に之を彫りありたり。希臘人はプレトリー、アリストートルの教育意見にも見えたる如く、法律よりば道徳を以て世を治めんとせしが、羅馬人は寧ろ法律を以て立國の本とせり。世界の法律は蓋し羅馬より發達し來れり。

かくの如く、此時期には、家庭と國家とに於て、親と國の先輩とが教師となり、軍隊的宗教的及び法律的の教育を施し、以て強き愛國心ある公民即ち士族を作らんとしたり。かくして養成せられたる者が、即ち五千人の團結より起りて、遂に世界を一統するに至りたるなり。

第五節 共和政時代後半の教育 共和政時代の中頃に及びては、羅馬は漸々領地を擴げて諸國の文明に接し、希臘とも交通して次第に文學を起すべき必要を感じ、紀元前二百六十年、奴隸を解放せられしスプリウス、カルプゥリウスなるもの、學校を開きたる記録あり。而して二百三十三年には、リウヰウス、アンドロニコスなる者、ホーマーのオデッセイを拉丁語に翻譯せしを始めとし、漸々希臘文學は拉丁語に譯せられたるが、古風の羅馬人は、之を以て羅馬の國粹を失ひ、羅馬人を柔弱に導くものとして非常に攻撃し、百六十一年には、政府に於て希臘の學術に溺れ居る哲學者及び修辭家を羅馬より追放する決議を爲し、老カトー(二三四—一四九)の如き、其子に書を與へて、希臘人は價值なき柔弱の人民なり、此人民が其文學を吾等の間に擴ぐることをあらんか、すべてのものを腐敗せしむべし、余が此言は豫言者の言として之を信ぜよといひたるも、其百四十六年に、愈々希臘を滅ぼすや、希臘の學術教育は滔々として羅馬に入り來り、百年頃より此時期の末に及びては、却つて希臘の學術教育を歡迎するとなり、アゼンスより哲學者修辭家を羅馬に呼び迎へ、或は羅馬よりアゼンス、アレキザンドリヤ、又はローヰ島に留學するに至り、富豪の者は希臘の

哲學者修辭家を我家に聘し、僱くを名譽と誇り、知名の士にして拉丁語よりも能く希臘語を操り、拉丁文よりも能く希臘文を書くを以て得意とするに至れり。茲に至り、學校も立てられ、而して羅馬の子供は是迄の如く親が教育することなく、却つてアゼンヌ人に倣ひ、之を乳母や教僕の手に委ぬるに至れり。羅馬の詩人ホレウス(六五―八紀元前)が、征服せられたる希臘は、反對に其の荒き征服者を擒にしきと歌ひしも此様を言へるなり。之に依り、羅馬人の文明に進むべき性質は大に刺激せられ、舊羅馬風は轉じて新羅馬風となり、教育も亦其面目を一新せり。但し此教育の整頓せしは、次の帝政時代に懸るを以て、其委細は次節に説くべし。

此希臘の影響を受けて、舊羅馬風より新羅馬風に移り行く時の教育思想の好代表者と見るべきはシセロなり。シセロは紀元前百〇六年に生れき。門閥なりしかば、羅馬に於て此時の最も善き教育を受けたり。十六歳より雄辯術及び哲學を研究せり。程なく學問研究の爲め、希臘及び小亞細亞などに旅行し、ローツ島にて當時有名なりし修辭家アポロニウスに雄辯術を學び、一日其需めに應じ、希臘語にて演説しけるに、アポロニウス驚

嘆して、シセロよ、御身の技は實に巧妙に達せり、されど同時に余は希臘に唯一の名殘の榮譽として存せる此雄辯術が、御身の爲めに羅馬に持ち去らるゝを悲まざるを得ずと言へり。かくて羅馬に歸りて高官に上り、羅馬共和政府の議長となりて大に人民の信任を得、我國の父と呼ばれたりしも、其政敵アントニの刺客の爲めに暗殺されき。時に紀元前四十三年なりき。氏は自然と人事とにつきて精確なる知識を有し、正義仁愛の徳を有し、哲學者としても、政事家としても、雄辯家としても一家を爲し、同時に教育上の意見をも有し、其書きし文章は、後の帝政時代に至りて學校の教科書となれり。

氏は教師に對し切に公平ならんことを求め、罰の如きは決して其情の激せる儘に施すべからずとし、其兒童の天賦につきては頗る高き考を有せり。謂へらく、人の精神は神より直ちに傳へられたるものにて、誰しも少しく深く省みれば、自身に神の面影を見出すべく、此神の知識を有する所、即ち人間の他動物に異なる所にして、神はすべて知識道德の根原を吾等に與へたり、此本然の性を全うする職務これ教育に外ならずと。此故に教育は最も幼き時より始むべく、遊戯と交際とは兒童を

して高尚に且つ聰明にならしむるやうに仕向くべく、長じて少年となるに至れば、記憶力を練ること必要にして、其記憶すべき材料は、希臘羅馬の賢哲や文學者の作の最もよきものを取り來りて之を暗記せしめ、之を理解せざるにしても、其耳に賢哲の語を呟やかしむべく、更に長じて大人に近づくに至れば、其能力趣味に適したる學科を學ばしめ、或者は哲學に、或者は法律に、又或者は雄辯術に向はしむべく、殊に雄辯術は論理思想、哲學思想を有し、詩人の表出法を知り、悲劇家の語調と、名優の身振とを備ふるにあらずば、學び難きものなれば、能く生徒の人と爲りを見て之に就かしめざるべからずとし、理科につきては、羅馬人の特性を現はし、科學研究の際、祖國、父母、又は朋友が、今危急に瀕せりとの報知を得るも、猶星辰を教へ、宇宙の大きさを測るが如き人あるべきかと云ひて、之を重んぜざりき。氏は羅馬人の教育意見を最も明に云ひ現はして曰く、羅馬の兒童は、國の爲めになる如く教育せらるべく、従つて國家の性質を解し、又其祖先の風儀を知らざるべからず、我國家は其國民の精神技能及び理解力のあらゆる力を捧ぐべきことを要求す、こゝを以て其國民をして最大の才智と最高の徳義とを具して、以て國家に盡す道を知らしめざるべからずと。要するに其兒童の特質に應じ、其本然の性を發揮し、以て國家に忠實なる國民を作らんことを其主要なる思想とせり。

第六節 帝政時代の教育 共和政時代の後半、羅馬統一の事業略々成り、紀元前二十七年、共和政府の議長オクタヴィウス推されて帝となる。オーガスタス帝是なり。帝の世は恰もアゼンスのペリクルス時代と均しく、羅馬の全盛時代と言はれ、ヴァルジル、オウッポド、リウイの如き詩人、歴史家出で、セネカの如き哲學者も出で、初等中等高等の教育の制度も略々整ひたるが、之はアゼンスの影響を受けたるに出づ。此時に至りては、古代羅馬の教育法は一變し、アゼンス人に倣ひ、乳母に其子を育てしめ、其學校に通ふに至るや、奴隸をして之に伴はしめき。これアゼンスの教僕に倣へるなり。但し此奴隸は、アゼンスの教僕ほどの責任は有せず、其兒童の躰につきては、古代羅馬よりの風猶存し、母が主に之が責任を負へり。

初等學校に於ける教育は七歳を以て始まる。但し之は學校と言はんより寧ろ塾ともいふべきものにして、すべて私立なり。學科は読み書き及び算術の三つなり。讀み方に於ては、アルファベット及び綴を教へたる後、拉丁譯のオデッセイ、羅馬詩人の

平易なる詩及び羅馬法を讀ましむ。書き方に於ては希臘と均しく石版に石筆を以て書かしむ。算術は初めには指を以て數へしめ、後には暗算に慣れしめ、全く實用を主とせり。校内にありては、從順、丁寧、清潔及び師長に對する徳最も獎勵せられき。かくて十二歳に及ぶ。此時の教師はリテラトル(Literator)といひ、社會上の位置は頗る卑かりき。

十三歳より中學程度の學校に入る。之も亦私立なり。此時に及びては、拉丁語と共に希臘語も教へらる。拉丁語の讀み物としては、シセロ、ヴェルギルなどの著はししもの、希臘語の讀みものとしては、ホーマー、イソップなどの著はししものにして、多くは之を暗誦しき。讀書に加へて文法、作文、朗讀法、修辭學及び文學批評法の如きも教へられ、又地理、歴史も加へて教へられたり。歴史を重んぜしは羅馬の特色にして、之は愛國心養成には欠くべからざるものとせられき。希望者には、測量に資するが爲め、幾何學をも教へたり。此時の教師は、リテラトルス(Literatus)といひ、リテラトルよりは社會上の位置高く、中には高貴の家の家庭教師となれるもありき。十五歳或は十六歳にして童服を脱し、大人の衣服を着けて高等教育を受く。高等

教育として撰ぶ科目は、農業、軍事、政治、法律の四科にして、農業を學ばんとする者は農業の熟練家、軍事に志す者は或將軍を撰び、之に就きて實地的の研究を爲し、政治法律に志す者は、或修辭家若しくは法律家につき、之れと共に修辭學及び雄辯術を教ふる學校に入る。此學校にては、文章を書き、辯論を稽古し、文學や文學批評法を研究し、一層完全なる雄辯家とならんが爲めに、數學、哲學をも學び、又羅馬の歴史を研究せり。此學校が亦私立にして、其教師は之をレトル(Rhetor)と呼びしが、オクタス・タス帝より九代目のヴェスパシヤン帝の時、修辭學及び雄辯術教授の爲めに、一の官立専門學校を立て、クインチリヤンを以て之が校長兼教授とせり。此學校は四科の専門科の中、羅馬人が最も好んで修めし所は、政治、法律の二科にして、此二科を修むる者は、亦必ず修辭學、雄辯術を稽古せり。修辭、雄辯の二つは、政治家、法律家となるに欠くべからざるものにして、政治、法律の思想あり、修辭、雄辯の能ある人を、羅馬人は呼びて雄辯家(Orator)と呼び、雄辯家となるを其理想、從つて又教育上の理想とせり。羅馬は世界を一統せり、世界を一統しては、政治、法律を以て之を治めざるべからず、之に於て羅馬に於て最も切に要求せられし人は、政治、法律の事に明

なる人にして、而して其政治法律の事業に當るには、己が思想を筆に口に發表する修辭雄辯の技能を有せざるべからず。従つて又羅馬人は、修辭學雄辯術を修むるを畢生の願とし、是迄に受けたる初等中等の教育も、畢竟するに之が準備たるに過ぎざりし觀あり。之に加ふるに、修辭學雄辯術の如き言語文章に關する學問が羅馬に於て尊ばれたる一大理由あるは外にあらず。羅馬が他國を征服するや、直ちに之に拉丁語を語らしめ、拉丁文を書かしめざるべからず、言語文章の統一は、實に國家統一の基礎なればなり。従つて羅馬を經營せんとする者は、又言語文章の知識なかるべからず。既に共和政時代後半の勇將として、政治家雄辯家として、將た又文學家として、英名を歴史の上に止めたるシリアス、シニザ、シニザが陣中に矛を横たへながら拉丁文法を研究し、之に關する著述を爲し、之を始めとし、羅馬の政治社會に立つ者は、必然言語文章の知識を有せざるべからざりき。軍隊の力を以て、又政治法律の力を以て他國を征服したる上は、言語文章の力を以て、之を精神的に歸服せしむべき必要より、羅馬に於ては、言語文章の研究大に進み來り、此知識は羅馬の經營者に必要となり、従つて各人の必ず學ばざるべからざるものとなれり。拉丁

の文法が正しくして、其意義は十分精確に表はされ、拉丁文學として一個の特色を發揮し、近世に至りては古典として大に尊ばるゝに至りしもの、右の如くして之を研究し、之を教へたる結果なり。

羅馬の青年は、がゝる教育を全うせんが爲めに、羅馬にて足れりとせず、アゼンス、ロ
ーヅ、島、又はアレキザンドリヤに留學し、若しくは漫遊すること、前の共和政時代後半よりの風習にして、シセロ、ゾリアス、シーザーの如き之が先驅を爲し、帝政時代には此風一層盛となれり。

さて人間の生存競争の有様を見るに團體には大小種々の階級があるが競争に於ける最高級の單位は人種といふ團體で、人種と人種との間には唯強いものが勝ち弱いものが敗けるといふ外には何の規則もないから自分の屬する人種が弱くなつては他に如何に優れた點があつても種屬維持の見込はない。それ故實際教育するに當つては人種といふ概念を基として、人種の維持繁榮を目的とせねばならぬ。

(丘博士進化論講話)

羅馬 其二

第七節 希臘の影響 以上述べたる所より明なるが如く、帝政時代の教育は希臘の刺激を受けたるより起りたるものにて、其中等以上の教育には希臘人多く之に當り而して其教ふる事柄は亦希臘より傳來せしものなり。羅馬には殆んど國有の文學哲學科學なかりき。故に羅馬人が教育を起すに當りては、希臘に發達したるものを借り來り、之を材料としき。今其希臘の影響が羅馬の教育に及ぼしたる重なる者は之を二つに分つことを得べし。先きに希臘教育の末路に諸學派の勃興したる状態を述べたる所に、イソクラテスの修辭學派と、ストア學派、エピキュラス學派の如き哲學派の起りたることを言ひたりしが、羅馬に影響したるものも、此修辭學派と哲學派殊にストア學派とにして、此二派が羅馬の高等教育の中心となり、其修辭學派をクインチリヤンが代表し、哲學派をセネカ代表せり。此二派の人とともに其専門の學校を開き、就中修辭學派の學校は官立のもの立てらるゝに至れり。

第八節 修辭學派 修辭學派の希臘に起れるは、之を以て美的の修養を全うし、かねて各自交際の上に情誼の満足を得んとするにありしが、其羅馬に入るに及びては、羅馬人の理想とする雄辯家たるもの、必ず修めざるべからざる學科となり、羅馬人は之に依り己が世に立つ上の資格を全うせんとする實際的の必要より、大に此科を歓迎し、帝政時代には此科の學校次第に榮え、遂にヅエパシヤン帝の時、此科と雄辯術とを教ふべき官立の專門校を立て、クインチリヤンを以て之が校長兼教授とせり。クインチリヤンは正に此修辭學派の代表者と見るべし。

氏は紀元後四十二年、羅馬領西班牙のカラホルラに生る。當時の勝れたる人と同じく、氏も亦首府羅馬にて教育せられき。始めの間は法律に従事して大に成功せしが、二十六歳の時雄辯術の教師となる爲め此職を止めき。蓋し氏は此以前より雄辯家として大に名ありき。氏は政府より俸給を受けたる第一の人にして、雄辯術教授といふ稱號を受けぬ。後に及びては、ドミシヤン帝の大甥をも教へ、晩年に「辯論術の組織」を著はせり。此書は單に氏一己の意見を述べたるものと見るべからず。寧ろ此時代の羅馬教育の理想を描き出したるものと見るべし。此書は雄

辯術の如何なるものなるかを説明すると共に、如何にしてかゝる雄辯家を作るべきかを説きたるものにて、其雄辯家は即ち羅馬人が理想とせし所なり。氏は紀元後九十五年に死せり。

氏は羅馬人の理想とする雄辯家を作るには、其生れたる時より注意すべき事を言へり。乳母は學問はなくとも有徳にして且つ賢慮あるものを撰ばざるべからず。之れ幼兒に對する印象は永久消すべからざればなり。二度酒精を入れたる壺は永久其臭氣を脱せず、一度染めたる羊毛は二度白色とならんと難し。かくて此幼兒の言語を發するを得て拉丁語を習ひ始むるや、同時に希臘語を教へざるべからず。兒童は記憶力のよきものなれば、此時には務めて此力を練るべし。但し語學を以て兒童を苦しむるはよろしからず、兒童には學問を一つの遊戲と感ぜしめ、時々問を出して善く答へたる折には、之を賞讃して其知識を得たる樂みを心に感ぜしむべし。興味を感じて學習せしむる事は、殊に此時期の兒童に必要なり。棘刺は全く課すべからず。

今少しく長ずれば讀方と書方とを教ふべし。讀方に於てアルファベットを教ふるに

は其形を見しめたる後にすべし。空に始めより其音のみを知らしむるは不可なり。宜しく象牙にて文字を作り、之を取り之を見之を名ざししめ、何時とはなしに之を覚えしむべし。書方に於ては、よく其手の力を練らしめんことを目指し、其手本の文句は意味なき文句を以てすべからず。須らく道德的の意義を含めるものを以てすべし。

児童が其學習を始むべき七歳頃に至れば、之を公立學校に送り、公教師に付きて學ばしめざるべからず。家庭に於て私教師に教育を委ぬる時は、児童の道德を腐敗せしむ、児童を奢侈我儘になれしむ、餘りに小供を大事に育つる時は、却りて其心と體とを弱くす。之に反し公立學校に於ては、他人の教へらるゝを見て自からも學び、他人の賞罰せらるゝを見て自ら之に鑑み、又名譽を得んとの念に驅られて自ら徳に進む。而して又家庭に於て教授せられたる知識は能く練れ居らざるを以て、實際の生活に當りては之を活用することを得ずと云へども、公立學校にありては、他人の力重と相比較して之を練るが故に、自ら之を我が物として應用する力を得。同時に其精神も家庭に於ては妄想に流れ薄弱に陥り易きが、公立學校にては他人

と交際する故、自ら實際的となり、且其の品性堅固となる。要するに児童をして家庭にて我儘なる生活をなさしむるは、之を學校にて多くの人と交際せしむるに比すれば遙に放逸に流れ易し。

公立學校に入れて學ばしむべきものは、文法と修辭學との二科なり。文法は更に正しく話すことの術と詩人の詩を解釋することの二部に分る。修辭學に於ては其文法の規則の理論的研究を應用して、文を作り且話すことの練習をなさしむ。此の際語源を説明すること、且つ文章は正しく其の意義を了解して聲高く之を朗讀せしむること必要なり。

但し氏は児童をして單にかく文法上の研究の狭き範圍に止まらしめんとするにあらず、児童は文法と同時にあらゆるものを學ぶに適するものなれば、幾何學、音樂及哲學をも學ばしむべし。幾何學は心を練りて眞と偽とを區別し、依りて推論を助け、音樂は雄辯家となるには必要なる準備にして、調和の感情を修養し、比例に對する趣味を起さしめ、哲學は論理學、自然科學、及び道德學の三科を含むものにて、雄辯家に種々の考を興へ、彼に議論の秩序ある列に其の思想を整頓することの術を

教ふ。

斯の如くして此の見は初めて雄辯家となる。故に氏の云ふ雄辯家は、單に辯舌を弄する者にあらずして、あらゆる學科に通じ、堅固なる道德的品性を備へたる完全なる羅馬市民の謂なり。かゝる實踐的の堅固なる市民之實に氏が造らんと志し、ところにして、同時に羅馬人の理想とせし所なり。氏が官立雄辯學校を管理せし精神も此意見に基づきたるものにして、氏が教育の下に幾多有名の人出てたり。

世に名高き偉人傳を著はしたるブルターク(紀元後五〇—一三八)も亦此派に屬する人にして、ヴェスパシヤン帝より二代目のドミシヤン帝(八一年より九六年まで治世)の世に學校を開き哲學、文學、語學を教へたり。

氏が書きし教育意見に、兒童訓練論、婦人の心得及び文學教育論あり。氏はクインチリヤンと反し、家庭を以て大切なる教育の場所とし、人を爲る迄の教育は家庭にて爲すべく、其人と爲りて後外に出て始めて道德家や哲學者の講義を聞き、詩人の詩を習はしむべしと説き、婦人の心得に於ては、之と關し、大に婦人の家庭に於ける

位置を重く見、婦人は其子を乳母の手に委ねべからず、自ら之を養育すべき運命を荷へりとして、婦人が其二つの乳房を持てるは、即ち雙兒を生みし時の用意なりといひ、かく婦人に其子を教育すべき責を負はしむる所より、婦人も亦數學哲學を學ばざるべからずと云へり。但し理想の婦人としては、氏は、心の優しさに加ふるに、樂じき容貌、清らかなる言葉、しとやかなる身振、及び高き情感を有する人たるべしと云へり。「文學教育論」に於ては詩を以て教育の大切な學科とすべしとて、プレト

イよりは今一層嚴格なる注意を以て之が撰擇を爲すべしと云へり。是等の教育論を一貫せる氏の思想は、兒童を其内部の良心に依りて立つが如き有徳の人となすべしと云ふにあり。氏は常に繰り返して、實行と伴はざる理想は何等の價值もなきことを云ひ、若き者は早くより自治に慣れ、自ら其行爲を思考し、自身の良心の評議を取るべしとせり。氏が良心の光を覺し、之を刺戟し、其内部の力を確立せしむべしとて、精神は充たさるべき器にはあらずして、寧ろ熱せらるべき器なりと云へる如き、能く教育の要點を捉へたるものといふべし。蓋し氏の頃より羅馬人の公共生活が著るしく腐敗し來りたるより、之を家庭にて救ひ、又人心の

外部の標準に驅らるゝより之を内部に求めんとしたる反動もあり。第九節 ストア學派 修辭學派と共に羅馬に入りて羅馬に歡迎せられ、羅馬人の思想品性の上に一大感化を與へ、羅馬の名士名將さては帝王までも其中に網羅したりし哲學派をストア學派と爲す。此學派は嚴肅なる倫理觀を以て立ち、最も善く羅馬人の氣風に投じたり。此學派は此宇宙を支配する一大普遍理性のあることを其主張の大本とし、人も此理性を享けて生れ出でたるものなれば、此理性に従ひて生活すべし、言ひ換ふれば自然に従ひ自然に調和するやうに生活すべし、斯くて理性に従ひ、一切の快樂、一切の外界の出來事に動かされざる不動心(Apatheia)の境涯に入るを以て倫理の極致とせり。此點より此派は大に義務の念を重んじ來り、此義務の念に従ふ所より徳は生じ來るものにて、此徳は各人が理性に従ふ所の意志を固く持する所より生ず、我意志は決して他人の奪ふべからざるものにて、此意志を固くし、以て己れの主人公たることを得ば、天下一切のものゝ主人公となりて安心立命を得、所謂普遍理性と一致することを得とせり。斯くて此派は外界の名譽財産を度外に置き、生死を輕んずる所より、若し我理性を傷くるが如き場合には

自殺するを以て正當とし、其學徒中には己が意志の力を信する事の厚き所より、我と我が息の根を止めて自殺せしものもありき。而して又此學派は一大普遍理性の天地人間を支配することを信じ、義務の念を重んずる所より、大に博愛の徳を説くに至り、人種階級の如何に拘はらず、廣き人類社會といふ點に於て團結して、自然に従ふ生活を營むべしとせり。人格を重んずる念は此派に至りて稍々明となり、従つて法律の發達にも少からぬ影響を及ぼしたり。羅馬に於ける此學派の重なる人を、セネカ、エピクテートス及びマークス、オーレリウス帝と爲す。

セネカは紀元前二年羅馬領西班牙のエルドツに生れぬ。父は名高き雄辯家にして、深く氏の教育に注意し、早くより羅馬に連れ來りて學問せしめたり。氏は此處にて數學、文法、拉丁語、希臘語を學び、大に得る所ありしが、更に希臘、埃及に旅行し、歸りて法律に従事せしが大に成效しき。然るに不慮の嫌疑を受け、コルシカ島に流されぬ。此間氏は殆ど友とするものなく、唯天地自然を友として、哲學的の瞑想に耽り、大に其學問と徳行とを練りき。八年の後羅馬に呼び戻され、ニロ帝の傅となり、身を獻げて、一意其教育に盡し、いかにかはらず、此弟子の腐敗せる情欲を抑ふる

こと能はず、却りて官々の怨を買ひ、反逆に與せりとの讒言により、ニロ帝より死刑を宣告せられたり。此時氏は自若として顔色變ぜず、自から動脈を斷ち、ストア學徒の名譽に耻ぢざる死を遂げりた。時に紀元後六十五年なりき。氏の教育上の意見を書きたるものには、ルシリウスに與ふる書あり。中に聰明なる教育意見あり。

セネカの教育意見はストア學說に基す。謂らく普遍理性云ひ換ふれば神は我等の心の中にあり、しかも又我等には惡に傾く所の性質あり、嫉妬の如きは獨り女子の有する性質なるのみならず、男子にも又甚だ強し。教育の務は即ち此惡しき傾向を矯めて以て普遍理性の光を發せしむるにあり。此故に教師はよく兒童の個性を察し、兒童に對する言説と示例とを以て其心を清淨にし且高尚にする感化を及ぼさざるべからず。怒りにまかせて之を罰することなかれ、怒に乗ずれば罰の効力を失す、又餘り多く罰することなかれ、多く罰するも其効力を減ず。成るべくは言説よりも寧ろ示例を以て徳行を教へよ。教育の目的は言説によりてよりは寧ろ示例によりて早く達せらるるものなり。

教授に付きても又生徒をして有徳の人たらしむることに向けざるべからず、自然科学殊に幾何學天文學は有益の學科なり之れ兒童に天然自然を解して神を知り自然の秩序を悟らしむることを得ればなり。拉丁語希臘語の研究は必要なれども、餘り多くを學ばしむることなかれ、すべて多くの學科を一時に學ばしめんとするは唯之を淺薄に流れしむるのみなれば避くべきことなり、寧ろ狭き範圍に止めて充分に之を習熟せしむるを可とす、體操も其精神の發達を助くる範圍に於ては獎勵すべきも、體操にのみ耽らしむる時は心を空虚にす。すべて學問は學問の爲めに學ぶにあらずして生活の爲めに之を學ぶものなる事を忘るべからず。而してよく己れの思想を確實にせんとするには之を人に傳ふべし。教ふは學ぶの半ばなり。

氏は斯く着實の堅固なる教育意見を有し、之を以てニロ帝を教へ、かゝる意見を以て此時代の人を感化し、當時の風習に反し、博愛平等の精神より、奴隸に對しても尊敬を拂へり。氏はエピクテイトス及びマールクス、オーレリウス帝と共に、羅馬人の思想を高尚に且つ博大にするには大なる効績を遺せり。

エピクテリトスはニロ帝の時よりマルクス、オーレリウス帝の時に生存したる人にして、始は奴隸たりき。奴隸たりし時、其主人エパフロデイトス撻ちたりしに、氏は静に骨を折らざる様にと注意しぬ。然るに主人は之を以て己を嘲りたるものとなし、其責を二倍にしければ遂に足の骨を折りたり。此時氏は少しも怒る色なくして曰く、余はさきに御身に此事を注意せざりしかと。後自由市民となり、羅馬人のために其哲學を講ぜり。其説く所は一に天命に安んじ、天意に従ふにありて、天を怨みず人を咎めず、己が意志の力を練りて一切外界に動かされざるを主とし、忍耐すべく知れ、節約すべく知れといふ二事に重きを置きぬ。而して其一の神を信じ、すべての人はその神に對しては同等の位置にあることを主張するより、博大にして且つ深遠なる博愛を説けり。故に、一の哲學者と云はんより、寧ろ敬虔と熱心とに充てる道義の説教者たるの位置に立ち、マルクス、オーレリウス帝の朝に十分の高齡を以て歿せり。其死後其哲學的の思索を照らし、土製の「ランプ」が、非常の高價を以て争ひ買はれきといふ事實を見ても、如何に、其賢人として尙ばれしかを知るに足る。

マルクス、オーレリウス、アントニウス帝は、羅馬の最も賢明なる君主にして、紀元後百二十一年に生れ、百八十年に死せり。帝は一の普遍理性即ち神を信ずること最も深く神の人に對する注意は如何なる方向にも現はるゝのみならず、日常の瑣々たる行爲にも現はれ、すべて六合に瀕りて、自然の秩序言ひ換ふれば神の意志に従ふべきことを示す。而して又あらゆる者の變化、個々人の死の如き例を見れば、善を得て喜ぶに足らず、禍とて恐るべきものにあらざるを知るべく、すべて人は我が心の中にある神を知り、此神を崇拜し、此神よりのみ幸福を得んと求むべく、一切の外物は我等に何等の價値をも有せずと考へ、自己教育といふことに重きを置き、自身の意志を練り、絶えず自身の理性を研ぎ、人の最も有徳なるもの、最も賢明なるものならんと志せり。帝の著、瞑想録は即ち此工夫を書きしものなり。帝は此趣旨に依りて自分を教育し、其家庭の如きはあらゆる人の模範となり、又帝が人間の性情の同一なることを認めしより、羅馬人の上に無限にして且つ利他的の博愛の感化を與へたり。

第十節 帝王の教育獎勵 修辭哲學の二學派は次第に發達し、ドミシヤン帝より

は四代目、マールクス、オレリウス帝よりは先代に當るアントニウス、ピウス帝(二三八年より一六一年まで治世)帝は、各地の文法、修辭、雄辯及び哲學の教師に納税兵役の義務を免ずる特權を與へ、其特權を與ふる者を、地方の大中小に依り、大地方は十五人、中地方は十一人、小地方は六人と定め、其後グラシアン帝三七五年より三八三年まで治世に至りては、三百七十六年に、各屬國の文法及び修辭の教師に、首府同様、國家の費用を給して之を優待すべきことを命ぜり。

グラシアン帝の頃に及びては、高等教育の學科は、文法、修辭學、論理學、音樂、數學、幾何學及び天文學の七科を含み、完全なる教育を受くる者は、必ず此七科を修めざるべからざることとなれり。之は先きに希臘教育の所に述べしアレキザンドリヤの教育にて定めし所にして、アレキザンドリヤは、紀元前三十年に羅馬領となり、羅馬人は此地に漫遊し、留學し、大に此地文化の影響を受けたり。而して此七科は羅馬の滅ぶると共に中世紀に傳はりて、中世紀の必修學科となれり。

第十一節 人類思想の發達 前々節にストア學派は、其學說の上より、人類といふ思想を喚び起し、博愛の徳を説くに至りしことを述べたるが、之は一面當時の社會

の進歩よりも來れり。羅馬は世界を統一し、殆んど己れに敵するもの無かりしより、希臘に於て都府的國家を最上の社會組織とし、正義を以て道德の最高のものとせしとは違ひ、世界的の考に進み來り、人類共通の道德を認むるに至れり。かく世界的の考に進み、人類共通の道德を認むるに至らば、教育も亦從つて變せざるべからず。但し羅馬に於て、此思想が教育に變動を與へんとする頃には、羅馬は既に分裂と滅亡との運に向ひたりし時にして、此世界的博愛的の主義を唱へ來りて、教育上の大變革を促し、ものは基督教なり。

基督教は羅馬帝オクタスの代に羅馬領の一なるユデヤに生れたるエスキリストの唱へ始めたる所、此教直ちに羅馬に入り來り、傳ふる所に依れば、ストア學派のセネカも之に感化せられきといへど、之は明ならず。始め三百年間は、羅馬に行はれず、却つて非常なる迫害を受けしが、其三百二十四年、コンスタンチン帝の代に國教となりて、漸次教育に影響し、又是よりさき、アレキザンドリヤにも傳はり、此所にては迫害も受けず、基督教徒は種々の教育事業を營みたるが、此時は既に羅馬の末路なりき。

基督教が羅馬の教育及び後世の教育に如何なる變動を與ふるに至りたるかは章を改めて説くべし。

羅馬 其三

第十二節 羅馬帝國の滅亡 羅馬帝國は、紀元後三百九十七年に東西の二つに分れ、其西羅馬帝國即ち從來の羅馬帝國は、四百七十六年に獨逸種族に滅ぼされ、此西羅馬帝國の文明及び教育は、基督教と共に獨逸種族に傳はりて中世紀の歴史を爲し、今の歐洲の文明及び教育を開く基を爲せり。東羅馬帝國は、コンスタンチノブルに都し、千四百五十三年、土耳其人の爲めに滅ぼさるゝまで存立し、今日の文明に對しては、此東の方は大に希臘化したるより、古代の文明を保存して之を中世の終、近世の明け始めに傳へ、文藝復興の運動を刺激せり。而して又此東の方は東方に僻在せしを以て、中世紀に其影響を及ぼさざりしにはあらざるも、主としては土耳其人、亞刺比亞人、露西亞人を教育したり。西羅馬帝國が獨逸種族を教育せし如く、東羅馬帝國はスラヴ人及び東方人を教育したり。露西亞今日の開化又其宗教の如きは、此東羅馬帝國より來りしものなり。

西羅馬滅亡の原因は一にして足らず、世界を統一して後には却つて其統一策が立

たざるに至りしこと、屬邦多くなりて其屬邦人の入り來り、其屬邦人の血も混じて羅馬人の特質の次第に失はれたること、階級の争の絶えざりしこと、屬邦の貢物に依りて國富み、從つて奢侈となり、道德腐敗せしこと、租税徴收の法立たず經濟紊亂せしこと、帝都二つに分れて權力の分離を來し、ことなど、其重なるものなるが、其教育の統一付がず、之が振興に力を盡さざりしこと、亦其一大原因たり。

西羅馬帝國は斯くして滅びしも、其文明と教育とは國と共に滅びしにあらず、そが今の歐洲人の先祖たる獨逸種族に傳はりて之を感化し、遂に歐洲今日の文明と教育とを生ずるに至りしは、中世紀より近世に通じての教育史上の事實につきて十分之を見ることを得べく、一例を擧ぐれば、今日歐米諸國の中等教育高等教育には自然科学や近世語學が大に重ぜられ來りたるに拘はらず、拉丁語は猶重要なる學科とせられ、恰も我國に於ける漢學の如き位置を有せり。蓋し羅馬の文明と教育とは固有のものにあらず、希臘の文明と教育とを借り來りて、所謂拉丁文明を開きたるが、此拉丁文明を生ずるに至りて、希臘の文明と教育とは一種實踐的方面に其應用を擴げたるものと見らるべし。羅馬ありて希臘の文

明と教育とは一層の光輝を放てり。希臘はそれ自身の文明と教育とにて既に世界史の發達の上に貢獻せる所少からざれど、之が羅馬に取り入れられ、羅馬に於て一種拉丁風の彩色を與へらるゝに至りて、歴史發達の上に一層の貢獻を爲したり。羅馬は希臘に發達したる文明と教育とを移し植ゑて更に之を西歐に傳ふる媒介を爲し、同時に世界を統一し、之に拉丁文明を布くことに依りて、世界の文明と教育とを發達せしむる上に最も有力なる役目を爲せり。羅馬が希臘古代の文明と教育とを傳へて更に之を西歐に媒介することなかりしならんには、恐らく歐米今日の文明と教育とは見るべからざりしならむ。

第十三節 羅馬の教育に對する批評 羅馬人が教育の目的として作らんとしたるは、体力強く、政治法律の思想あり、修辭雄辯の術に長け、而して強固なる意力を有して世界統一の事業を爲し遂ぐる所の人なり。故に希臘人の教育理想が美的と言はるゝに對し、羅馬人の教育理想は實踐的 (Practical) と謂はれ、又希臘人の教育理想が理想的なるに對し、之は現實的 (Realistic) と謂はる。羅馬人は他くまで實用一點張りなり、希臘の理想的なる文學哲學が羅馬に入るに及び、其文學は之を政治上

の用に供する修辭雄辯の材料となり、其哲學は殆んど道德法律を説く方便となりたるを見ても、其實踐的現實的の傾向を見るを得べし。希臘人は眞善美の理想に到達せんとせり、羅馬人は殆んど善の理想をのみ望み、之に達するが爲めには道德のみに依らず、助くるに法律を以てせり、これ羅馬人が世界を統一する所の實踐的國民となりたる所以にして、政治法律に於て模範を後世に示し、又國家經營の必要上より言語の研究に骨折りて、正確なる文法及び文章を示したる所以なり、而して實用とは稍々縁遠き科學哲學の發達につきては左したる貢獻を爲さざりし所以なり。羅馬人の理想は實踐的なるを以て、其實踐的の目的とする世界統一の事業を爲すや、同時に羅馬は滅びたり。羅馬人は主として善に達する意力を練りて、眞を目的とする知と、美を目的とする情とを練らず、従つて羅馬の國家は意力的の發展は遂げたるも、知力的感情的の發展は爲し得ざりき。羅馬人教育の目的は之を希臘人に比すれば、遙に實際の一面に偏したりといふべし。轉じて之を社會的方面より見れば、希臘人が小さき都府的の國家を立て行くが如き國民を作らんとしたるとは違ひ、世界を統一し、世界的活動を爲すが如き國民を作らんとしたり。し

かもこれ希臘より稍々見解の廣くなりしといふまでにて、猶羅馬の國家に適し、羅馬の國家を盛んならしむる如き國民を作らんとしたり。即ち猶國家主義に限られたるを免れず。世界主義の教育は未だ羅馬に起らず、國家以上に人類一致の情誼を認めて、四海を兄弟と見、渾身博愛に滿つるが如き人を作らんとする教育理想は、ストイシズムの一派にほの見えたるも、一般の羅馬人の教育理想の中には猶入り得ざりき。

第二に之を教育方法の上より見るに、羅馬人は實踐的の國民なりしだけ、教育法につきても亦極めて實際的方法を取れり。即ち共和政時代に於て、父母は其子の教育を負担して之を實地に役に立つやうに教へ、殊に父は之を伴ひて國家の組織を實地に觀察せしむるまでの注意を爲せり。帝政時代となるに及び、學校の起るに及びても、算術の如き、すべて之を實際的に教へ、又最も實際に役に立つ修辭雄辯、農業、軍事、政治、法律の如き科に重きを置きて教へ、以て堅實なる拉丁文明を後世に遺したる効績は偉とすべし。而して其訓練の上には、最も嚴格なる方法を取り、概は之を訓練の大切なる道具とし、言説よりは寧ろ示例を以て兒童の品性を練

らしめんとせしは儘に教育の要點を櫻めり。しかも能く兒童の心理の發達を顧み、之に應じて教授訓練を施し行く如きは羅馬人の能くせざりし所なり。第三に教育學思想の發達より見れば、羅馬人は左したる貢獻を爲さざりき。コムペーレ此理由を説明しく曰く、羅馬人は決して己が利害を感ぜざる如き學科或は單に推理を主とする問題には興味を有せざりき。之が例として、羅馬人は法律の如き實際的の學科を大に重んぜしに徴すべし。今教育學は、或意味に於ては實際的科學なりとは言へ、人間の性質に關する知識、人間の運命につきての理論的概念の上に其原則を立てざるべからざるを以て、かゝる問題は、羅馬人には殆んど興味なかりき。シセロすら、ゾレトを譯するに其思想には注意せず、唯其文章の流麗なる點にのみ注意しきと。かくの如き理由にて、羅馬には十分に教育學思想と稱すべきものなく、之ありと求むれば、セチカのアストア學說を基とせる教育學說、及びクインチリヤンの雄辯家養成論を擧ぐる外なし。此二説を見ても、羅馬人の教育學思想が如何に實踐的なるかを知るべし。第四に之を教育制度につきて見れば、羅馬には、官立學校は、雄辯學校を除きては設

けられず、主に家庭と私塾とにて教育を施しき。羅馬人に取りては、唯早く世に立つ人を作らんとし、學校に於て十分長き年月の間、理想的の教育を施すが如きは希はざりし所、即ち家庭と私塾とにて教育すれば足れりとしたり。此點に於て、其長所を言へば、家庭教育の行き届きて母が殊に教育に骨折りたる如き、或は社會と學校との關係甚だ親密にして、社會も一の教育を爲す實地的の場所と考へられたる如き、稱するに足るも、其短所を言へば、私塾の教育が概して不規律に流れて公共的精神の養成に欠くる所ありしを見る。クインチリヤンが、公立學校の教育の長所を説きたるは、一は此時弊に反抗したるものなり。而して猶其教育制度の間に統一なかりしことも其欠點の一に數ふべし。帝政時代に至り、切りに教育上の法令を下すに至りたるは、此必要に迫られたるものなり。猶又羅馬に於て、女子の地位が重んぜられたるに拘はらず、其教育は主として家庭に於てし、特別に女子の爲めに教育場を設くることは爲さざりき。

羅馬の治世に羅馬領のユデヤに起りて、遂に羅馬の國教となりたる基督教の教育につきては、批評すべきこと少からざれど、之は前に言ひし如く章を改めて其教育

發達の事實を述べたる上で批評を試むることゝすべし。

第三章 基督教と教育

第一節 基督教と教育 基督教は、前に言へる如く羅馬帝オクタウスの代に、其領土の一なるユデヤに起りたるものなるが、此教諸方に廣がり、羅馬に於てはコンスタンチン帝の時に國教となり、西羅馬の滅ぶると共に、中世紀に於て今の歐洲に入りて歐洲人を感化し、此時代の教育をば殆んど其奴隸とし、爾來今日に及ぶまで、此教義は深く歐洲人を感化し、歐洲の倫理若しくは教育の如きは、此教義を離れては、解釋すべからざる程の偉大なる感化を與へたり。歐洲今日の開化は、希臘羅馬の文明と、基督教の教義と、及び近世歐洲に發達したる自然科學との三要素相結合して成れりと言はれ、従つて教育も亦此三要素を以て今日の發達を成せるものなるが、既に其第一の要素の起りは説きたれば、此章に於て、第二の要素の起りを説くべし。中世紀の教育は、此第一第二の要素を結合し、咀嚼せし時代にして、近世に至り、第三の要素起りて更に教育を振ひ興し、以て今日あるに至らしめたり。

第二節 ユデヤ人の特性 基督を知り基督教を理解せんには、先づユデヤ人の特

質を知らざるべからず。ユダヤ人はセミチック種族の一にして、始めは遊牧を事とし、此人民の父と言はるゝアブラハムは、紀元前凡そ二千年の頃、メソポタミアの平原より、約束の地、キナジにさまよひたりしが、タラモト(紀元前凡そ一〇八六—一〇二六)の頃、モシ(紀元前凡そ一〇一五—九七五)の頃には、バリエスタインを占領し、ジゼルサレムを首府として、一時大に勢力を振ひしが、紀元前五百八十六年、バビロンに併せられ、其後又バベルシヤ人マゼドニヤ人に攻められ、遂に紀元前六十三年、羅馬の屬國となり、紀元後七十年に及び、ジゼルサレムは破壊せられ、是より散じて亡國の民となれり。此人民非常に宗教心強く、惟一神を信じ、自ら選民と稱し、神の特別の恩寵を受くと思惟し、其政體もセネクラシムと呼ぶ祭政一致にして、士師が神の宣託を受け、之に従つて政を施せり。此人民の信仰即ちモテヤ教と稱せらるゝものにして、舊約全書に見ゆる所なり。此人民は、かく宗教心に深きと共に、亦教育に深き注意を爲し、小供を以て神の賜とし、小供を能く教育して神の子たるに愧ぢざらしむるは、これ神に對する大切なる義務なりと考へて、幼時より宗教的信仰、宗教的儀式はもとより、読み書きの初歩、ユダヤの法律及び歴史を教へたり。かくて初の間は學校

は無かりしが、羅馬の屬國となりて國民の統一殆んど失はれんとする紀元後六十四年、ラビト即ち法教師は、初等教育、高等教育の私塾を起し、其私塾はジゼルサレムはもとより、アレキザンドリヤ、バビロンなどにも散在しき。基督はかく宗教的信仰に教育的熱心とに厚き國民の間に、其國家が羅馬の屬國となりて其主權を失へる時代に生れたり。基督の性格に、堅忍不拔、一種悽愴の氣象を有し、其面影を止むる新約全書を通覽するも、寛宏和平、惻然として笑ふ趣あるを見出さざるは、蓋しユダヤ人一般の性格を受けたるなり。第三節 基督の生れ 第三節 基督の生れ 紀元前四年、ユダヤの二村落ベスレヘムに生れ、ナザレに天を爲れり。父をヨセフ母をマリヤといへり。此二人の間に許嫁はありしも、未だ其家を爲さざる前に基督は生れたり。ヨセフは當時大工なりしも、其血統はダウダ王より出でたり。極めて謹直の人にて、母マリヤは又溫和にして敬虔の念に富みき。家貧しく、家庭にて當時の習はしの教育を受けたるのみにて家業を見習へり。ユダヤの習慣として、其國祭には、國民皆首府ジゼルサレムの宮殿に詣づる例なりしかば、基督も亦毎年父母に連れられて此首府に赴き、大に知見を廣めた

り。年十二の時、此國祭に行き、歸りに基督見えず、父母は狂氣の如くなりて捜すと三日にして彼が殿堂の中に、多くの僧侶と宗教上の問答を爲して之を困らしめ居るを見、引き離して家に歸れり。以て其の幼時より宗教的天才の人たる傾向ありしを見るべし。かくて三十歳までは家に在りて家業を助けしが、三十歳の時豫言者ヨハンの洗禮を受け、是より態度一變し、自ら神の子と稱し、奇跡を行ひ、布教に従事せり。一方には熱心なる信者を得しも、他方にはサドカイ人パリサイ人の如き在來の宗教に固執する者ありて之を嫉み、布教なく、に困難な多き。しかも基督の神に對する信仰は益々堅く、老若男女を感化し、殊に其弟子を薰陶せり。弟子多くは漁夫之を化して人を漁る者とせり。基督の教訓は、其相手を最も濃かなる同情を以て醉はしめ、恰も牧童を離れてさまよひたる羊が、其主を見出したらんが如くに慕はしめき。彼は其相手を見て法を説き、其子弟に諭じたることは、すべて宗教上の實踐し易き事柄にして、之を權威ある者の如く、十分の力を以て教へぬ。之と同時に彼は實踐躬行、自ら之が模範を示しぬ。而して其

懲劣人を救ひ世を思ふ熱心溢れ、他方には又他派の妨害あるや、之に山上に十二人の使徒を選び、之に其教義を含めて布教に従事せしめき。此十二人の使徒、實に身命を賭して、羅馬其他の各地に此教義を擴げたり。此十二人の使徒、實に身命を賭して、羅馬其他の各地に此教義を擴げたり。かくて布教の三年目に、基督はシエルサレムに行きて教を説きしが、遂に他派の者の爲めに左じたる口實もなく訴へられ、春猶寒く悲風慘憺たる日、二人の強盜の間に挟まれ、ユデヤにありて最も恥づべき磔刑に處せられたり。磔刑に處せらるゝ際、基督は、父よ彼等を許せ、其爲す所を知らざるが故なりと言ひ却りて、神の許に行くを樂む者の如く、泰然として死に就けり。これ實に羅馬のチベリウス帝の十五年なりき。基督の説きたる所、ユデヤ在來の宗教思想と左程異なりたるにあらず、寧ろ其精神を取り、之を一層高尚なるものとせしものなれど、其真意當時の人に能く理解せられず、又一には其勢力を妬まるゝ所より、遂に此最後を遂ぐるに至りぬ。豫言者の爲めに記念碑を立つる者の祖先は、其豫言者を殺したるものなり。偉人の心事往々當時に解せられず、遂に世の爲め道の爲めに犠牲となる例少からず。基督は即ち其例の最も顯著なるものなり。

獨乙の教育史家シムムト、基督を評して曰く、言葉に於ても行に於ても、亦其一生涯の生活に於ても、基督は儘に人類の教育者といふべし。神は一の精靈にして其神を崇拜するものは須らく精神より之を崇拜せざるべからずといふ知見、神は全く人に宿り、人の最も真なる又最も神々しき者といふ真理、及び汝は須らく汝の誠心を以て、汝の心のすべてを捧げて、汝の主なる神を愛し、次に汝自身の如く、汝の隣人をも愛すべしといふ義務、凡そかゝる高尚なる知見、確實なる真理、神々しき義務を説きたる者は基督なり。此教義は人類の事業に横はりて、人類の務を實施せしむる上に、何時までも消すべからざる絶対の真理なり。而して基督自身の人物に於て、此真理が如何なる方向に向ひ如何なる事業を爲し、如何なる形を取るべきかの完全なる實例を示されたりと。『基督の遺言』(註) 聖書に於て、神の御心(註)の御心(註)が斯くの如く己が身命を抛ちて説きたる教は、基督自らが書を遺したるものはあらず、其弟子等が目撃耳聞せし所を書き記したる新約全書に就きて之を尋ぬる外あらず。新約全書に就きて見るに、基督自身の説きし所と、其使徒等が基督を理想化し、之に多少の我見を加へたる所と、混雜して、明に區別すべからずといふと、先

づ新約全書に見ゆる全体を通じて、之を基督教と解すべし。基督教が希臘の哲學と衝突するに至り、教會の長老等は、神學を組織し、三位一體説の如きを唱へ出し、之を以て基督教の本義の如く考ふるに至りたるも、しかも基督の面影を寫せる新約全書を見れば、基督は人を救はんとする熱誠に満ち、理に訴へて之を説きたりと言はんより、寧ろ己が感想を露出し、情に訴へて之を説きたる趣あり、之に其根本思想を見るべきものを指摘すべし。

基督教義の第一、エホヴァの一神を本とし、此神を恐れ、此神を敬し、此神を愛するにあり。神は天地を作り、人間を導き、人間に幸を與ふ。凡そ此世一切の事、神の配劑に成る。各人類須らく全幅の精神を捧げて其父たる神を敬愛せざるべからず。神と人との關係は、親と子との關係なり。従うて己が精神を露出して神に依らざるべからず。一切の利欲一切の妄念を脱し、全然精神のみとなりて、天に於ける汝の父が完全なる如く、完全ならんと力むべし、といふにあり。これ正さしく當時の羅馬などに於て、多神を拜し、或は偶像を崇拜し、己が利益心あり神の恵を乞ひたるに比すれば、一種高尚なる教を示したるものなり。而して基督は自ら神の子と稱

七、子が天父に對する信念力行を實際に示したり。

基督教義の第二は罪といふ觀念なり。人の祖アダムイヴ樂園の無花果を手折りしより其罪すべての人類に傳はれり。人類には原罪あり。悔い改むるにあらずは新らしき人となるべからず。悔い改めよ、天國は近づけり。天國に入らんには悔い改めざるべからず。此現在の利欲に迷ひ易く我に執着し易き状態を脱して、理想の我とならざるべからずといふにあり。これ亦當時羅馬人などが現實の我と理想の我との懸隔を意識せず、唯客觀界の事に吞まれて主觀界を反省せず、淫々と其日を送りたるに對し、深く其自覺心を刺激し、高尚なる理想を追ひて勇猛精進すべき堅固なる道心を振ひ起すべき教を示したる者と見るべし。而て基督自らは此人類に傳はれる罪を代りて償はんとして身を殺したる救世主と見做さる。基督教義の第三は博愛といふ精神なり。神を敬愛するといふ、己れ獨りにてすべからず、すべての人皆神の意に依りて作られたるものなれば、此神の意に依りて生ぜる一切の人類は、互に相引援し、四海同胞各人一となりて以て神に事へざるべからず。すべての人類、互に愛を以て結び、唯一の神を奉じ、以て天國に赴かざるべ

からず。純潔なる博愛の情を以て、一となりて以て、相共に清淨圓滿なる天國に赴かざるべからず。汝自身の如く汝の隣人をも愛すべし。汝の欲する所は之を人に施せ、人若し汝の右の頬を打たば、亦外の頬を廻らして之を向けよ。愚は悟し、弱は扶け、長は幼をいたはり、男は女を扶け、各人一體となりて以て天父の意に添はざるべからずといふにあり。これ亦當時にありて、個人の利害心強く、目にて目を償ひ、齒にて齒を償ひ、人は人に、國は國に、己を立て人を擠ることに急なりしに當り、此利他的の同情を鼓吹せしは、慥に一種博大の教義なりき。而して基督は實に渾身此博愛の情に満ちたりし人にて、此博愛を以て世界を繫ぐべき精神は、歐洲中世紀の歴史に實現せられ、神意を代表する羅馬法皇の下に、各國の君主も跪づかしめて、一時宗教的世界、宗教的國家を組織せしめたり。教育上にありては、希臘羅馬にて爲し、如く、狹隘なる國家の民を作ることより一轉して、廣く人類といふ點に着眼して教育せざるべからずといふ見解を取らしむるに至りたり。教育上の個人主義は、實に基督の教義に出づ。

基督教義の第四は、自由平等の觀念なり。人類は皆均しく神の支配の下に立つも

のにして、其間に上下貴賤の別あるべからず、神の子といふ點に於ては、萬人皆同等の權利あり。男女に依りて權利異なるべからず、貧富貴賤に依りて亦權利異なるべからず。夫として妻を虐げ、親として子を苦め、君として其民を苦むべからず。すべて各人には皆それの自由あり、人此土に住して其身を寄せ、其衣食を得、それの國家社會に屬する以上は、其身體は幾何かの制限を受くべきも、其精神に至りては全く自由にして、獨り神の支配に屬すべきものなり。人は一個人として皆一個人たる品位人格あり、皆神を知り、神を見るべき心あり、此人格、此心は、全く己のものにして神の支配を受くる外、天下一切のものに枉げらるべきものにあらずといふにあり。此教義、又當時にありて頗る注目すべき價值を舍めぬ。當時の社會にありては、女子は、男子と同等の權利を有せず爲めに、一夫多妻の陋習行はれ、國家にはそれの階級ありて、其下等社會の者の如きは殆んど一人格として見らるゝことなく、暴君は恣に民の膏血を絞り、富者は任意に貧者を苦めき。此時に當り、基督、結婚の神聖を唱へて、一夫一婦の大義を唱道し、人々の自由を説きて、其人格の重んずべきことを示せり。之に依り、婦人の位置大に高まりて、家庭は清く且ぬ

暖となり、而して人々己れの自由を重んじ己れの心を清くして神を見んと、の念を起すに至り、家庭の情愛、個人獨立の念初めて明となるに至れり。教育上の個人主義は、亦基督の教義に出づ。基督の教義の第五は、永久生活の思想なり。人は肉體は死すとも精神は長へに死せずして神の審判を受く。此故に、人は現世にある間、務めて己れを修めて以て神の許に行く日、神の嘉納を受けざるべからず。現世にありては、徳あるもの必ずしも福あらず、罪を犯せる者必ずしも苛責を受けず、所謂福徳一致せざるも、神は能く之を照覽す。人一點の疚しき所なくば永久に其精神の安慰を得、永久に神の恵を受くといふにあり。基督自らは、此永久生活に入るを、天國に行くとも、又父の許に行くとも言へり。此思想亦當時の社會に於て現世主義を取り、眼界を現世に限り、浮々と其日を過したるに對し、此現世は來世に入る力行修養の場所にして、人生は更に來世に於て完全なる生活に入らざるべからずと唱へて、人を上へへと精進し、飽くまでも道に進む勇氣を起す傾を取らしむる本となれり。要するに、基督の教は、一の義と愛とに滿てる人格的の神を信じ、之を父と見、一切の

人類は、亦義と愛とを以て結ばりて、子といふ關係にて父に對すべしといふにあり。此宇宙人生を、義と愛との世界と見るにあり。基督は是等の教を説くに、恰も權威ある者の如く説き、我が來れるは地に泰平を出さんが爲めにあらず、刃を出さんが爲めに來れりと言へる如き内には同情を包みながら、革命的の慷慨激越の調を以て之を説けり。

第四節 此教義と教育思想の變動 此教義が教育思想の上に與ふる變動は、上に述べたる所に依りて略々推察するを得べし。即ち從來の教育は、唯國民を作るといふことを主眼としたりしに、今は世界の民を作るべきこととなり、從來は宗教を教育に入れざるにはあらざるも、之れは唯教育の一方便としたりしに、今は全く宗教を根本とし、宗教的人を作るべきこととなり、從來の道德思想は、先づ義に止まりて仁の念に進むこと能はざりしが、今は博愛を其根本とすべきこととなり、從來は婦人又は下等社會の者は教育の惠を受くること能はざりしが、今は平等に之を施すべきこととなり、從來は精神の自由、個人の獨立を重んずる念割合に薄かりしが、今は精神の獨立を尊ぶこととなり、從來は唯現世を眼中に置きて其身を處し

たりしもの、今は來世を慕ひて其德行を積むべきこととなり、而して基督は全人類を代表し、自ら身を殺して其罪を贖ひたるを以て、身を殺して仁を爲したるもの、最大模範なり、困厄艱難敢て辭せず、信仰堅固なりしもの、最大標本なり、個人の獨立を尊びて、誠心より神を愛し人を愛せしもの、最もよき實例なりといふこととなり、基督は廣く人類の教育者たると共に、又教育界に於ける理想の人となり、其經典新約全書は、道德の標準たるに至れり。故に基督教起りてより、教育史の面目は殆んど一變せり。但し此變動は一時に來りたるにあらず、漸を以て來りしものなることは、今後述べる所にて明なるべし。

第五節 基督教羅馬に入る 基督教は今言へる如く教育思想の變動を促す教義を含みしといへども、其初めの間は布教に忙はしく、教育に關係する餘裕なかりき。其初めにありて、基督が派遣せし使徒等は、先づユダヤ人を感化し、希臘其他東方諸國に及び、終に羅馬に入れり。羅馬は當時世界を統一し居りしを以て、基督教徒は、羅馬に其教を擴ぐるは、即ち之を世界に擴ぐる所以なりと信じ、力を盡して之が傳道を計れり。然るに基督教の説く所、羅馬在來の風俗習慣に反するものあるを以

て、初めにネロ帝之が迫害を試み、トラジアン及びアリクス、オリリウス帝の如き、は賢明なる君主なりしに拘はらず、國民の信仰に反するの故を以て、寧ろ之を禁止する方針を取り、デノ、オクレシヤン及びマキシミヤン帝共に三世紀末の君の如きは、最も基督教を惡み、パトリアルを焼き、教會を破壊し、其教徒の位置と名譽とを奪ひ、時には其生命を危くし、迫害に次ぐは迫害を以てせり。言はば、此等諸帝の如きも、されば此時基督教徒は、世間を教育すること能はず、主として家庭にありて力を其兒女の教育に注げり。彼等は其兒女の知力の覺むるや、直ちに神の名、救世主の名を教ふ。彼等は基督の言行と使徒の傳記とに依りて、其兒女を宗教に導かんを力む。其稍長ずるに及び、父母は宗教の教義と人間の義務とに關し、パトリアル中より必要なる言葉を書き取らしむるを、日々の神聖なる務、又愉快なる事業とせしむ。パトリアルは常に爐邊の友にして、其兒女の唯一の教科書なり。讚美歌は、兒女が其膝に這ひ上る頃より、口ずさみにて教へらる。讚美歌と音樂とは、此時より敬虔の感情を以て兒女の心に印象じ、パトリアルの知識と信仰とを以て、兒女の心を練り上げたり。蓋し其目的とする所、兒女をして異教徒の汚風は染まじめず、専ら之を彼

等が健全なびと信ずる家庭にて教育し、其結果少しも世の卑賤なる快樂を知らず、唯清淨なる家庭の快樂を解じ、異日教會の熱心なる働手たらしめんとするにありき。其教育たる、知力を宗教の奴隸とし、人の心の發達如何に注目せざりし缺點は、あがどの如き、其性格の堅固なるは其長所といふべく、而して、又是等教徒間結婚の神聖にして、婦人の淑徳の甚だ高かりしは、異教徒といへども、歎稱せし程なりき。かくて四世紀の始めに及びしが、基督教徒の熱心遂に勝利を得、コンスタンチン帝軍にありて、空に十字架の輝きて、其軍を導くを見て、基督教徒となり、終に三百二十四年を以て、基督教を國教と爲し、國費を以て、さきに破壊せる教會を起し、或は新に教會を建て、日曜日を安息日と定め、殊に新市府コンスタンチノポリスを以て基督教の町とし、教會に附屬して、信徒豫備校(Catechumen Schools)を立てしむるに至れり。此學校の目的は、教會に導き入るゝか、又は洗禮を受けしむる爲めに、異教徒に基督教の教義を教ふるにありて、其教師には教會に關係せる僧侶之に當れり。此學校の組織は、初め二組とせしが、後には其生徒の年齢と能力とに應じ四組とせり。教ふる所は、専ら基督教の根本教義にして、生徒は初めは大人なりしが、後には小供を

も入れ、読み書きをも教ふるに至れり。が、この學校の設立に盡力したるを、クリソストム及びパジルの二人と爲す。クリソストム(三四七―四〇七)はコンスタンチノープルの僧正となり、教會の教育事業に盡力せり。平生の宗教的教授は學校の主なる事業たるべく、兒童を基督の教に従はしむるは、人間の最も價值ある事業なりとし、其教育を全うするには、親と教師とが協力して、基督教徒たる模範を示すべしと唱へたり。パジル(三二九―三七九)は、多くの孤兒院及び貧民救濟院の創立者にして、バイブルを學校の教科書とし、兒童の猶幼少なる間に、十分善良なる習慣と、正しき教を與ふべしとし、教會歌をも定めたり。

第六節 アレキザンドリヤに於ける基督教 羅馬の本土には、右言へる如くして基督教は擴がり、教育に關係するに至りしが、其領地の一なるアレキザンドリヤに於ては、基督教は容易に其勢力を扶植することを得たり。此地はさきに希臘教育の末路の所に述べし如く、希臘の學術教育を保存して、之を羅馬に傳へたる所にして、文化最も進み、有識の士多く、此地に集まれり。其基督教此地に入るや、此地の人の

思想進歩し、且つ自由になり居りしを以て、羅馬の本土に於けるが如き迫害を受けず、却りて此地の異教徒を感化するが爲めに、問答學校(Catechetical School)建てらるゝに至れり。其初めに此學校を建てしは、パンテヌスにして、設立は紀元後百八十一年にあり。此學校にては、問答教師と呼ぶ教會の教師が、問答法を用ひて、極めて簡易なる基督教の根本教義を教へしが、此地は有識者の集會地なりしを以て、後には自ら之を哲學の理論に合ひて説明するの必要を感じ、次第に基督教を中心とし、此地にありし哲學、修辭學、文法、幾何學の如きを結び付けて之を教ふるに至り、程度自ら高尚となり、基督教の牧師をも養成するに至れり。此學校に従事せし重なる人を、クレメント及びオリゲンの二人と爲す。

クレメント(一五〇―二二二)はパンテヌスの弟子なり。パンテヌスに次ぎて此府の問答學校を管理せり。其説く所、信仰は知識の基礎にして、此二者は相共に助け合ふべく、基督教の教義と異教徒の哲學とは、決して衝突せず、寧ろ同じ真理の半面にして、相助けて基督教を成すといふにありて、力めて兩者の調和を計れり。オリゲン(一八六―二五三)は、此學校に育ちたる人にして、クレメントの後を繼げり。氏は

十八歳にして此學校の教師となり、寛大の徳を具し、献身的に此學校の爲めに働けり。氏が此學校を管理せし時は、其全盛時代にして、氏が死後餘り振はず、四世紀の頃には、殆んど其勢力を失へり。しかも此學校は、羅馬の本土、又中世紀に建てられたる宗教學校の模範となりて、永遠に其影響を及ぼせり。

第七節 異教徒の教育に對する衝突 基督教が、かく羅馬の本土なる、アレキザンドリアに於て、教育に手を着くるに至りて、必然に起り來る問題は、異教徒即ち在來の希臘人羅馬人の學術教育に對し如何なる態度を取るべきかといふこと是なり。アレキザンドリアの問答學校に従事せる人々即ち希臘長老 (Greek fathers) と呼ばるゝ人々は、異教徒の文學哲學を基督教に結び付けて之を教へ以て知徳圓滿なる基督教徒を作らんとしたれど、しかも羅馬長老 (Latin fathers) と呼ばるゝ人々は、絶對的に異教徒の文學哲學を排斥し、之に代ふるに自身等の宗教々育を以てせんことを希へり。其一人テルタリヤン (一五〇—二三〇) の如きは、夙に異教徒の文學と哲學とを以て、基督教の神聖を破り、傲慢と不道德とに導くものとして曰く、汝科學と文學とを好まんか、吾等は既に幾多の詩歌文章を有するにあらずや。吾等が有す

る詩歌文章は作り物語にあらず、しかも眞理なり、不自然の所なく、而して純潔なり。汝若し科學を求めんか、吾等既に之を有せり、しかもアゼンスより得たるものにあらず、シエルサレムに比すれば、アゼンス何にするものぞ、教會に較ぶれば、アカデミイ何の價値かある。吾等の教はソロモンの家より來れり、ソロモンに従へば、心の清き者のみ神を見ることを得べし。異教徒の文學哲學は、即ち心の純潔を害す。吾等は基督教を見出したる以外に、最早探求することを要せず、吾等は福音を受取りたる外に求むべきものなしと。

羅馬長老等は、かく異教徒の文學哲學を排斥すると共に、又其教育法をも排斥し、嚴格なる禁欲主義 (Asceticism) を取れり。クリソストムは兒童を教育するに一切世俗的の事を以てすべからず、全く天國的の事柄を以てすべしと言ひ、又たセント、ジェローム (三四〇年に生る) が、其友レクタに與へて其娘パウラの教育を論ぜる中に、身は諸種の罪惡の源なるがゆゑ、教育に於ては全く身軀の快樂を抑ふべく、唯に身軀の快樂を抑ふるのみならず、音樂美術の如きも人の欲情を起さしむるを以て之を學ばしめざるべく、又他人と交際して世俗的の事を知らしむる事なく、全く彼女

を離れ部屋に天使の如くあらしむべしと言へり。

第八節 基督教の成立 しかも基督教は、本来一の宗教にして、宗教道德の要素は其中に含めるも、科学、文学、哲学の要素は含まず、従つてそれだけにては、以て博く一般人を教育すると能はず、而して實際異教徒の文学、哲学と衝突する極、自ら基督教を中心とし、之に異教徒の文学、哲学、科学を結び付けて、以て博く世間を教育せざるべからざる必要に迫らるゝに至れり、かく基督教は先づ二個の世界的言語即ち希臘語と拉丁語とを利用し、先づバイブルを此二語に翻譯し、又希臘羅馬に發達せる諸學術殊に文法、論理学、修辭學、數學、幾何學、天文學、音樂の七科を基督教に反せず、却つて之を助くるが如くに、其周圍に結合し、一個の基督教的文学を組織し、異教徒の趣味に反せずして、しかも其理解力に訴へ、以て基督教的教育を施さんとするに至れり。但し是等の學術はもとより宗教の方便に使ひしものなるがゆゑ、之を真理を明にする爲めに教へたるにあらざるは言ふまでもなきことにして、此傾向を最も能く看取し、ローマン、カトリック教會を起し、以て中世紀教育の教權を定めし者は、セント、アウガスチンなり。

アウガスチン(三五四—四三〇)は、亞弗利加のヌミディアに生れ、希臘羅馬の學術を研究して安心を得ず、遂に基督教に歸着し、教會の長老の大立物となり、ローマン、カトリック教會、即羅馬宇宙教會を起せり。少時性疎暴にして、放埒度なく種々の不道德なることをも爲し、が、遂に信心堅固の大人物となるに至りし後、自ら其經歷を「懺悔録」として、些の隠す所もなく表向せり。シニットいふ、本書は、人間の精神が卑俗の状態より高尚の點に發達する全き心理學を十分に表向せるものなり。教育者之を讀まば、教育の多くの理論を説きしものよりも、遂に有益なる教を得べしと。彼が教育意見は、すべての教育は、信仰と教權とを本とすべしといふにありて、異教徒の文学、哲學を學ばしむることを好まず、心の貧しき者、却つて神を見ることを得といふ信仰に立ちしも、しかもこれ大勞の許さざる所、宗教的學校に於ては、他くまで信仰教權を本として教ふべきも、之を害せざる限りに於て、異教徒の學術を取り入れて教育すべき道を開き、自ら中世紀の教育を爲す基礎を置けり。

第九節 中世紀への移り行き 基督教起りて、從來の希臘羅馬の教育に新に宗教を加へ、教育史上より言へば、希臘羅馬の教育に加ふるに、更らに宗教的教育を以て

することゝなれり。西羅馬滅ぶるや、此の希臘羅馬の教育と宗教的教育とは、今の歐洲に移りて歐洲人の祖先を教育することゝなれり。之れを中世紀の教育史と爲す。

第十節 基督教的教育に對する批評 基督教徒が作らんとする所は、神には忠實に同胞には博愛の念を現はす所の宗教心ある人にあり。即ち一言に、其教育の目的は宗教的なりといふとを得べし。希臘の教育が美的、羅馬の教育が實踐的なりといふに對し、之亦一種の教育の目的を掲げしものと見るべし。人格の圓滿無缺なる天父の理想を掲げて、衷心より之に似るに至らしめんとするは、希臘の教育に於て、哲人神人といふ如き抽象的の理想を掲げ、又羅馬の教育に於て、雄辯家といふ如き現實的の理想を掲ぐるに對し、慥に人を高尚にし、又熱心ならしむる力を有す。所謂人格の完成を教育の目的とすべきは、基督教に依りて明に認められたりと見るべし。但し基督教徒の所謂人格は、宗教的感情、宗教的意志に富める人の謂ひしにして、知力明に又美的感情の高尚に練られたる如き人を意味せず。彼等は「心の貧しき者は福なり、其人は神を見ることを得べければなり」といふ、又其長老等

の中には、美的感情の修養を排斥し、全く僧侶的の生活を爲す如き知と情とに缺けたる人格を養成せんとせり。而して之を社會的方面より見れば、世界の民を作るを主として國家の民を作ることせず、彼世の人を作るを主として此世に働く人を作らず。此頃は中世紀に至りて之を十分事實の上に見ることを得べし。

第二に、右の如き人を作る方法より言へば、教授に於ては問答法を執り訓練に於ては禁欲主義を取り教育發達の上に、左したる影響を與へずといへど、學校を宗教的、道德的の空氣にて満たし、而して一切の學術を、宗教に統一して教へ、其教育する場合に、熱誠以て宗教的の深き感化を與へんとしたる如きは、基督教的教育法の特徴と見るべし。

第三に之を學說の點より見るに、基督教はもと宗教的感想の上より教を立てたるものにて、哲學的若しくは科學的根據に立てるものにあらず。之を學理的に言へば、其根本思想、神の存在といふことが疑ふべく、之を信する者は、此教に依りて教育せらるべきも、以て一切の人を教育する理由とはなすべからず。其長老等の意見に至りては、概して消極的厭世的にして、僧侶を作るには可ならんも、以て一般人を

教育する意見とはすべからず。しかも教育學思想の上に世界主義個人主義を唱へ來り、人類の自由平等博愛といふ考を附け加へ、愛の力を重んじ、精神の無限の修養を説き人心を根底より改造せんと試みたる點に於ては、一新面目を開けり。第四に之を制度の上より見るに、其學校教育は、一方に家庭の教育を以て之を助け他方に教會の教育を以て之を補ひ、國家の教育制度の外に立ち、宗敎的の教育制度を立つるの道を開き、中世紀に至りて、之を羅馬法皇の手に統一する如き基を爲せり。而して此敎義の平等博愛の精神より、普通教育、貧民教育、孤兒教育を施す制度を立つるの道をも開けり。

中世の教育

第四章 五世紀より十二世紀まで

第一節 中世紀の年代 紀元後四百七十六年、西羅馬帝國はチヤートン種族即ち獨逸種族の爲めに滅ぼされ、其文化はチヤートン種族に傳はりて今の歐洲に傳はり、茲に中世紀の舞臺は開かれたり。其後千四百五十三年、東羅馬帝國が、土耳其人の爲め滅ぼされて、其文化が舊羅馬のありし伊太利に入りて、文藝復興を起すまでの約一千年間を中世紀と稱す。

中世紀一千年間の中、殊に其初めの五世紀より十一世紀の末十二世紀の始に至るまでの間を暗黒時代と稱す。十二世紀より文藝復興の始まる迄は、最早暗黒時代を以て目すべからず。教育史も此分け方に従ひ、本章に其暗黒時代と稱せらるゝ間の事實を記し、次の章に其後半の間の事實を記すべし。

第二節 教育の舞臺の一變 是迄の教育は、主に希臘羅馬に限られ、希臘羅馬は即ち世界の花にして、他は殆んど世界史の上に重きを爲すこと能はざりしが、今やチヤ

トロン種族は、遂に西羅馬を滅ぼし、西羅馬のありし伊太利は今やチエートン種族の一なるゴッス族の手に治めらるゝに至り、チエートン種族は今の歐洲に根據を据ゑ、茲に世界史の主人公たるに至れり。

此間、東羅馬帝國はコンスタンチノールに都し、ビザンチン帝國とも稱せられて、舊文明を保存したりきといへど、地、東方に僻して、其勢力十分に伊太利の方に及ぶこと能はず、チエートン種族の方には、猶更ら及ぶこと能はず、僅に土耳其、亞刺比亞、露西亞の如き之に接近せる國々に影響を及ぼすに止まれり。世界史活動の中心は今正に歐洲に移りきといふことを得べし。

其跡につきて案ずるに、教育史の中心は、第一には希臘にありき。第二には轉じて羅馬にありき。而して第三には轉じて今の歐洲に移れり。第一の希臘の教育が第二の羅馬の教育に影響し、此希臘羅馬の教育が第三の歐洲の教育に影響せり。時移り所隔たるといへど、其發達の跡を大觀すれば、自ら一系を爲して、漸次に人文の開展せる様を認むることを得べし。

第三節 異教徒學校の撲滅 東羅馬帝國の教育は、教育一般の發達より言へば格

別注意すべきとなきも、其最も赫奕たるジュスチニアン帝の治世には記すべきことあり。帝は五百二十七年より五百六十五年まで位に在りしが、其即位の翌々年即ち五百二十九年に令を出して、すべて希臘羅馬風の異教徒の殿堂を破壊し、其學校を閉鎖せり。これ疑もなく基督教の勝利、基督教的教育の勝利にして、曩きに異教徒の教育と基督教徒の教育と相衝突して、其解決を得ざりしもの、茲に一段落を付けしものと見るべし。但し異教徒の教育が撲滅し得られざるは、中世紀の教育にも見ることを得べく、文藝復興時代に最も明に之を見ることを得べし。

ジュスチニアン帝は、コンスタンチノールに、セント、ソフヤの大會堂を起し、又ツリボニヤンと呼ぶ大法律家の助を得て羅馬法を大成せり。これ實に歐洲各國の法律の基礎となりしものなり。

第四節 新種族の特質 東羅馬帝國は存すれども、世界の大部分には多く與らず、主として之に與りしはチエートン種族なるが此種族はもとアールマン種族の分れたるものにして、そが今の歐洲に來りしは、紀元前凡そ二千五百年と見做さる。此種族羅馬の共和政時代に征伐せられて、容易に屈服せず、其帝政時代の始めに及びて

は、征服すべからざる強大の種族として羅馬人に畏懼せらるゝに至り、遂に五世紀に及んで、全く世界史の舞臺に現はれて、西羅馬を滅ぼすに至れり。此種族、當時は猶森の中に狩し暮らせる野蠻人にして、未だ文明の何たるかを知らざりしも、天資勇敢、体力強健、夙に自由の發達を爲し、將來大に發達し得べき資質を有したり。其道徳につきては、早く羅馬の歴史家タシタス(紀元後七五—一二〇)が、其團結心に強く、相救ふ義氣ありて、能く客を遇し、又其男女間の愛情の純潔にして、殊に婦人を敬愛する美風あるを描き、是の如き美風は、羅馬人を愧死せしむるに足ると言へり。佛のモンキスキューが、歐洲近世の文明は、其萌芽を獨逸の森の中に發したりと言ひしは、此點を言へるなり。此種族、今其武力を以て西羅馬帝國を滅ぼし、其文明と基督教とを取りて、大に世界に雄飛する準備を爲し、遂に近世の文明を開けり。中世紀は即ち其準備の時代なり。

第五節 新種族の受取れる遺産 今世界史の舞臺に現はれたる新種族が、遺産として受取れるものは、希臘羅馬に發達したる文明と、基督教の教義となり。もとより彼等は、當時野蠻の状態にありしが、故に自ら進んで之を受取りたるにあらず、彼

等が西羅馬を滅ぼすや、其文明を保存し尊重せんとはせず、唯無暗に之を破壊しきと傳へらる。乃ち彼等に、此二つの遺産を傳へたるものは、實にセント、オーガスティンが創立したるローマン、カトリック教會に屬する僧侶なりしなり。ローマン、カトリック教會は、其教を以て、基督教の本旨を得たるものとし、之を世界に宣傳し、世界を基督教化せんとの希望を以て起りたるものにして、其僧侶は、此蠻族を感化せんが爲めに早くより此地方に入り込みて布教に従事したり。此派の僧侶は、すべてオーガスティンが定めたる教權を奉ずるものにして、其オーガスティンが定めたる教權といふは、基督教を本とし、之に其教義を助くる限りの希臘羅馬の學術を以てせる所謂基督教的文學にして、希臘羅馬の學術文明のすべてを含みたるものにはあらずりしかど、彼等野蠻人に取りて、高尚なる教たりき。彼等野蠻人の間には卑近なる自然崇拜の多神教はありき、荒唐なる傳説はありきといへど、未だ文學なく、文學なく、社會上の制度に至りても、傳來の儘にて一定せる所なく、宗教道徳、亦卑俗の傾あるを免れざりき。而して日常の仕事としては、狩を爲すか武を練るか、の二つにして、高尚なる學術、宗教を味ふ餘裕なかりき。此時に當り、ローマン、カトリック教會の

僧侶は、獨り學問ありて、自らは等民族の精神的感化に當るに適し、宗教家たると共に、教育家となりて、尙ふべき二つの遺産を授けたり。

此二つの遺産に依りて、彼等野蠻人は次第に高尚なる文明人となるべき教訓を、中世紀の一千年間に受取りたり。彼等の性質の猶野生的なる若し此二つの遺産を受取ることなかりしならんには、進も歐洲近世の文明教育を開く程度には進むべからざりしなり。彼等は之に依り他に向ける眼を天に向けたり、血に渴く勇氣を世界の同胞を愛すべき同情に化せり、現實の世に齟齬として苦悶し争闘する境を脱して、理想の世間に神と交る境地に入れり。かくて彼等は基督教化せらるゝに依りて人間らしくなり、秩序ある國家を形作るやうになり、而して今日の文明人となる基を得たり。彼等は、羅馬は滅ぼしたれど、精神的には却つて羅馬の支配を受けたりと言ふべし。但し又希臘羅馬の文明と基督教とが、此種族の特質に消化せられて新生命を得、一種異りたる歐洲の文明と教育とを開くに至りたる點あることを認めざるべからず。中世紀の教育史は、此種族が一方には右の二つの遺産に感化せられながら、他方には之を消化して自個の文明と教育とを爲す經過に外ならず。

第六節 宗教學校　ローマン、カトリックの僧侶が、二つの遺産を傳ふる場所は、教會と學校とに於てせしものにして、其初めにありては、教會と學校とは互に相關係したりき。

宗教校學は、寺院校學 (Monastic school) 僧院校學 (Cathedral school) 及び寺領校學 (Parochial school) の三種にして、寺院校學、僧院校學は、曾て羅馬にありし問答學校に其模範を取り、寺領校學は信徒豫備校に其起源を發せり。

寺院校學は、紀元後五百二十八年、セント、ベネディクトが西羅馬帝國の跡、伊太利のネーブルス近くのモント、カッシノに建てたるを始めとし、之に則りて今の歐洲の各地に建てられ、蘇格蘭土の西海岸アイオナ島にありしセント、コルムバが建てたる學校は、之と並びて當時最も有名なりき。學校長は寺院長 (Abbot) 之に當り、學校の組織は内學外學の二つに分れたり。内學にては僧侶の候補者を養成し、外學にては一般人の學に志あり、且つ宗教に入らんとする者を養成するにありて、課程は差して異なりしにあらず。共にアレキザンドリヤにて定められたる拉丁文法、論理學

修辭學、數學、幾何學、天文學、音樂の七科を教へたり。拉丁文法といふ中には拉丁語の文法はもとより、読み方、書き方、一切を含めたるものにして、此語は教會の言葉とせられ、學術上の言葉と見られ、宗教及び一切の學術を學ぶに缺くべからざるものとして學ばれたり。其教科書としては、拉丁語譯の聖書、羅馬長老等の書、主として讀まれたり。論理學は希臘のアリストートルの三段論法主として教へられ、修辭學は、主にシセロ及びクインチリヤンの書用ひられたり。數學は甚だ不完全のものにして、數の神秘的性質を了解する爲めに教へられ、幾何學は單に其初步に止まり、天文學は寺院の祭日を定むべき必要の爲めに教へられ、地球を以て中心とする説明を爲せり。音樂は主として讚美歌を歌ふが爲めに教へられたり。而して此七科を完全に習得するには七ヶ年を費したり。

僧院學校は八世紀に於て、僧正クロデガングが創めし所にして、漸次各地に設立せられたり。其目的は、主として僧侶の候補者を養成するにありて、言はゞ寺院學校の内學のみを引き離せるものと見るべし。其教ふる科目程度は、寺院學校と異なる所なきも、宗教の教授に殊に重きを置き、校長には僧正が任選するスコラスタクと名づくる僧侶中の學者を擧げたり。

寺領學校は、一に村落學校とも呼び、各寺領區に、教會と並べて建てしものにして、一般人の子弟に、基督教の初步を知らしめ、禮拜の道を教へ、以て教會組合に導き入るゝにありて、簡單なる読み書き算盤をも教へたり。之が任には、其區の僧侶之に當り、恰も我國に於ける寺子屋の如きものなりき。寺院學校、僧院學校は、専門教育を施すを主とせしが、寺領學校は普通教育を施すを主としき。

此の三つの學校に通じて、教授法は問答法を用ひたれど、其問答たる、唯兒童の記憶を試むるにありて、之を啓發せんとの趣旨よりせしにあらざり、一切記憶力に訴へて暗誦せしめ、其推理力判斷力を、實物に訴へて練らしむる如きことなかりき。而して訓練につきては、宗教的の學校なりしだけ、嚴格にして、一切世俗的の汚風に染ましめじと力め、過あれば鞭を以て之に臨み、又躰慾を消し、宗教心を鍛らしむる上より、斷食せしめたり。

之を今日より見れば、其一方に偏して、教授訓練共に不完全を極めたるを認むといへど、これ一方には僧侶等か、宗教を主として學術の研究を疎にし、他方には其教育

を受くる者が野蠻人を距ること遠からず、文化の猶低き程度にありしを以て、暗黒時代の學校としては、それ相當のものなりき。而してかく一方に偏したる宗教的教育を施すことが、當時の人の現實的傾向を理想的傾向に轉せしめ、戰爭的性質を平和的性質に移らしむるに大に効力ありき。かくして此種族を教育せし結果、此種族中より、中世紀の明君と稱せらるる、シャイレマン帝の如き大人物を出すに至れり。

第七節 シャイレマン帝 帝七四二—八一四は、此暗黒時代に一道の光明を投げ、大に歐洲全躰の開化を高めたり。帝は今の獨逸、佛蘭西、澳太利、伊太利の全部、及び英國の一部を纏めて支配し、八百年に羅馬法王より羅馬皇帝の冠を授けられき。帝の理想は、チエートン種族の自由なる精神と、基督教とを結合して、其領土に、今一度新なる羅馬帝國を打ち建てんとするにありて、其治世四十六年間、一意此理想の爲めに働き、此理想の爲めに職を爲すと共に、常に國內の統一を計り、人民の開化を進めんとを志し、七百八十七年、僧侶に令して、僧侶の學問を獎勵し、各寺院に從來存せる所の寺院學校、僧院學校及び寺領學校を維持するのみならず、之を擴張し、新設し、而

して僧侶たる者は必ず人民に向ひ、宗教を教ふるのみならず、又讀み書き算盤を教へざるべからずと令し、八百〇二年には、一般に教育令を出し、一般の父兄は、其子を學問せしむる爲めに學校に送り、其子弟が一通りの學術に通ずる迄は在學せしむべしと命ぜり。而して帝自身は其首府アトヘンに宮廷學校(Palace school)を建て自身の子女及び貴族の子弟を此所に入らしめ、以て教育獎勵の摸範を示せり。此宮廷學校は、寺院學校、僧院學校と並び、當時最高の教育を施す所となり、科目は是等の學校と均しかりしも、宗教家以外の人の經營する所として、自ら國民を養成する國家主義を執りしが、國家を盛んならしむるが如き人を養成する方針を取り、宗教學校と違ひ、國語を卑しめず、躰育を獎勵せり、而して一般人の國民的精神を鼓舞涵養せんとの趣旨より、チエートン種族の間に傳はれる國民歌の醇良なるものを選定せしめたり。此帝の侍講となり顧問となり、かねて又此宮廷學校の校長となりしものは、ブリテインのアルクインなりき。

帝は諸方より、當時の學者を其宮廷に招待し、之に就きて熱心に當時の學術を研究せしが、其招待せられたるもの、中にて、アルクインは第一位に推されき。氏はブ

リテインのヨークに生れ、此所の僧院學校に育ち、學成りて其校長に推され、令名夙に歐洲に高かりしが、七百八十二年、年四十七の時、帝の招待を受けてアーヘンに來り、大に帝の事業を翼賛せり。氏は級々として、希臘羅馬の古文學と基督教とを調和せんと試み、一の基督教風のアゼンスを打ち建つることを畢生の願とし、此理想を以て帝を補佐せり。希臘古代のアゼンスの如く、文化燦爛として輝き、而して其間に基督教風の高尚なる信仰と道德との行はるゝ國を、此世に來さんとの理想、これアルクインの事業を爲さしめし光明なり。居ること十四年、帝の依託に依り、今の佛國のトール寺院及び其學校の監督となりて、大に力を盡し、爲めに佛國今日の教育は、氏に依りて其基礎を置きしと言はる。

帝が八百十四年に崩せられし後は、其後繼者を得ず、帝國分裂して、今の獨佛伊などに分れしが、其一般に歐洲全體の開化を進めたる功は没すべからず。此頃よりして、歐洲人は獨り古代の教權に支配せられず、却つて之を己れに消化して獨立する地歩を占むるに至れり。

第八節 亞刺比亞人の影響 亞刺比亞人又の名サラセン人は、セミチック種族にし

て、七世紀頃よりモハムメッド、通稱マホメット(五七〇—六三二)の教を奉じ、右の手には劍を持ち、左の手には其經典コーランを捧げ、劍は天國と地獄との鍵なりと唱へ、此教に従はざる者あれば、武力を以て之に臨めり。其教たる、基督教と均しく、ユデヤ教より出でたるものにて、マホメットを、エホヴァの眞の子とし、マホメットは基督よりは遙に大きく、この事は天使に依りて示顯せられたりといふにあり。かゝる信仰を以て、この教徒は、シリヤ、ペルシヤを征服して之に其教を奉ぜしめ、進んでアレキサンドリアに入り、此所に入りし希臘の學術を取り入れ、更に東羅馬帝國をも攻め、尙希臘に進入して、希臘の本來の學術を味ひ、遂に七百十年に、今の歐洲の西班牙に入れり。

西班牙は此時、ヴィシゴスが占領したりしが、之を追ひて其コルドヴァを根據とし、大學を建て、理科の實驗所を起し、圖書館博物館を立て、世界の文明を此所に集め、爲めに今の歐洲の本土よりも留學する者さへありき。彼等は元來伶俐驍悍の國民にして、夙に數學、天文學、物理學、化學及び醫學の如き自然科學を研究せしが、上、行く希臘羅馬の殘れる文明を拾收して之を西班牙に持ち來し、之を今の歐洲人の

先祖に紹介せり。是よりさき、希臘羅馬の文明學術として中世紀人に傳へられたるもの、多くは宗教を中心とし、此宗教を助くる限りのものだけ傳へられしが、今亞刺比亞人に依りて、其宗教に關係なき文明學術も紹介せられ、殊に又亞刺比亞人特有の理科の思想も傳へられ、大に其知力の發達を刺激せり。此亞刺比亞人は、十一世紀には、ムーア人の爲めに西班牙の根據を覆されたるが、そが中世紀人の學術研究心を刺激し、其自由なる精神の發達を促したる事實は認めざるべからず。歐洲今日の文明教育が成立するには、如何に種々なる要素が入り來りて、之を刺激し、之を豊富にせるかを注目すべし。

第九節 國民の教育獎勵 以上述べたるが如く、中世紀初めの間の教育は、ローマシ、カトリック教會の僧侶の手に依りて營まれしが、チートン種族が漸々開明に進むに付け、其固有の自由なる精神は益々伸び來り、又以前の如く、一意僧侶の勢力に屈從せず、シャーレマン帝の如きは、基督教を信じ、羅馬法王に仕へたるに拘はらず、時には法皇に反抗して國君たる勢力を伸ばさんとし、而して其經營せし學校の如き、基督教的教育を本としながら、猶現世的の國民を作らんとし、僧侶の手に施す寺領學

校にも其勢力を及ぼし、國語を以て一切の學科を教授すべきことを獎勵し、宗教的教育に對して、國家教育を起さんと力めたり。

ブリテインのアルフレッド大王(八四九—九〇二)の如きも、亦國君として教育を經營し、シャーレマン帝と均しく、宮廷學校を起して己が子女及び貴族の子弟を學ばしめ、又宗教學校の發達を獎勵せり。オックスフォード大學の基礎も、王が置きし所と傳へらる。王は猶自らバイブルの中の或部分をアングロ、サクソン語に譯して人民に知らしめ、一般人殊に貴族の教育を獎勵せり。英國人が法律に従ひ、正義自由を尙び、國の名譽を重んじ、かねて家族的道德に厚きが如きは、王の遺風多きに居ると稱せらる。

第十節 十一世紀末の進歩 かくの如き状態にて、當時のチートン種族は、一面基督教と希臘羅馬の古典とに依りて教育せられながら、他面其自由なる精神を伸ばし來り、此自由なる精神を以て、基督教と古典とに新生命を與へ、以て一種異様の教育を施せり。此傾向、十一世紀末に至り、種々の歴史的事實となりて現はれたり。例へば煩瑣學派の勃興、封建制度に伴へる武士教育の發達、庶民教育の着手、自然科

學の研究、大學の設立の如きは、其重なるものにして、是等の出來事は、自ら十二世紀より文藝復興時代に至るまでの教育史を埋む。

第五章 十二世紀より文藝復興時代に至るまで

第一節 煩瑣學派 煩瑣學派の起りは、九世紀にありといへども、其最も盛んなりしは、十二世紀、十三世紀にして、十四世紀より十五世紀に亘りては衰へたり。前章第六節に説きたる寺院學校、僧院學校に教へたるものは、僧侶中の學識ある人々にして、之をスコラスマス又はスコラスチカスと言ひしが、此學者等の務めは、七個の修養技藝、即ち希臘羅馬に發達したる古典を基督教に結び付けて教ふるにありしが、中世紀人の知識進むに連れ、其宗教を十分に、希臘羅馬の古典にて證據立て、信仰と知識、宗教と哲學とを一致せしむるにあらずば、之を承認せざるに至れり。曾てアレキザンドリヤに於て基督教の教義は、希臘哲學の攻撃に逢ひて、遂に神學を組織せざるべからざるに至りしが、之につきて長老等の意見は一致せず、之を哲學上より考へて、宗教も合理的のものとする者もあれば、又兩者は一致せず、信仰の範圍は、窮理の得て追求し得る所にあらずとする者もありて、信仰と知識、宗教と哲學との關係が、猶明ならざるものありき。煩瑣學派は、即ち之を一致せしめ、宗教上の信

仰も、哲學上道理あるものと認めしめんと計り、若しそが調和し難き場合には、寧ろ哲學を宗教の奴隸知識を信仰の方便と爲さんと企てたるものにて、大體はセント、オーガスチンの思想の系統を引けるが、かくの如く宗教の説く所を哲學にて證明せざるべからざるに至りしは、チートン種族の自由なる精神、其科學的精神が發達したるに依る。

煩瑣學派の所謂哲學といふは、希臘のプレトール、アリストートルの哲學の謂にして、亞刺比亞人が、アリストートルの哲學を紹介してよりは、殊にアリストートルの論理學を以て、基督教の教義を證明せんとせり。此學派の者が、其學說を講義する場所は、歐洲各地の僧院學校にして、僧院學校は此時に及び、次第に其位置を高め來り、神學哲學の専門學校となり、僧侶中の有識者と、好學の士とは此所に集まれり。其學者の中にて最も有名なりしを、アペラル及びトマス、アクイナスの二人と爲す。アペラル(一〇七九—一一四二)は、明瞭なる頭腦と、無比の雄辯とを有し、アリストートルの論理學を神學に應用して、其學理的證據を與ふるには、實に熟練せる技倆を有しき。氏は巴里の僧院學校にて其學說を講じたるが、其周圍には常に數千の學

生群がれり。當時未だ印刷術の發明なく、従つて書籍の乏しかりし時に當り、其勝れたる雄辯を以て、宗教に明快なる説明を與へたれば、氏が歐洲諸國の學生を引く中心となりしも宜なり。氏は人心の自由なる發達を希ひ、人の良心を啓培して、天地に對し、俯仰愧づることなきが如き人を作らんとし、講義の間、常に此心を以てせり。然るに其生徒の一人、ヘロイゼといふ女子と關係を生じてより、頓みに人望落ちき。氏が講義したる巴里の僧院學校は、即ち巴里大學の基を爲せり。トマス、アクイナス(一二二五—一二七四)も、此派の能き代表者なり。氏は伊太利ネーブルスの生れなるが、夙に巴里に來りて學び、後コロン及び巴里の僧院學校にて、神學哲學を教授せり。性格高く、論理學を神學に應用する手腕は、此派の第一流と言はれ、又其性行の高かりしより、天使の如き博士と言はれたり。其著書の中に、教師論あり。中にすべての學問は、既に定まれる學問に基むせざるべからざる旨を言へり。以て其學風を察すべし。

此派は、十四世紀に至りて、其研究益々煩瑣となり、針の先に幾人の天使立ち得るか、蛇がイヅを甘言もて誘ひし時に、如何なる言葉を以てしかかといふ如き、馬鹿らしき

問題まで研究するに至り、而して此學派の起りは、もと知識と信仰とを一致せしめんとするにありしが、其研究の極、此二つは却つて分離するに至りて、遂に衰運に歸せり。但し此學派は、當時の人の思考力を練りて、宗教に對し學術に對する研究心を深からしめ、又此學派の人が講説せし僧院學校は、諸所の大學の基礎を爲すに至れり。佛の巴里、獨のハイデルベルヒ、伊太利のボローニヤ、埃のプラトグ及びウインカ諸大學の如き是なり。

第二節 武士教育 中世紀にありて、僧侶は知識の鍵を有し、人心救済の權を握り、政治上にも大に其勢力を振ひたりしが、十一世紀に、封建制度成りて、君主の權次第に加はり、加ふるに十二世紀より十三世紀に亘れる十字軍に於て、武士が重要な役目に當りたるより、武士の勢力は、僧侶以外に於て、政治上、道徳上、輕からぬ位置を占め、従つて一種特別の教育、亦其間に行はるゝに至れり。

武士の教育は、基督教を本とせりとは言へ、教會の教育とは反對の觀を爲し、教會の學校が怠りて爲さず、又之を禁止せる事柄に重きを置きて教育せり。即ち体育を奨励し、社交に習はしめ、名譽の念を鼓舞し、國民的感情を起さしめたる如きこと等

にして、所謂武士道を、其教育の中心とせり。武士道は、基督教を本とせりとは云へ、亦一種異なりたる要素を含めり。武士の教育が、如何ほど僧侶の教育と違ふか、又そが如何ほど歐洲人の道徳心を高めしかは、次第に説き行く中に明かなるべし。蓋し何れの國、何れの世にありても、中等社會が國家の中堅となるものにて、此中等社會の教育の高下盛衰は、其國家社會の開化の依りてかゝる所なり。中世紀の教育に於て、武士教育の輕視すべからざるは、猶我國の教育史に於て、武士教育の輕視すべからざるが如し。

武士は更に委しく分てば、王侯貴族及び武士の二つとなる。王侯貴族の教育は宮廷學校に於てせり。宮廷學校の教則は、略々寺院學校に似たるが、此外に王侯貴族たる儀式や氣風の養成と武藝と修練とを以てせり。シャルレマン帝の學校は、其濫觴とも見るべし。一般の武士の教育は、生れてより二十一歳までに施すものにして、之を三つの均しき時期に分つ。第一期生れてより七歳までば、母の許に養育せられ、乳母又は看護人の監督の下に養育せられ、昔譚や軍歌を聞き、遊び事には軍の眞似を爲す。第二期七歳より十四歳に至れば、諸侯の宮廷又は他の武士の家に託

じて給仕と修學とを爲さしむ。當時諸侯の宮廷は、學者音樂者の集まり來る所たりしのみならず、又武士の子弟の教育所たりき。此七歳より十四歳迄を小姓と稱す。此間は主として夫人に給仕するものにて、其命令を聞き、其用を達し、其食膳に侍し、其散歩外出に伴ふ。此間に武士の風儀を見習ひ、武士たる修養を爲し、身體並に精神上の鍛鍊を爲す。身體上の鍛鍊は、武藝及び遊戯にして、其精神上の鍛鍊として學ぶ所は、音樂、宗教上の教義、將棋及び輕き武器の使ひ方にして、自然の見習ひによりて、更に從順と禮儀とを教へらる。彼等は絶えず高尚なる貴女勇敢なる武士に圍まれ、早くより禮儀に慣れ、名譽、愛情及び勇敢の念を以て充たされ、殊に其給仕する夫人に純潔の愛を注ぐ。ハラム曰く、宮廷の神學院にては、神を愛すること、夫人を愛することは一の結合せる義務とせられ、其夫人に忠實なる者は、同時に神の助を得る者とせられきと、此際數多の小姓一宮廷に集り居る場合には、特に一人の若侍若しくは武士を撰んで、之が監督と訓練とを命ぜり。其教育法全く修學と給仕とを結合せり。

第三期十四歳より二十一歳に至れば、其境遇全く一變し、夫人の給仕を止めて主人に給仕す。此間を若侍といふ。此時に至りては、主人の劍を奉じ、其武器に手入し、其馬を飼ひ、其獵に伴し、其仕合ひ場に從ひ行き、又實地の戰場に從ふ。戰場にては、常に主人の後に從ひ、之を介抱することを怠らず、其危険の時には、之を救ふ任を負へり。宗教の教義と音樂とを修むることは、前よりも一層深くなり、外國語をも學び、拉丁希臘の古語に及べり。武藝として學ぶ所は、射、御、游泳、擊劍にして、將棋の熟練をも習へり。

此小姓の時期、若侍の時期を通じて、宮廷内又は武士の家庭内に行はれたる詩歌管絃の合奏は、大に其情愛を鼓舞し、其勇氣を勵すに力ありたり。管絃に合せたる詩歌は、今に戀歌(Minnelied)として残れり。此時代には、新聞紙、小説、或は劇の如き、人の心を樂す遊なかりしより冬の長き夜か、雪霰の折には、城内の單調なる生活を破る爲め、一同大廣間に集り、中央の爐を圍み、管絃に合せて右の戀歌を歌へり。もとより此時歌ふものは、戀歌のみならず、勇壯なる所業を稱贊したる歌もありき。音樂を用ひ、一同相集りて互に感情を交換し、其相互の懇親を重ねる間に、暗々に一種の感情教育を施したり。

二十一歳に至れば、其多年の望達して初めて武士となる。武士となる時には、鄭重の儀式あり。先づ武士となるには、其罪を懺悔して、一夜を祈禱に明さるべからず。然る後沐浴して新衣を着け、教會に於て次の八個條の誓を爲さるべからず。第一條、神を恐れ、神を敬し、神に仕へ、あらん限りの力を盡して、教會を保護し、万一基督教徒なる面目を汚すことあらば寧ろ死して之を謝すべし。第二條、己が仕ふる君主及び祖國に對して、忠實に且つ勇敢に戦ふべし。第三條、婦人の權利を保護し、寡婦、孤兒、及び若き婦人の友たるべし。第四條、報酬利益の爲めに動かされず、一に名譽と道徳との爲めに働くべし。第五條、公共の安寧と利益との爲めには身を惜まざるべし。第六條、我が忠實の心を世界に現はし、又同じ仲間にはすべし。第七條、我が仲間を敬愛するは勿論、路傍の者をも敬愛すべし。第八條、若し己が仕ふる夫人の爲め危難を冒すべきことあらば、死だも辭せざるべし。誓終り、司式者たる若君は、其武士となるべき者の頸を、太刀の裏もて軽く打ち、其仕へし夫人は、甲冑を授け、之にて式を終る。かくて武士となりては、武藝の試合に出づることを得。試合にて勝つ時は、其勝ちたる者を祝する爲めの音楽起り、當日の女王の前にて賞

を受く。此試合、或時以テ、その小説の中には、能く此武士の面影を寫せり。此試合は、大に武士の勇氣を鼓舞せしは勿論、小姓若侍の實地の教育となれり。武士となる時は誓ふ個條は、即ち武士道にして、武士の教育は、かゝる誓を全うし得る如く仕向けられたり。此武士道は、チートン種族の固有の性情とも云ふべき勇敢の氣象と、婦人を敬愛することとの二つに加ふるに、基督教的の情愛を以てせるものにて、二種の道徳を發揮し、其詩趣に富めるは、實に歐洲中世の花とも云ふべし。彼等は常に神に捧ぐる我が生命は、君主に、我が眞心は、夫人に捧げ、我が身に求むるは、名譽なりとの訓言を守り、教會、婦人、弱者、幼者の保護者となりき。敬神の念に富み、祖國と君主とに忠にして、婦人を敬愛し、一切の弱者を救ふ所の義侠の念に富み、かねて名を重んずるを其理想としたり。従つて其教育は、教會の教育と頗る其趣を異にし、彼等の如く厭世的ならずして、社交的に、又詩趣的に、彼等の如く婦人を卑く視ず、之を其情愛の的とし、彼等の如く身軀を卑しめず、却りて大に之を練り、彼等の如く人類のみを眼中に置かず、國家的感情を鼓吹したり。これ一部は基督教の感化あるも、また一部は其足らざる所を補ひ、之に反抗したる趣あり。而して其理

想とせし所純潔にして大に高尚なる所ありしを以て、中世紀の野蠻の風を脱するには、基督教と相並びて大に力ありたり。武士の骨は朽ち、其劍は錆ひたれども、其精神は長へに残り、今日いふ眞の紳士は、實に武士の理想とせし、寛大、禮儀、及び基督教的情愛を意味し、其感化今日に及べり。武士は中世の花、而して其花の更に花とも云ふべきは、武士道なりき。而して此武士道を全うする教育としては、修養と給仕とを結合し、言説よりも寧ろ模範に依りて自ら薰陶したり。これ實に當時精神的修養の華を集めたるものといふも不可なる所なし。

第三節 庶民教育 武士が十一世紀頃より、僧侶以外に一大勢力を爲して、其教育を施したるに對し、同じ十一世紀頃より、伊太利、獨逸、其他に、各都府の勢力大に高まりて、商工業者の階級、社會の一大活動力たるに至り、是等の實業者、其位置を自覺し、其獨立を希望する所より、自ら教育を要するに至り、實際の生活に必要な事柄を其子弟に知らしむる計畫を爲すに至れり。中世紀に於て、此實業者の階級が、其獨立を希望し來りて、社會の一大活動力たるに至り、所謂自治制の萌芽は發するに至り、今日歐洲人が如何なる階級の民に至るまでも、割合に自治の精神に富めるは、此

時代より其如き教育を施されし結果多きに居る。これ希臘又は羅馬に見ざりし所にして、希臘又は羅馬にありては、實業者は十分なる市民としては遇せられず、其教育の如き、殆んど注意せられざりしが、中世紀に及びては、此階級の者の教育を見るに至り、寺領學校と共に自ら近世に於ける普通教育發達の素地を爲せり。伊太利に於ては、其北部のロムバルデー地方既に十一世紀に、幾多の勢力ある都府を有し、千百六十七年、遂にロムバルド同盟を作りて、各都府の共和的市政を行ふこととなり、帝王の命令をも聞かざるに至れり。ヴェニス、ゼノアの如き、其最も有力なるものなりき。獨逸にありては、十三世紀の半ばに成立したるハンザ同盟に依りて、獨逸の著名なる八十の市府、獨立を保證せられき。ハムブルグ、リニッペの如きは、其中の最も有名なるものなりき。佛蘭西のノルセイユ、モンペリエルの如きも、亦市府の有力なるものなりき。

是等の都府の學校にて教授する科目は、讀書、習字、及び算術の三科を重なるものとす。之に地理、歴史及び商工の事柄がそれらの國語にて教へられき。學校は之を都府學校とも、庶民學校とも、亦手習學校とも呼べり。是等の學校は、其起源よりす

るも其目的よりするも、共に宗教に關係せざることなるに、當時宗教の權力強かりしより、僧侶は重なる教師となり、恣に其勢力を振へり。されば僧侶の專權に對して、都府の役人は屢と反抗して、俗人の教師を備ふことを計り、其の争ひ常に絶えざらざり。都府の役人の權力勝れるときには、約定を以て教師を備ふ。約定として、先づ一年間、一人の首席の教師を備へば、其教師が自ら助教師を備ひて之を使用す。其俸給は何れも少くして口を糊するに足らず、されば教師の中には、備主を求めて町より町へと漂ひ、甚しきは流れ教師と稱する者ありて、二三の無頼の生徒をつれて漂ひ歩きし者などありて、爲めに教師の職は甚だ沈淪せり。建物は別に學校として建てられず、寺院か都府の公共の建物か、又は貸屋の中に於てせられき。第四節 科學研究の氣運 是まで述べたる如くにして、歐洲人が教育せられたる結果、十二世紀頃に及びては、眞理を眞理として研究する自由なる科學的精神漸々起り來れり。煩瑣學派の如きも、一面は、かかる要求に驅られたるものにして、基督教の説く所のみにては満足せず、之を以て希臘の哲學を借り來りて基督教の説く所も亦根據あることを示さんとしたるもの、即ち煩瑣學派なり。

此科學的精神を喚起したる者は、第一は前に説きたる亞刺比亞人の影響なるが、第二は十一世紀より始まり、十二世紀、十三世紀に亘りたる十字軍なり。十字軍に依りて、歐洲人は、東方の風俗習慣制度文物を見て、大に見識を廣くし、之に依り大に寛大となり、從て知力的宗教的の復興に向つての道を用意せり。哲學が神學より離れて研究せらるゝに至りたるも、此結果なり。第三は、獨英に於ける科學者が出てたるとなり。英國の僧なるローヂー、ベーン(一二一四—一二九四)及び獨逸の學者アルバートゥス、マクナス(一二〇〇—一二八〇)は、共に十三世紀の人にして、當時の人が宗教若しくは哲學の如き形而上學を研究せしと反し、有形的の理科を研究せり。但し此二人は、餘り時勢に先んじたる爲め、共に魔法道として處得せられき。第五節 大學の起源 中世紀の後半、科學的精神の漸次盛んにならんとする。一現象は、大學の起源に徴することを得べし。大學の起源は、必らずしも基督教に對する反抗に出でしにはあらず、其中には在來の僧院學校の漸く發達したるものもありしが、又一一定の場所に於て、學問研究の爲め、學者の會合したるに依りて成りたるもあり。大學なる名は、實に拉丁語のユニヴァルシタス、即ち團體の語に出でたり。

而して其僧院學校の發達せしものといへど、科學的精神に驅られて成るべく教會の羈絆を脱せんとするに至れり。大學の最も古きは伊太利のボローナにして、主として法學を教授せり。此大學十二世紀の終には生徒一万二千人ありて、諸外國より集り來れり。同じく伊太利のサレルノ大學も、略々同時に起りて、醫學を主とし、同じく獨佛の人は元より猶太人、亞刺比亞人等も來り學びき。巴里大學は前に云へる如く、アベラルの勢力の下に、僧院學校より漸々發達し、千百四十年には大學となれり。始めは單に神學文學を教授せしが、後法學醫學を加へて、都合四個の分科大學より成るに至れり。此大學には、英獨兩國よりも學生來り、歐洲文化の中心となり、十三世紀には、生徒二万人もありて、皆其國々に依りて、此大學の寄宿舎に入れり。英國のオクスフォード大學は九世紀頃、アルフレッド王に建てられきと傳ふれども、其眞に大學の驛裁を爲じしは十一世紀の末にあり。千二百〇一年には、此大學に三千人の學生ありき。ケムブリッジ大學は十三世紀に起れり。前者は神學を主とし、後者は數學を主とせり。獨逸大學の最も古きは、千三百四十七年に建てられたるプラターグ大學を始めとし、千

三百六十五年にはウイーンナ大學建てられ、千三百九十二年にはエルフルト、千四百〇九年にはライプツヒ、千四百十九年にはロストクなど建てられたり。是等の大學、始めは多く一科の専門を以て起りしものなるが、後々は、大抵神學、文學、法學、醫學の四分科大學を備ふるに至れり。而して所謂七個の修養藝術は、是等の中に自ら含めて教へられたるが、中世紀の末には、物理學なる一科學、稍々形を備へて教授せらるゝに至れり。もとより其物理學といふは、主としてアリソトトスの説きし所を本とするものにて、自然を觀察し、又理化學の試験を爲す如きことなかりしも、以て自然科學が漸々人の注意に上り來りしを見るべし。是等の大學に用ひらるゝ言葉は、拉丁語にて、國語は却りて卑しめられたり。其組織に至りては、一科ならずといへども、總長、分科大學長、幹事及び教授を以て成れり。卒業の生徒には、分科大學長の推薦を待ちて、總長より學位を授與せり。大學には皆特權あり、大抵自治體にして、自ら裁判權を有せり。大學の勢力斯くの如くして次第に高まるに至りしより、其起りは成るべく宗教を離れ、科學的に學問を研究するにありたるも、教會及び政府は、各々之を己が勢力の

下は結ばんとするに至れり。シットといふ、教會は信仰の力と知識の力とを結ば
 九が爲め、法王より大學に保護を與へて之を利用することを計り、政府は其力を扶
 植し、其知力的根底を堅めて一般人の開化を進め、以て其國力を増進せんが爲め之
 を教會より離して大學に獨立の位置を與へんと争ひきと。當時大學の生徒心得の二に曰く
 當時大學生の風儀は甚だよろしからざりき。ウインナ大學の生徒心得の二に曰く
 生徒たる者は飲酒爭論及び勝負等の遊に時を費すべからず。街道に於て不躰裁
 のことあるべからず、夜許しを得ざる家に宿泊し、或は人の物を盗むが如き者は、一
 度訓戒を加へ、猶改めざる者は、大學生の特權を剝ぎて之を放校に處すべしと。
 大學の各地に起るに従て、之が豫備校の必要を感ずるに至り、十六世紀に於て、愈々
 之が設立を見るに至れり。これ即ち近世に於ける中學校の始めなり。
 第六節 女子教育 中世紀の後半に至りては女子教育も發達せり。僧院學校に
 入りて尼となれる人の中には、なか／＼に學問ある人ありき。アペラルが生徒の
 中に、クロイゼといふ才色雙絶の女生徒ありて、アペラルは之と關係を生じ、遂に其
 爲めに其位階と名譽とを失ひしは前に言ひしが如し。

武士の階級にありては、女兒は十歳前後までは母の許にありて、宗教讀み書き及び
 當時の作法を習ひ、それより男兒の如く侯伯の宮廷に上りて侍女となり、主君及び
 夫人に給仕す。此場合には、男兒の如く、一の監督者ありて、一の稽古所を設け、讀み
 書き、作詩、唱歌、樂器の奏し方、宗教及び拉丁語を學ばしめ、此時代に女子を尊びたる
 に答ふるだけの特別の威嚴を保つ素養を爲しき。庶民の女兒は寺領學校に通ふ
 か、又は都府學校に入りしも、其數は極めて少なかりき。

第七節 宗教的の復活 中世紀の末に及びては、當時の宗教が形式に流れて生命
 なく、宗教の本旨に遠ざかるに至りしに對し、宗教の本旨に返り、其博愛平等の精神
 より、貧民教育に着手したる人あり。之をゲルハルド、グロートと爲す。

グロート(一三四〇—一三八四)は、共同生活協會 (Brüder des Gemeinsamen Lebens) を組
 織し、會員は皆信心堅固にして、自力にて生活し、公共の爲めに盡し、實に清淨なる生
 活を爲し、法王の保護を得て貧民教育に着手し、北獨逸にては、非常なる勢力を以て
 廣がり、近世の始めに至るまで、其事業残れり。此一派の起れるは、蓋し近世の始め
 に於ける文藝復興宗教改革の先驅と見ることを得べし。

此協會の建てたる學校は、初めは單に貧民に教育を施すにありしが、其世間より同情と信用とを得るに至りたるより、後には高等なる學校をも設立するに至れり。是等の學校にては、基督教の教義と共に知識を得しむることをも重んじ、嚴格なる宗教的訓練を施し、堅固なる敬神の念を養はしめんと計れり。従つてあらゆる學科は、すべて基督教の精神と關係して教へられ、生徒は宗教を人間の最も必要なる興味と信したりと言へど、決して知識を卑しむことをせず、有用なる知識を授け、又之を授くる善良の方法を工夫したるより、生徒は文學と科學的研究にも熱心し、是等の學校には、歐洲各國よりも生徒集まり來るに至れり。其教師の中にて名高かりしは、トーマス、エケムピスと、ニコラス、クザーヌスとにして、此協會の教育事業を助け、當時の宗教界教育界の弊風を矯むることに盡力したり。

第八節 中世紀の教育に對する批評 第一に中世紀人の教育の目的とせし所より言はん、之は一言に評することを得ず。主として中世紀人の教育に當りたる宗教家の作らんとする所は、基督教徒を作るにありといへど、武士教育及び庶民教育の目的は、基督教的教育を排斥せるにはあらざるも、寧ろ人間自然の發達を全う

し、己が生存する國家社會を發達せしめ行くが如き人を作らんと目的を執れり。蓋し中世紀には、二個の潮流が流れて各々其教育を爲せり。一は基督教を中心とし、之に宗教を助くる限りの希臘羅馬の古典を結び付けて人を教育せんとする超自然主義と、一は人間の自由の精神を伸ばし、其生れたる國家を發達せしむる如く教育せんとする自然主義と是なり。超自然主義が即ち宗教學校に現はれ、自然主義が武士教育庶民教育或は大學の教育として現はれたり。基督教の勢力を以てするも、チュートン種族固有の精神を抑へ得ざりしものが、武士教育庶民教育なり、而して此二主義の教育は、各々其源を異にしながら、又互に相補ひて中世紀人の教育を爲せり。即ち超自然主義に依りて、自然主義に出來得るだけの感化を與へんとしたるに依りて、當時野蠻と見るべかりしチュートン種族の精神は高尙にせられ、而して又自然主義は超自然主義が動もすれば生命を失ひ、此世と掛け離れんとするを引き止めて、之に新生命を附與したり。かくの如く、中世紀人教育の目的は二様に分れたるを以て、希臘の教育を美的、羅馬の教育を實踐的といふ如く、一言に評することを得ず。一面宗教的、他面自然的とも言ふべし。而して其宗教的教育に

對する批評は既に第三章に爲したれば、茲には一方の自然的教育に對する點に付きて批評せんに、先づ之を人間の性情其者より見れば、其体力を練り感情を抑へざる點に於ては、宗教的的教育に勝れるも、知力修養の點に於ては不十分にして、完全なる人格を練るべき理想より言へば、猶足らざるものあり。次に之を社會的方面より見れば、世界主義に反して國家主義を執り、己が國若しくは己が都府を盛んならしむる如き人を作らんとし、人類一致の情誼を重んずる精神に乏しく、一面國家主義に立脚しながら、他而世界主義を取り、國民たると共に世界の平和を計るが如き世界の民を養成せんとする理想には、猶進み得ざりき。

第二に右の目的の如き人を作る爲めに執りたる教育の方法につきて言へば、宗教的的教育の方は、第三章に評せし如く、教授に於ては宗教文學に關することを主として自然に關することを教へず、記憶力を練りて推理力を練らず、會々論理學の如きありといへども、唯アリストトールの三段論法を機械的に練習せしむるのみにして、歸納法を教へず、訓練に於ては、力めて感情を抑へ、身體を卑しめて性格を偏頗ならしめたり。武士教育の方は、教授に就きて言へば、武士たるに必要な武藝を習

はしめ、武士たる作法を見習はしめ、又多少の拉丁語を習はしめたる外、知力の修練としては殆んど見るべきものなく、訓練に就きて言へば、外部の境遇より武士たる心得を養はしめしも、其心の發達の順序を追ひて、其道徳心を導くが如きことなかりき。庶民教育に至りては、唯其實際上の必要に應じ、實際的教育を施しきといふ外に注目すべき價值なし。唯此時代の末に、自然科學例へば數學、物理學、醫學の如きが教授の材料として大學の課程に入り來り、又國家的意識の起り來るに付け、法學が大學の一科を占むるに至りし如きは、注目し置くべし。

第三に學說の點より見れば、此一千年間に、教育學思想と稱すべきものを見出すこと能はず。スコラスチカスの中には、教育意見ある人ありしも、これはた宗教的教育的思想の範圍を出でず。武士教育、庶民教育が宗教的的教育に對して、自然主義、國家主義を唱へ來りしを、一種の主張と見做さば、之も一種の教育意見と見做すことを得べきも、學說と言ふべき程のものにはあらず。強ひて之を求むれば、アルクイン、アベララ、トルマス、アクィナスの如きは、一定の意見を有しきと見るべきも、後世に影響せる程の價值を有せず。

第四に教育制度の上より見れば、此時代の教育の潮流に二派ありしに準し、其制度も亦二様になれり。即ち一は寺院學校、僧院學校、寺領學校が自ら一系を爲して、羅馬法王に纏められ、他は宮廷學校、都府學校が亦自ら一系を爲して、國君に纏められ、大學は一部は法王に、一部は國君に監督せられき。かく教育制度の中心が宗教的教育制度と國家的教育制度と二つに分れたることが、近世の教育史に於て、此二つの系統の間に争を生ずる本となり、之が爲め大に教育の發達を害することゝなれり。中世紀に於ては、此二つの教育制度が相互に調和せざりしのみならず、其各制度の間の連絡も十分に付かざりき。宗教的教育制度にありては、寺領學校は普通教育を施し、寺院學校、僧院學校は専門教育を施したるも、其普通教育と専門教育との間に明確なる連絡はなく、而して國家的教育制度にありては、宮廷學校と都府學校とは全く其設立の趣旨を異にし、其相互の連絡はなかりき。シャイレマン帝の如きは、宗教的教育制度に屬する寺領學校を保護獎勵して之を以て國民教育の場所と爲さんとせり。之に加ふるに、女子教育の制度としては別に設けられしものなく、制度の點より見れば極めて整はざりき。

講述者申す。西洋教育史は、希臘より始めて今日に及ばん豫定なりしが、起草するに骨折れて、此學年の末に及び、漸くに中世紀までを叙することを得たり。新に近世に入らんには、時間と紙數とに許さざる所あるを以て、余は讀者が此近世の分は、大瀨甚太郎氏著近世教育史（東京市神田區表神保町二番地同文館發行）に就きて研究せられんことを希ふ。

西洋教育史 畢

